レ判事と、ルコック探偵で、今はまつたく孤立無援、いたづらに冷嘲の的にされてしまつた觀があつた。

それにさうした雰圍氣は、何につけても意地わるく壓迫して來るので、兩人は怏々として樂しまず、顏色も次第に憔悴してゆくやうであつた。

けれども、二人が二人とも至つて自信力の强い人物で、これしきのことに希望を捨てようといふ考へは更にないのだ。

「ところで、かうしたら何うでせう。」とルコックは判事に說いた。「私はこれから監獄にはひりこんで、彼囚の行動を見張ります。さうすれば、きつといゝ土產がもつて來られると思ひますが。」

「それはいゝ思ひ附だ。是非試つてみたまへ。」

そこで、探偵は早速その實行準備に取りかゝつた。

メイの監禁されてゐる獨房の上が、恰度屋根部屋になつてゐるが、その屋根部屋といふのは、普通の大人が腰を屈めなければ入れないくらゐの狹さで、壁の穴から仄かな光線が忍びこんでゐるといふ、馬鹿に暗く、不愉快な部屋だ。ルコックは、或る日この屋根部屋へ忍びこんだ。それは恰度囚人が、二人の看守附添で散步に引き出されてゐる時刻だつたので、安心して目的の仕事をやることが出來た。

まづ鶴嘴で二三枚の床石を除けてから、下の板へ穴を穿けたが、その穴は摺り鉢形にして、上の方

が廣く、下へ行きしだいに狹く、獨房の天井へ拔ける部分は、僅かに三分位である。しかもその天井の汚點だらけな部分に、この穴が通るやうにしたので、囚人から感づかれる氣づかひはなかつた。

この作業の最中に典獄とゼブロール警部がそこへやつて來た。警部は閾際に突立つて、せゝら笑ひながら、

「はゝあ、これが君の觀測所か。」

「さうです。」

「氣持のわるさうな部屋だな。」

「そんなでもありません。毛布を一枚持つて來ましたから、それを敷いて橫になつてゐると、樂なものです。」

「君は夜晝、あの囚人を見張らうといふんだね。」

「えゝ、不眠不休の覺悟です。」

「仕事をする時間もあるまい。」

「それは大丈夫です。アブサント爺が食べ物を運んだり、使ひ步きをしたり、必要なときは私に代つて見張りもしてくれる筈ですから。」

警部は少し妬ましい氣持になつたが、强ひて豪傑笑ひをしながら、

「可憫さうにな。君がその穴から覗いてゐる恰好は——」

「どんな風に見えますかね。」
「顯微鏡で小蟲を檢べてゐる昆蟲學者にそつくりさ。昆蟲學者なんて奴は、そんなことで一生を終るんだな。」
「巧いことを仰しやいましたね。學者は顯微鏡を通して、昆蟲の習性や本能を發見するさうですが、私はその方法を人間に適用するのです。」
「うむ、成るほど。」
典獄は少し驚いた風であつた。
「私はあのメイなる囚人の祕密を、この穴から發見してお目にかけます。どんなに用心深い人間だつて、心の弱點を露はす瞬間といふものがある筈です。彼奴が人が見ないときに、どんな仕草をやるか、睡眠中に何か譫語をいひはしないか。どんな微かな吐息でも、身振りでも、顏付きでもいゝです——私は必然それを捉へるつもりです。」
思ひつめた決心が、その一語々々に迸しつた。典獄は初めて感に打たれたらしく、
「君のその勇氣が賴母しい。君は精力家ぢや。」
「賴母しいには賴母しいな、見當ちがひにしてもね。」警部も、不承無承に相槌をうつた。「しかし、これぢや警視廳の豫算をうんと取らにやなるまい。こんな仕事に大の男が二人もかゝつて、一々經費を拂はされるんだからね。」

ルコックは聞かぬ振りをしてゐた。
まづ〳〵隱忍して成功の日を待つが利口だ、と彼は考へた。成功——それが一等上品な復讐の仕方なんだから。
それに、要もない客に邪魔をされることは、この際迷惑でもあつたのだ。
典獄と警部がそこを立ち去ると、ルコックはいま穿けた穴のそばに毛布を敷いて、ころりと横になつた。
なるほど、この穴から覗くと、下の獨房の内部が手に取るやうに見える。戸口や、寢床や、卓子や椅子など、一と目に瞰下せる。たゞ殘念なことには、穴が小さいために窓際の僅かな場所と、窓そのものは、視界の外に逸してゐる。
間もなく門をガチヤつかせる音がする。囚人が散歩から歸つて來たのである。
メイは上機嫌だ。路々何か面白い話しをやつて來たらしい。やがて看守が扉に鍵をかけて廊下へ出て行くと、獨り殘されたメイは、監房の中を二三度歩き廻つた。それからブーランゼの小唄集を手に取つて、一時間以上も讀んでゐたが、それにも倦きると、今度は寢床へ長々と身を横へた。
彼は臥そべつたまゝ、身じろぎもせずに、長いこと靜然としてゐたが、夕餉時には跳ね起きて、さも美味さうに食事を取つた。食後は、燈火が消えるまで、例の小唄集に讀みふけつた。
燈火が消えてからは、ルコックは眼を使ふ代りに、耳を穴へ押しつけた。囚人が何か内心の祕密を

口へ漏らしはせぬかと、一生懸命聞き入つたが、メイは床へ入つてから、暫く溜息をついたり、微かにすゝり泣きのやうな聲を立てたりしてゐたけれど、語は一つも口を洩れなかつた。

翌くる朝、メイは遲くまで寢こんでゐたが、十一時ごろ朝餉の鈴が鳴りわたると、いきなり跳ね起きて、監房内を歩き廻りながら、好い聲で小唄をうたひはじめた。

デイオゼーヌ
お前のマントに庇はれて
わたしは美味い酒を飲み
そして氣まゝに笑ひます

歌つてゐるうちに、看守が朝餉を運んで來た。

その日一杯、メイの樣子は昨日と變りがなかつた。その晩も前夜も同一であつた。小唄をうたつて食つて、寢る。手や爪の手入れを念入りにやる。いかにも氣さくな、旅藝人といふ態度には些しも變りはなかつた。强ひて樂屋の道化者と變つた點をいへば、恐ろしく退屈してゐるらしく見えるだけであつた。

かうして六日六晩の間、附きつきりに監視したけれど、別段新らしい發見もなく、何一つ怪しい點もなかつた。

ところが一週間目になつて、ルコックはふと妙なことに氣づいた。それは、この囚人が唄をうたひ

だすのは、故意か偶然か、食事時に限つてゐることだ。しかも唄の文句は判で捺したやうに「デイオゼーヌ、お前のマントに庇はれて——」云々ときまつてゐるばかりでなく、恰度その時刻は、看守等が各監房へ食事を運ぶために、最も忙しい時なのである。

「この唄は相圖なんだ。」とルコックは考へた。「彼奴は唄をうたひながら、窓のところで何か怪しいことをやつてゐるにちがひない。」

惜しいことに、その窓の部分は、ルコックの穴からは見えない。しかし、明日は必ず突き止めてやらうと決心した。

で、翌くる朝早く、典獄の許へ行つて、

「今日は、メイを十時半に散歩につれ出すやうに命令して下さい。そしてその留守中に、私と一緒にあの監房へ來て下さい。」

几帳面な典獄は、規定を急に變更することを喜ばなかつた。

「何を見せようといふんだね。變つたことでもあるのか。」

「突き止めたわけではありませんが、ひよつとすると、重大なことが起るかも分りません。」

さう云はれると、無下に拒ねつけるわけにも行かぬので、看守に命じて、十時半にメイを散歩につれ出させた。

その後で、ルコックは典獄とゝもに、かの監房へ入つ行てつた。

やがて十一時の鈴が鳴ると、ルコックはメイの聲色を眞似ながら、例の小唄をうたひだした。

ディオゼーヌ

お前のマントに庇はれて

と、二行目をうたひ切らぬうちに、鐵砲彈のやうにひゆつと窓から飛んで來て、探偵の脚下に落ちたものがある。それは小さな麵麭の片だつた。

それを見ると、典獄は雷でも落ちこんだやうにぎよつとして、口を開いたまゝ立ちすくんだ。

ルコックは素早くその麵麭片を拾ひあげた。

「これは祕密の通信だ。彼囚は此房で手紙の遣り取りをしてゐるんだ。」

と、典獄が眼の色變へて駈け出さうとするのを、ルコックは引き止めた。

「どうなさるんです？」

「どうもかうもあるものか。看守等を取調べて、內通者を嚴罰するのだ。發見出來なければ、皆んな首にするつ。」

「まあ〳〵、靜かに、靜かに。私の考へでは、看守がわるいのではなくて、毎朝食事配りに手傳つてゐる囚人の仕業だとおもひます。」

「そんなことは何うでもいゝ。」

「いや、どうでもよくはありません。今これを發表すれば、眞相を突止めることが出來ません。囚人

に內通するぐらゐの奴は、責めたつて實を吐くものですか。だから默つて嚴重に眼をつけてゐて、後に現場を取り押へる方がいゝと思ひます。」

「成るほど、それも有理だな。とにかく、その麵麭片のなかに何が入つてゐるか調べてくれたまへ。」

「私は今朝セミュレ判事に、珍らしい土產をもつて行くと報告しておいたので、きつと待ちかねてゐるでせう。この麵麭片は判事殿のお樂しみに持つて行つてあげようではありませんか。」

典獄の顏は曇つた。この一件は自分の面目上、判事へ祕密にして貰ひたいことは山々だが、さうも云ひかねるので、

「では俺も一しよに行かう。」

と、ルコックの後について、裁判所へ出かけて行つた。

室で書記を相手に書類を調べてゐた判事は、ルコック等の只ならぬ顏色を見ると、椅子から跳びあがるやうに腰をうかして、

「何か變つたことがあつたかね？」

探偵は默つて、かの麵麭片を卓子へ置いた。

早速それを割いてみると、中から出たのは、小さな紙玉が一つ——それは極めて薄い紙を丸めたものであつた。

判事はそれを掌にひろげて、ちよつと見詰めてゐたが、

「おい、これは暗號手紙ぢやないか！」
拳骨でぐわんと卓子を叩いた。
「ゆつくり研究しませう。」
ルコックは落ちついたものだ。そしてその紙片を讀んでみると、
二三五、一五、三、八、二五、二、一六、二〇八、五、三六〇、四、三六、一九、七、一四、一一八、八四、二三、九、四〇、一一、九九。
これだけだ。ところ〴〵コンマで切つて、數字を列ねたものに過ぎない。
「これぢや仕樣がない。譯がわからん。」と典獄がつぶやいた。
「いや、どんな暗號でも、讀めないといふ理窟はありません。素人の私だつて、多少心得がありますよ。」
「君にこの暗號が解るかな？」
「ゆつくりかゝれば、きつと解けます。」
自信あるもゝ如く答へて、ルコックはそれを衣囊に收めようとすると、
「もう少しこゝで考へてみたまへ。」
判事が殘念がるので、また取り出して、暫く見つめてゐたが、
「解りました！」

「えつ、解つたか？」
判事も、典獄も、書記も、その案外早く解けたのに驚いたのであつた。
「どうやら解つたやうです。」
とルコックは謙遜した口調で說明をはじめた。
「これは多分、二重書籍式といふ暗號で、ごく簡單な方法です。この方法によると、手紙を書かうとする者は、まづ臺帳となるべき書籍のどの頁でも、當てずつぽうに開けて、必要な語が見つかると、その頁の初めから何字目かといふことを數へて、その番號を書き、頁の丁附は最初に出しておきます。つまりこれ等の數字は、頁の丁附と、語の番號を現はしてゐるのです。」
「簡單なものだね。」と判事はひどく感心する。
「えゝ、樣式は簡單ですが、解く段になると、可成り面倒が伴ひます。といふのは、普通の場合ならどんな書籍を臺帳に使つたか見當がつかないからです。しかしこのメイは囚人で、所持してゐる書籍は、ブーランゼの小唄集だけですから、雜作もなく判りますがね。」
典獄は早くもその小唄集を取りに駈けだした。すると、
「典獄殿」ルコックは呼びとめて、彼囚に氣取られるといけませんから、我々が此室で小唄集を使ひ終るまでは、彼囚を監房へ入れないやうにして下さい。」
「大丈夫だよ。」

いひすてゝ典獄は駈けていつた。彼もどうやらこの事件に熱中し始めたやうだ。そして間もなく、かの小型の本を持つて歸つて來た。

ルコックは眞先にその書籍の第二百三十五頁をひろげて、語の順序を數へはじめた。

さて、暗號手紙の數字順に拾つてみると、まづ十五字目の語は「私」で、更に其語から三字目と、それからまた八字目の二語を合せて「告げた」となる。それから二十五字目は「彼女に」で、更に二字目が「貴下の」十六字目が「要求」と出た。

そこで、それらの語を綴り合せると「余は貴下の要求を彼女に告げた。」といふ文章になる。

「巧い！」

聞いてゐた三人は、思はず感歎の聲をあげた。

ルコックは、なほ手紙のつゞきを調べたが、やがて全部の暗號を解き終ると、得意滿面で、高々と讀みあげた。

私は貴下の要求を彼女に告げた。彼女は承諾し、我等の安全は確保された。我等は貴下の命令を待つ。希望を持て！　勇氣を持て！

一九、疑心暗鬼

暗號手紙は、ルコックの智慧で首尾よく解きは解いたが、その内容は期待に背いた。大山鳴動して

鼠一疋の觀があつた。

これによつて、メイに通信をする仲間のあることは確かめられたけれど、取り立てゝ有力な手がかりが得られたといふわけではない。折角希望に輝きかけた判事の眼も、曇りを帶びて來た。書記は書記で、やはりメイの方が役者が一枚上だといふ自説に逆戻りをしたらしかつた。

「ルコック君、苦心のし榮えがなくて、殘念だつたね。」と典獄は冷嘲した。

「しかし、無駄なことはありません。この暗號手紙は直接の手懸りにならないとしても、あの囚人の身分について、私の見方が正しいことを證明してくれたではありませんか。」

やりかへされて、典獄は少し憤然となつた。

「うむ、その點は、俺やゼブロール警部が見違ひをしてゐるやうに、偉い名士だとしてもいゝ。しかし、そんな名士なら、家族や親戚や、大勢の親近者もあるだらうし、外界にもいろ〳〵重要な關係をもつてゐる筈だ。しかるに、監房に入つてから三週間も經つた今日まで、それ等の關係者から、警察へ行方不明の屆出もなければ、さうした噂も聞かないのは何故だい。君はまだこの點を考へてみたことがないんだらう。」

ルコックもこれには僻易した。彼とても、この點は絶えず頭を惱ましながら、まだ解決に至らない問題なのである。しかし賣り言葉に買ひ言葉といふことがある。あまり辛辣に衝かれると、却つて攪ねかへしたくなるものだ。

「何ですつて？——貴方がさう云はれるなら、私だつて考へがあります——」
何か云はうとすると、
「まあ〳〵お互ひにさう激昂してはいけない。」と判事が仲裁的に口を入れた。「事件の探査は、皆が協力しないと巧く行かんよ。それよりも、今後の方針を立てようではないか。」
ルコックも成るほどと思ひかへして、笑顔を見せながら。
「幸ひ暗號文の鍵が解つたのですから、それによつて、メイが今後仲間と取り交はす密書を片つ端から検べれば、必然有力な手がかりが得られませう。さてそれを行る前に一つ試したいのは、この暗號手紙を我々に都合のいゝ文句に變へて、明日の食事時に、アブサント爺に云ひつけて、例の小唄を相圖に窓から投りこませ、私は屋根部屋から覗いてゐて、彼囚がそれをどう處置するかを見とゞけたいのです。」
探偵は獨り悦に入つて、自分で呼鈴を鳴らして、小使に薄葉紙を幾枚か買はせた。
それから早速かの小唄集を繰りながら　前の手紙の筆癖を綿密に眞似て、僞せの暗號手紙を一つ作り上げた。その間十分とかゝらなかつた。
文言はかうである。
私は貴下の要求を彼女に告げたが、彼女は拒絶した。貴下の立場危し。我等は貴下の命令を待つ。私は懸念に堪へない。

探偵は書きあげると、その紙を丸めて、麵麭片の中へ入れた。
「明朝になれば判ります。」
彼は傲然としていつた。
明朝、今から二十四時間！　それは、彼に取つて百年にもわたる長い時間であるかのごとくおもはれた。
彼はアブサント爺に、それを投りこむ方法をくはしく教へこんで、自分は例の屋根部屋へ昇つて行つた。
その晩はまんじりともしないで、翌くる朝、夜が明けるのを待ちかねて、床の穴から監房をのぞくと、メイはもう起きて、寢臺の傍にぢつと坐りこんでゐた。
メイはやがて監房内を歩きはじめた。ひどく心配さうな風で、
「困つたなあ。あゝ、實に困つた。」
こんなことを繰りかへしてゐるのだ。
ルコックは上から覗いてゐて、
「はゝあ、お前は手紙が昨日とゞかなかつたので、心配なんだらう。だが我慢しろ、今に俺の書いた手紙を讀ましてやるぞ。」
かう心に呼びながら、ぢつと彼の行動に眼をつけた。

そのうちに食事時が來た。廊下では看守達の食事を運ぶ跫音が騷々しくなつて、方々で高聲な話し聲が起り、それに木靴の音がまじる。

やがてメイは、例の小唄をうたひだした。

デイオゼーヌ
お前のマントに庇はれて
わたしは美味い——

三行目が終らないうちに、窓から飛びこんで來た麵麭片が、微かな音とゝもに石の床へ落ちた。と、唄聲がぱつたり止つた。

ルコックは、囚人の瞬き一つもみのがさじと、一心に覗いてゐると、メイは最初に窓の方を見た。それからきよろ〳〵四邊を見廻した——變なものが飛びこんで來たと當惑したかのやうに。

暫くして、彼はその麵麭片を拾ひあげると、掌に載せて怪訝さうにうち眺めた。さも驚愕した表情を湛へてゐる。この容子を見たら誰だつて、彼が初めてこんなものを拾つて、驚いてゐるとしか思へないだらう。

やがて彼は、につと口許を歪めて、「俺はそんな馬鹿ぢやないぞ。」といひたげに肩をすぼめた。が、ふと何か思ひついた風で、素早くその麵麭片を開いたが、中から紙玉が出たのを見ると、彼は眼を丸くした。

「何故あんなにびつくりするんだらう？」

ルコックは不思議でたまらなかつた。

囚人はその紙玉をひろげて、見つめてゐるうちに、厭な顏をして眉をよせた。何だか數字を見たゞけで、文意を了解んだらしくも思へるのだ。と、彼はいきなり戸口へ行つて、破れよとばかり扉を叩きながら、

「看守殿、來て下さい、看守殿！」

と喚き立てた。一人の看守がそれを聞きつけて、

「おい、どうした？」

扉の覗き窓から聲をかけると、

「判事殿に申し上げたいことが出來ました。大至急お願ひします。」

「よろしい、すぐに迎へに行つてやらう。」

探偵はそれを聞くと、密と屋根部屋を降りて、裁判所へ先廻りをして、セミュレ判事に委細の報告をした。そこへ看守が迎へに來たので、

「判つてゐる。今出かけようとしてゐるところだ。」

判事はさういつて、ルコックと一緒に監獄の方へ行つた。それには典獄も役目として立ち合ふことになつた。

間もなく監房の扉の開く音がすると、メイはすつくと起ちあがつて、極めて謹直な姿勢で、人々から話しかけられるのを待つた。

「俺を呼びによこしたのはお前か？」

「はい。」

「何か申し立てがあるさうだな。」

「是非御耳に入れたいことが出來ましたので。」

「よろしい。では、他の人達に遠慮して貰はうか。」

「それには及びません。實は皆さんの前で申し上げたいのです。」

メイは一歩退ると、體を斜にしてぐつと反りかへつた。彼は大いに雄辯を振はうとするときは、何時もかういふ姿勢を取るのであつた。

「皆さんが御覽になると、私は正直者に見えますか。それとも詐吐に見えますか。旅藝人だつて實直で、名譽を重んずる者があるのです。」

「そんなことは何うでもいゝから、肝腎の用件を云へ。」

「では申し上げますが、今此房へ、こんな紙片を投げこんだ者があります。數字が澤山書きこんであるやうですが、さつぱり譯がわかりません。」と、例の紙を判事へ手渡しゝて、「しかもこれは、麵麭片の中に隱してあつたのです。」

役人達はぎつくり參つた。が、メイはそんなことは氣にも止めない風で、

「多分、窓を取違へて投込んだらしいです。囚人仲間の仕業だとすれば、庇つてやりたい事は山々ですが、私のやうに斯う無實の罪で威嚇されてゐる者は、よほど要心しなければ危いんですからね。」

「詐を吐け。これは、お前に通信するために投げこんだものであらう。」

判事は聲をはげまして、相手をぐつと睨みつけたが、メイは怯まぬばかりか、飽くまでも率直な口吻で。

「そんなら、貴官を御呼びした私は大馬鹿者ですね。私へ宛てた手紙なら、祕密にしておくのが當然ではありませんか。私がこれを拾つたことは、誰も知らないんですから。」

「だが、お前が詐をいつてゐることを、俺が證明したら、何うする？」

「貴官こそ詐吐きです。いや、實はその——」

判事はもう、そんな言葉を耳にもかけなかつた。すぐに探偵を顧みて、

「おいルコック君、君が暗號文を解いた次第を、彼に聞かしてやりたまへ。」

すると、メイの態度は颯と變つた。

「はゝあ、例の刑事さんですね。かうなると、私は可憫さうなものです。刑事さんから有罪と睨まれた者は、大てい罪に陷されてしまひます。それは誰でも知つてゐる事實です。そんなわけで、私が實際手紙を受取つたのでなくても、罪を着せようと思へば、證據はいくらでも、出來ませう。」

ルコックはあまり癪にさはつて、頭から怒鳴りつけようと思つたが、判事が身振りで制めてゐるので、ぢつと我慢した。

それから、卓子の上に載つてゐたブーランゼの小唄集を開けて、暗號の數字と語を一々照らし合せ、それが彼に宛てた密書に相違ないことを指摘した。まつたく延引ならぬ證據で、普通の犯人なら一も二もなく恐れ入るべきところである。

しかし、メイは一向そんな氣色がなく、子供が新らしい玩具を見て吃驚した時のやうに、

「これは珍らしい。こんな難かしい暗號がすら〳〵解けるとは、さすがに探偵は偉いものですね。」

と、空嘯いた。

こんな圖太い囚人にかゝると、まつたく何うすることも出來ないのだ。

セミュレ判事は、もう何事も追窮しないで、一同と共に監房を引きあげた。彼は默々として、一まづ典獄室へ入ると、どつかと椅子に腰をおろして、

「我々はとても敵はん。彼奴はいつもあんな調子で、一度も尻尾を出したことがない。實に不思議な奴だね。」

「だが、突然にあんな芝居をやり出した理由が解りませんね。」と典獄が不審をうつた。

「それは、昨日の暗號手紙を私が横取りしたことに感づいて、あれは全然私が僞造したものだと、判事殿に疑らせる魂膽ぢやないでせうか。」とルコックはいつた。「つまり彼は山を張つてみたのです、

それで胡魔化し通せば、私の面目玉がつぶれて、彼は一箇のメイで濟ましてゐられるわけです。だが不思議ですね。彼はどうして、私があの手紙を發見したことや、屋根部屋から覗いてゐることに感づいたでせう。何と考へても説明の出來ない謎ですね？」

探偵と典獄は、互ひに疑ぐりぶかい視線を投げ合つた。

典獄は、ルコックが腹心のアブサントと二人で、何をやつてゐるかも分らぬといふ疑ひがあつたし、ルコックの方では、嫉妬ぶかいゼブロール警部がこの典獄と牒し合せて、どんな妨害をやつてゐるか知れたもんぢやない、といふ疑念をもつてゐるらしかつた。

判事は判事で、すつかり意氣沮喪して、殆んど自暴自棄になつてゐた。

「俺も馬鹿な眞似をやつたものだ。神聖な裁判官が、こんな不確な方針を助けて物笑ひになるとは、愚の至りだね。」

失敗の餘憤からそんなことを云つたとしても、それを聞かされるルコックは面白くなかつた。彼は眞蒼な顏をして、眼には惜し涙をうかべてゐた。彼は一時間に二度も侮辱されたのである。先刻はあの圖太い囚人から、そして今は信頼する判事からだ。

「俺は運がわるいのだ。しかし實に殘念だ。」

と彼は心中に地團駄ふんだ。

その日は、そんなことで有耶無耶のうちに終つたが、判事は部下に向つて心にもない暴言を吐いた

ことを後悔したのであつた。で、その後はルコックと顔を合せるごとに、成るべく彼を宥めて、さうした蟠まりを除くやうに努めた。

ルコック探偵は相變らず判事を助けながら、孜々としてこの難事件の探査に心膽を碎いた。

ところが、さうしてゐるうちに、判事はすつかり氣落ちがしたらしく、

「もう我々の企てを斷念しようではないか。俺はあきらめたよ。メイといふ名前でも構はないから、彼を公判に附して、無罪なり有罪なり決定を與へる方がいゝと思ふ。」

そんなことを云ひだしたが、間もなく、判事はそれやこれやの心勞で著しく健康を損ねたゝめに、當分の間休養せねばならぬことになつた。

判事が病床に親しんでから八日目に、ルコックが見舞にゆくと、

「何にしても、あの囚人は苦手だ。言ひ拔けが巧みで、どうしても素性を明さないんだからなあ。」

判事は泌々歎息したが、思ひ做か、顏もひどく憔れて見えた。

「御有理です。だがこゝに非常手段が一つあります。」とルコックは思ひきつて獻言した。「それは一度あの囚人を逃走して、直に後をつけて行つて、彼が巢窟へ入つたところを見屆けて檢べるのです。」

二〇、最後の手段

頑固に實を吐かない囚人をわざと逃走させ、彼が好い氣になつて、仲間の輩と會合てゐるところを

一網に打盡して、その正體を突き止めるといふ手段は、今ルコックが發明したのではない。事は祕密だけれど、司法官憲が窮したときに、しば〳〵もちひて來た非常手段なのである。

セミュレ判事も、さうした方法のあることを知らぬではない。が、今ルコックがそれを申し出ると、何故かひどく不機嫌になつて、

「なに、囚人を逃走させるんだつて？　君は氣でも狂つたか？」

「そんなことはありません。」

「でなければ、そんな馬鹿な眞似は出來やしないよ。」

「何故ですか？　有名なシャボアソオ夫婦殺害事件のときも、この手段を用ひたのです。あのとき逮捕られた犯人等は、夫婦を殺害したことだけを認めて、十五萬法の紙幣を强奪した罪狀はどうしても自白しません。その紙幣も何處へ隱匿したのか、更に手がゝりがないので、已むを得ず、豫審判事ペトリジャン氏の意見によつて、その犯人の一人を逃亡してやると、三日目に彼奴が葦畑へ行つて、埋めておいた紙幣を掘りにかゝつたところを、改めて捕縛したといふ前例もあるではありませんか。今度の犯人だつて——」

「もういゝ、前例がどうあらうと、そんなことは許されるものでない。君は二度とそれを云ひだしては可かん。」

探偵は落膽して首をうな垂れた。

ところが、一分と經たないうちに、判事の方からいひ出した。
「もしもあの囚人が逃走るとすれば、君はどうするつもりか。」
そらお出でなすつたと、ルコックは内心に雀躍して、
「私は死神のやうに彼奴の後を追けます。」
「しかし、彼は君の姿を認めたら、警戒するだらう。」
「巧く變裝すれば大丈夫です。探偵は、變裝術が名優におとらぬくらゐでなければ、普通の警官に較べて偉いといはれません。私は變裝術には相當自信をもつてゐるつもりです。老人にでも、若者にでも、顏色の白い黑いは無論のこと、堂々たる紳士にでも、破戸漢にでも、化けようと思へば自由自在です。」
「君にそんな偉い技倆があるかね。」
「名人とまでは行きませんが、三日以内に、變裝して貴方の前へ出て、些しもその變裝を氣づかれないで半時間お談しするくらゐのことは出來ます。」
「だが相手は一通りならぬ智慧者だ。突然逃走してやつたら、彼は我々のくはだてに感附きはしないか。」
「彼は多分その理由を覺りませう。」
「それが解つてゐながら、何故こんなことをいひ出すんだ？」

「私は成算があります。メイは自由になると早速困ることには、一錢の金も所持してゐないのです。手に職がないから生活に差支へる。けれど食はずにはゐられません。そこで何か仕事を見つけるとしても、さうした苦しい生活は、長くつゞくものではありません。住むに家なく食ふに麵麭なしといふ日が續けば、自分の財產が戀しくなつて來て、何等かの方法で友人知己と交通をはじめます。それに私の見張が弛んだと見れば、彼はいゝ氣になつて、正體を現はすにちがひありません。そのときに踏みこんで捕まへるのです。」
「だが巴里を出たら、そして外國へ高飛びをしたら、君は何うする。」
「何處までも喰附いて行きます。私は田舍の方に、伯母から貰つた二萬法ほどの不動產があります から、いざとなれば、それを賣り飛ばしてゞも出かけます。私は彼奴から子供のやうに翻弄されました。この恥辱を雪がずにおくものですか。」
「もしも君をまいて、姿を晦ましたら何うする。」
「そんな事は出來るものぢやありません。」探偵は笑ひながら、しかし確信をもつていつた。「さうなつたら私も命がけです。」
「君がその決心なら、俺も出來るだけ援助しよう。ところで、メイを逃がしてやる順序はどうしたらいゝだらう。」
「まづ彼囚を他の監獄へ移して頂けば好都合ですが、その命令は突然に發して下さい。といふのは、」

ぐづぐづしてゐる間に他の者にかんづかれると、此方の計畫が筒抜けに彼囚へ知れる虞がありますので——」

すると、判事は怪訝な顏をして、

「ふむ、君は監獄の規律が紊れてゐるといふんだね？」

「さういふ意味ではありませんが、彼囚はたしかに、外部から通信を受けとつた形跡があります。それについて私はどうも、ゼブロール警部を信用出來かねます。」

「それは少し云ひ過ぎはしないか、ルコック君。」

「でも、怪しまないわけに行きません。第一、メイは私が屋根部屋から覗いてゐることを、彼は知つてゐたではありませんか。アブサントの投げた紙片を彼がひろつたときの樣子が、それを證明してゐます。」

「それは確かに感づいてゐたらしいな。」

「どうしてメイにそれが判つたでせう。誰か、彼に感づかせるやうに助けた者があるので、私の苦心も水の泡になつたのです。そこです、私がゼブロール警部を怪しからんと思ふのは。」

そこまで聞くと、判事も少し顏色を變へた。

「それはどんな職業にも競爭者や反對者はあります。」とルコックはつゞけた。「私はゼブロール警部の正直は疑ひません。何萬の金を與るといつても、一人の囚人をも取逃がす人ではありませんが、た

だ、私を失敗させるためなら、十人の囚人の罪證を湮滅するやうなことも平氣でやります。警部は、私を危險な競爭者と見てゐるらしいのです。」

それぱかりでなく、ルコックはこの頃警視廳方面でめつきり評判がわるくなつてゐる。彼が身の程しらぬ野心から、アブサントのやうな老骨を使つて、怪しげな證據を捏造し、セミュレ判事を籠絡してゐるために、事件が進行しないといふやうな取り沙汰が專ら行はれてゐるといふことも、彼はつけ加へた。

要するに彼はこれを機會に、自分の苦しい立場をじゆん〳〵と判事に愬へたのである。

「ようし、左樣いふわけなら、俺はこれから裁判所へ行つて檢事總長に會つて、君の希望が通るやうに懇談しよう。君も來たまへ。」

判事は病床から起きあがると、すぐに身支度をはじめた。

やがて二人が玄關前で馬車に乘らうとしてゐるところへ、大家の執事らしい定服を着た男が、つと判事の傍へやつて來た。

「あゝ、誰かと思つたら、ジャンではないか。御主人の御病氣はどうだね。」

判事が問ひかけると、その男は、

「有難うございます。お蔭さまで段々とよろしい方でございます。今日は主人の命令で、あの事件がその後どうなつたか、伺つて來いといふことでございまして——」

「先日御手紙をあげてから、別段に變つたこともないよ。御主人によろしくいつてくれ。俺も病氣が癒つて、この通り外出出來るやうになつたといふこともね。」

「はい。」

その男は丁寧にお辭儀をした。

ルコックは判事と並んで馬車に乘つたが、やがて馬車が動きだすと、

「今のは、デスコルバル家の執事だよ。」

と判事が敎へてくれた。

「最初にこの事件を擔任されたデスコルバル判事殿の？」

「さうだ。彼は二三日前にも、あの執事に手紙を持たして、メイの審問がどうなつたかを訊きによこしたよ。」

「では、デスコルバル判事殿も、まだこの事件に興味をもつてをられるんですね。」

「それは熱心なものさ。本來自分で處理すべき事件だつたからね。怪我をしたゝめに俺の手へ廻されたのが殘念でもあらうし、自分ならもつと手際よく運つて見せるといふ自負心もあるんだね。しかし俺の方では、又彼に代つてもらひたいくらゐだ。」

だが、ルコックはさうは思はない。實際、セミュレ判事のやうな寬容な人であればこそ、彼の突飛な方策を授けてもくれるし、一旦叩きうけた上は、飽くまでそれを實現させてくれるのだ。だから、

彼はこのセミュレ判事に對して、十分に感謝すべき理由をもつてゐるのである。

やがて裁判所へ着くと、判事は祕密に檢事總長を說いて、ルコックの獻言を採用することを納得させた。その結果、メイは取敢へず他の監獄へ移されることに內定した。

その日の午後に、シュバン婆は保釋を許された。

竊盜罪で入監してゐた倅のポリットは、突然法廷へ呼び出されて、禁錮十三個月といふ手酷しい判決が下された。

判事は、かうてきぱきと管掌事務を片づけてしまつた後は、最も重大なメイ事件については、單に時期を待てばいゝのであつた。

二一、放たれた鳥

四月十四日――囚人メイが審問される當日である。すでに他の監獄へ移されたメイは、この日喚問狀をうけた囚人等とともに、馬車で裁判所へ護送されることになつてゐる。

午前九時。その囚人馬車はまだ見えない。

警視廳の界隈を、一人の無賴青年がぶらついてゐる。見すぼらしい黑の寬上衣を着て、だぶ〳〵のズボンを穿き、腰のあたりを革のバンドで締めて、小汚ない帽子を阿彌陀にかぶつてゐる。赤い絹の襟飾は、きまつて情婦から頂戴したものだ。不健康な顏色と、きよとんとした眼付きと、無精な風

采、もぢや〳〵の口髭、それ等はすべて無賴青年に特有のものである。

ヴエヌスが大海から生れたといふ神話を信ずる者は、どうしたつて、この無賴青年が巴里の泡と渣から生じたものだと信じないわけにはゆくまい。

時は陽春の最中、殊にこの日はよく晴れわたつて、大氣は清々しく、チユイルリー外苑のマロニエの若葉が青々と空際を彩つてゐる。こんなときに彼の無賴青年は、生に滿足し、無爲の生活を樂しんでゐる風がある。

彼は往來の人や、セエヌの河浚ひ作業などを眺めながら、河岸をぶらついてゐたが、ふと中年の紳士と出會して、二言三言、ひそ〳〵話をした。その紳士といふのは、すつきりとしたハイカラな服裝で、長い頤鬚を生やし、眼鏡をかけ、絹の手套をはめてゐる。その風采態度は、何處から見ても、尊敬すべき金持紳士だ。

兩人は眼鏡屋の飾り窓の前に立ちどまつて、熱心に眼鏡をのぞいてゐる。

時々、警官や探偵らしい人々が、何か緊急な報告でもあるかして、急ぎ足にその前を警視廳の方へ歩いてゆく。すると、件の紳士と無賴青年は、交るゞ〳〵彼等を呼びとめて、物を訊ねる。呼びかけられた人は、問ひに答へると、すた〳〵行つてしまふ。

「しめたぞ。また氣がつかずに行つてしまやあがつた。」

兩人は顏を見合はせて笑つた。いかにも面白さうだ。

無賴青年はルコック、紳士はアブサント爺の變裝したのである。

「同僚が氣づかないのも無理はないよ。」と紳士に化けたアブサントは大得意で、「この窓硝子に映つた姿を見ると、自分でさへお見それ申すくらゐだ。ねえルコック君、僕をこんな風に變へてくれた君の變裝術はまつたく巧いものだ。」

「おい、氣をつけろ。囚人馬車が來たぞ。」

いふより早く、ルコックは、そこいらに投りだしてあつたシヤベルを拾つて、河緣の砂を掘るまねをはじめると、アブサントは積み重ねた材木のかげに隱れた。

囚人馬車は、けたゝましい音を立てながら裁判所の方へ駈けて行つた。

と、その馬車は、一度裁判所の構內へ入つてから十五分ほど經つて、また門外へ引きかへして來た。そして馭者は道傍に馬車を停め、馭者臺から飛びおりると、馬に蔽布をかけ、それからパイプを啣へて悠然と何處かへ行つてしまつた。

暫くして、馬車の戸が密と開いた、と思ふと、內から怖々に蒼白い顏を出した者がある。ささやかな囚人メイだ。

彼は忙しく四邊を見廻はしたが、誰もゐない。そこで彼は、猫のやうに身輕に地面へ跳びおりると、音もなく馬車の戸を締めきつてから、除かに橋の方へ歩いていつた。

メイは顏をしやんと揚げて、少しも惡びれずに悠々と歩いた。たつた今囚人馬車を脫けだしたばか

りなので、駈けると却つて怪しまれると思つたのか。それとも、捕まる氣づかひがないと高をくゝつたのであらうか。

尤も風采を見たゞけでは、些しも脱走囚らしいところがない。何故つて、先きにマリアンブール旅館に託けた衣類入りの旅行鞄が、彼の手許に達いたので、それ以來、小綺麗な服を着込んでゐるからである。知らぬ人が見ると、工面のいゝ職人が郊外へ遊びに出かけるのであらう、とでも思はれさうな恰好だ。

ところが、セエヌ河を越えて、サンジャック街までゆくと、今まで確かりしてゐた歩調が亂れて來た。何か目標でも探すやうに、右や左へ眼をくばる。

やがて一軒の古着屋を見つけると、彼は大急ぎで其店へ入つて行つた。

影のやうに後を躡けてゐたルコックは、反對の側の大門の下に立つて、煙草にマッチを摺るのに餘念のないやうな風をしてゐると、アブサント爺があたりを憚りながら寄つて來た。

「彼奴、もつと安い服と取り替へて、幾らか金に有りつかうつていふんだらう。この際金を持たれると困るね。」

「まア待て。あの店の爺は、通りがかりの客から着物など買ひさうな男でない。」

といつてゐるうちに、メイはよろけながら往來へ出て來た。その顏には、溺れた者が辛と取ついた木片が折れてしまつたといふやうな困惑の色が、顯々と見えてゐた。

ルコックは、アブサントに寸時メイを託けるといふ相圖をしてから、つとその古着屋の店へ入ると、職務上の名刺を主人に示せて、

「今の男は、何の用で此店へ來たんだね？」

「實は前々から引かゝりがありますので。」主人は困つたといふ顏つきで、吃りながらいつた。「今から二週間前に、私の同鄕の男が一つの包みを持つて訊ねてまゐりました。」

「お前さんはアルザスの人だらう？」

「えゝ、左樣です。その男は街角の酒屋へ私をつれだして、上等の葡萄酒を一本おごりました。そして、持つて來た包みを、その男の從弟が取りに來るまで、預かつてくれまいかといふ賴みです。後で從弟が來て合言葉をいつたら、品物を渡してくれといふことでしたが、私はきつぱりと斷りました。といふのは、先達も或る人から同じやうなことを賴まれて、好意づくで預かつたら、それが贓品だつたので、私は罰を喰ひました。そんなことで懲々してゐた矢先ですから、斷りました。諾といへば謝禮はたんまり與るといふやうなことをいつてゐましたが、係り合ひになるのが厭ですからね。」

主人はさういつて、一息ついた。ルコックはもどかしくなつて來た。

「それから何うした？　早く話してくれ。」

「結局話しが纏まらないものですから、その男は酒代を拂つて、歸つてゆきました。私はそれつきり忘れてゐますと、だしぬけに今の人がやつて來ました、自分に渡すべき包みを預かつてゐはしないか

といつて、變な言葉をいひました。多分合ひ言葉でせう。私はそんな品物を預かつた覺えがないつていひますと、あの人は眞蒼になつて、卒倒でもしさうな風でした。で、私は此奴てつきり怪しい人物と睨んだので、後で着物を買つてくれといふ賴みもあつたけれど、綺麗に斷りました。」

「その二週間前にやつて來た從弟といふのは、どんな風な男かね？」

「脊の高い、可成り肥つた、赭ら顏の男でした。」

「さては、あの仲間の男だ！」ルコックは叫んだ。

「えつ、何ですつて？」

「お前さんに關係したこつちやない——お邪魔したね。事によつたら、警察へ來てもらふかも知れない——さやうなら。」

ルコックはそのまゝ古着屋を出たが、メイとアブサントは何處へ行つたか姿が見えない。こんな場合に、アブサントは、行先を町家の壁に白墨で印づけてゆく約束なので、ルコックはその矢印を辿りつゝ、サンジャック街の方へ曲つて行つた。

道々彼はこんなことを考へた。「古着屋のいつたことが事實だとすると、かの仲間の男は、實に機敏な奴だ。彼はメイが逃げる場合を豫知して、早くもその準備をやつてゐたのだ。その包みの中には、きつと、變裝に必要な衣類や、金や、贋の旅行券や、證明書——そんなものが入れてあつたにちがひない。」

なほも矢印を追うて、オデオン座の前まで行くと、紳士に化けたアブサント爺が、そこの本屋の飾り窓のところに立つて、さり氣ない風で、繪入り新聞の繪を覗いてゐた。

「奴はどうした？」

「彼處にゐるよ。」

なるほど、メイは向う側のオデオン座の石段に腰かけて、兩手で頭をおさへてゐる。多分、通りがかりの人に顏を見せまいとするのであらう。

彼は、尾行されてゐることに氣づいて、當惑してゐるにちがひない。巴里の眞只中に投げ出されたものゝ、懷ろに金はなし、これから何處へ行かうと思案にくれてゐるらしい。

「あの古着屋を出てから、彼奴はどんな風に歩いて來たんだい？」

「五軒も異つた古着屋へ寄つたが、駄目さ。それから往來で、古着を背負つた男に聲をかけたけれど、その男は返事もしないで行つてしまつた。」

「それは、彼が生活の苦勞を知らない證據だ。彼は仕事に有りつく骨法がわからないので、まごついてゐるんだよ。」

そのときメイは起ちあがつた。顏色は蒼白く、氣拔けがしたやうな風で、不決斷な眼附きをしてゐる。が、暫くして、何事をか思ひ定めたものゝごとく、石段を降りて、廣場を突き切つて、コメディイの方へ行つた。

「何處へ行くんだらう？」
アプサント爺が問ひかけると、
「僕は見當がついてゐる。そこで僕は先廻りをして、マリアンブール旅館へ行くから、後を賴むぜ。君はやはり白墨で矢印をつけながら尾行してくれ。僕はマリアンブール旅館へ行つて、奴が來なければ、一旦此處へ引きかへして、矢印を辿つて君等の後を追ひかけることにしよう。」
と、ルコックは、折から通りがゝつた辻馬車に飛び乘つて、北の停車場へ向つた。
やがて驛前で馬車を乘り捨て、マリアンブール旅館へ行くと、帳場では、女將のミルナー夫人が、前回に訊ねたときと同じやうに、椋鳥の籠に向つて、一心に獨逸語をしやべつてゐた。椋鳥は例によつて「カミイルや、カミイルは何處にゐるの？」といふ文句をくりかへしてゐた。
女將は變な風態の男が入つて來たのを見て、椅子を降りようともしないで、
「何か御用ですか。」
妙に力のない聲である。
「私は裁判所に勤めてゐる小使の甥ですがね。」ルコックは無精なお辭儀を一つやつて、「叔父は判事さんから大切な書類を此館へ達けるやうに命令つてゐるけれど、生憎リューマチで今日は歩けないものですから、私がお達けに來ました。これです、豫審判事さんからの召喚狀ですよ。」
女將はその召喚狀を讀んで、

「かしこまりました。直きに出頭ます。」
ルコックの無賴青年は默つて、また無精なお辭儀をして外へ出ると、仕濟したりとばかり、にやりと笑つた。前回は彼女から欺されたが、今度は此方が欺してやつたのだ。
彼は、サン・カンタン街のところに隱れて、樣子をうかゞつてゐた。
やがて、四十といふ齡にも似合はず、妖艶つぽい女將は、念入りな化粧をして、しなをつくりながら旅館を出て來たが、街角を曲ると、小走りに裁判所の方角へ行つてしまつた。
女將の姿が見えなくなると、ルコックは隱れ場所を出るが早いか、鐵砲彈のやう再びにマリアンブール旅館へ飛びこんだ。
帳場では、スリッツといふババリア生れのませたボーイが、獨りで留守を預かつてゐるのだが、彼は女將專用の肱掛け椅子に埋まつて、向うのもう一つの椅子に兩脚を投げだして、好い氣持に居眠りをしてゐた。
「起きろ、おい、起きんか！」
叱鳴りつけると、ボーイは頓狂な顏をして跳びあがつた。
「俺は警視廳の刑事だ。そら、この檢章を見たら判るだらう。お前に一つ賴みがあるが、是非やつて貰はにやならん。職務の妨害になるやうなことをすると、拘留だぞ。いゝか。」
「何でも仰しやる通りにいたします。」とボーイは顫へだした。

「なアに、ちよいとしたことなんだ。今こゝへ黒い服を着て、髪の蓬々と生え延びた客が來る筈だから、お前はその男に俺のいふ通りに挨拶をすればいゝんだ。一言一句でも間違つたら承知しないぞ。もしも異つた挨拶をすると、罪はお前にかゝるから、そのつもりでやつてくれ。」

「大丈夫です。私はいたつて物覺えのいゝ性質ですから。」

そこで、ルコックは、一字一句を嚙んで含めるやうに敎へこんでから、

「俺は、お前がこの通り實行するか何うかを見張つてゐなければならん。何處かよく見えるそして聲の聞き取れる場所へ俺を隱してくれ。」

ボーイは、すぐ傍の硝子戸をあけて、うす暗い室へルコックを案内した。

「此室から覗いてゐて下さい。聲もよく聞えます。」

間もなく訪問鈴が鳴つて、客がやつて來た。それは案のごとくメイであつた。

「女將さんにお話しがしたい。」とメイがいつた。

「女將さんつていひますと？」

「六週間前に私が此館へ來たときに、帳場にゐた女が、たしか女將さんだらうと思ふが——」

「あゝ、判りました。多分ミルナー夫人のことでせう。だが、お氣の毒ですね。此館はもう代が變りました。あの女は一ケ月前に此館を賣つて、以前にゐたことがあるといふアルザスの方へ歸つて行きました。」

それを聞くと、メイは、口の中で何かおそろしく呪つたやうなことをいつて、床を踏み鳴らし、

「私はあの女に請求したいことがあつてやつて來たんだがね。」

「では、私共の主人を呼びませうか。」

ルコックは隱れ場所から聞いてゐて、このボーイの要領のいゝのに感心した。

「いや、駄目だよ。前の持主へ行つてごらんなさいと云はれりや、それつきりの話だ。實は部屋代を請求に來たんだ。私は前拂ひをしておいたが、部屋は一度も使はなかつたから。」

「ハア、さうですか。しかしさういふ金は回收出來ませんでせうよ。」

すると、メイは「不正」だとか「手續きをする」とか、脅し文句をもぐ〳〵いつてゐたが、結局話しが解らないので、粗々しく戸を開けて出て行つてしまつた。

ルコックが隱れ場所から出て來ると、

「どうです、巧くいつたでせう？」ボーイは大得意である。

「有難う。申し分がない。」

不意に飛びだして、またメイの跡をつけた。

ルコックは、まんまと敵を欺き終せたが、今の計略が幾分でも感づかれはしなかつたかといふことを恐れた。それで、依然メイの後をつけて來たアブサント爺に接近すると、すぐに訊いた。

「メイはマリアンブール旅館へ來る途中で、誰かに話しかけはしなかつたか。」

「えつ、君はどうしてそれが解るんだ？」
アブサントは吃驚して問ひかへした。
「それは解るさ。で、どんな奴だい、その談しをした相手は？」
「素的もない美人だつたよ。鵠鴣のやうに綺麗で、むく〳〵肥つた女だつた。」
それを聞くと、ルコックは憤りで眞蒼になつた。
「運がわるいんだ。折角先廻りをして、巧くミルナー夫人を追ひだしたが、彼奴等が途中で出會したとは！」
「でも、君はメイが途中で他人に話しかけないやうに要心しろとは云はなかつたね。」
「そりやいゝよ。立ち話しまでも防ぐことは出來ないからね。」
そのとき、メイは繁華なモンマートルの方へ入つて行つた。兩人は人込みの中で彼を見失はぬやうに、一生懸命尾行しなければならなかつた。やがて追ひつきさうな距離まで來ると、もう大丈夫だと、また先刻のつゞきを話し合つた。
「彼奴等が出會つたときに、何方から先きに呼びかけたかね。」
「メイの方から。」
「そのときに女は何といつた？　吃驚してアッと叫びはしなかつたか。」
「僕は五十歩も離れてゐたので、聲は聞えなかつたが、女は驚いた風だつたよ。」

あゝ、ルコックはその光景が見たかつたのだ。若しも彼が自分の眼で實見したなら、どれほど有理な暗示を得たか知れない。
「長いこと話しこんでゐたかい。」
「十五分とかゝらなかつた。」
「ミルナー夫人はメイに金を與りはしなかつたか。」
「さあ、それは解らない。兩人は狂人のやうに、激しく手眞似をやりながら話してゐた。僕は喧嘩をしてゐるのではないかと思つたくらゐだ。」
彼等は見張られてゐることに氣がついて、此方の疑ひを避けるために、わざとそんな眞似をやつたのだ、とルコックは推測した。
間もなくメイが、とある煙草屋へ入つた、と思ふとすぐに出て來たが、口には贅澤な葉卷を咬へてゐた。これで、マリアンブール旅館の女將から金を貰つたといふことが、證明出來るのであつた。

二二、二人夜盗

メイはバンドーム廣場まで行つて、右の方へ折れたが、この邊は田舍出の椋鳥を相手の雜多な商店が竝んでゐるところで、どの店でも主人が店頭に立つて、盛んに客を呼びこんでゐる。
メイは或る古着屋の前で、主人と何か談判をはじめたが、やがて店内へ入つて行つた。

「奴はいよ〳〵服を替へる決心だな。脱獄人といふ奴は、着がへをしなければ氣が濟まないものだ。」

とルコックがいつた。

間もなくメイが出て來た。案の定、着がへをしてゐる。お粗末なだぶ〳〵の上衣に、厚ぼつたい紺のズボンを穿いて、頸には華美なハンケチを捲き、ソフト帽を横つちよにかぶつた恰好は、ルコックの無賴青年にも劣らぬ變裝ぶりである。

メイは、この變裝が大分得意らしく、これで漸と落ちついたといふ風だ。ところが、彼は一つの包みを小脇にかゝへてゐる。その中には今まで着てゐた服が入つてゐるらしい。彼は交換して幾らかの金を取る代りに、粗末な服にしても一着買入れたゝめに、却つて持ち金を減らしたわけである。

メイは恐ろしい早足ですた〳〵歩いて行く。今左へ折れたかと思ふと右へ曲るといふ風に、目まぐるしく方向をかへる。

この男が巴里の地理に明るいことは驚くべきものだ。歩きつぶりで判斷すると、セエヌの水で產湯を使つた巴里つ子でも斯うはゆくまいと思はれるほど、市内の地理に精通してゐるらしい。あらゆる建物や、露路や抜け路を、手に取るやうに知つてゐて、今大通りへ出たかと思ふと、横丁へ曲つてゐる。横丁へ曲つたと思ふと、早くも露路をくゞつて隣りの街へぬけてゐる。彼はこんな風にして、追跡者を捲かうとするのであらう。

そのうちに日が暮れかけて、尾行が一層困難になつた。この季節には、薄い夕靄が立ちこめる。街

燈が點いても、その光りはぼやけてゐて、遠くへはとゞかない。それに恰度勤め人や勞動者が歸る時刻で、どこの街も一しきり雜沓する。夕餉の支度に買ひ物をする細君たちがそれに雜る。その中を、メイが、成るだけ紛れるやうに潛つて歩くのだから、追跡者が骨の折れること一通りでない。

メイはます〳〵歩調を早めて、シャトレ廣場を横ぎつて、再びサン・ミシエル遊歩街へ出ると、そこに二臺の辻馬車が停まつてゐた。メイはその一臺の馭者とちよつと立ち話しをしたあとで、車臺へ入つた。

しかしメイは實際その中に乘つてはゐなかつた。入るやうに見せて、實は籠抜けをやつたのだ。その馬車が駈けだすと同時に、彼は身を躍らして隣りの馬車へ飛びこんだ。するとその馬車もまた全速力で駈けだした。

メイは追跡者を首尾よく捲いたつもりで、ほつと安心した。しかしさう思つたのは聊か早計であつた。何故つて、馬車の背後に蟬のごとく取りついた男が、ルコックであつたから。アブサントも同時にへばりついたけれど、可憫さうに、途中で振りおとされた。

メイは車上から、イタリー廣場の中央のところで降ろしてくれと馭者に命じた。イタリー廣場といへば、彼がシュバン婆と共に一晩留置場に叩きこまれた、あのバリエール警察のすぐ傍である。

馬車が目的地に止まると、メイは車臺を降りて、四邊を見廻したけれど、追跡者の姿が見えないので、彼は安心して、ムッフタール街の方へ立ち去つた。ルコックは、素早く馬車の腹から這ひだして

また尾行をつゞけた。

とある木蔭を歩いてゐると、耳許へ何か囁いたのは、途中で振り落されたアブサント爺であつた。

「やつ、どうしてこんなに早くやつて來た？」

「僕が彼處に倒れてゐると、馬車で通りかゝつた親切な人が、僕を自分の馬車に乘せて、此處まで送つてくれたんだ。」

この界隈は、居酒屋が澤山あるところだが、メイは何か探しものでもするやうに、一軒々々覗いてあるいた末に、たうとう四軒目の居酒屋へ入つた。

ルコックとアブサントが密と硝子戸から覗いてゐると、メイはつか〳〵と一つの卓子へ行つて、腰をおろした。その卓子の向うには、脊の高い、赭ら顏の男が坐つてゐた。

「例の仲間の男だ！」

と、ルコックはびつくりしていつた。その男は、汚れた藍色の寬上衣を着て、ぼろ〳〵になつたつば廣帽をかぶつてゐる。この變裝が彼の險しい人相にぴつたりと適つて、一段と優れた惡黨らしく見える。

なほ不思議なことは、ルコック等が上流紳士と睨んだメイは、こゝへ入ると、大いにその處を得たかのやうに、落着いてゐるのだ。

彼は定食と葡萄酒を註文した。そして肉汁をガブ飲みにして、堅い牛肉を大きく切つては、甘味さ

うに頬ばり、寬上衣の袖で汚れた口を拭いて、平氣な顏をしてゐる。

「僕は内へ入らう。そして彼奴等の談話を聞くんだ。」

ルコックがいふと、アブサントは慌てゝ止めた。

「止したまへ、感づかれでもしたら大變だ。」

「大丈夫だよ、僕の變裝が彼奴等に解るものか。」

「見附かると、君は殺されるぜ。」

「彼奴等のことだから、氣がついたら殺るかも知れん。しかし探偵が生命を惜しんでゐた日には、職務が出來やしないよ。」

いふより早く、ルコックは硝子戸を排して、つついと内へすべりこんだ。そして卓子に坐つて、しやがれた造り聲で、何か食べものと酒を註文した。

メイは例の男としきりに何か饒舌つてゐる。しかし、こゝでは、二人が通り一遍の合客として、口をきいてゐるので、前からの仲間らしい風が少しもない。おまけに彼等は、この社會に特有な、聞くに堪へない野卑な言葉で、饒舌り合つてゐるのだ。

つば廣帽の男は、方々の監獄の經驗談をやつてゐる。典獄の評判やら、獄則は何方が寬いとか、やかましいとか、食物では、ポアセイ監獄はフォントヴオ監獄なんかに比べて、十倍も甘味いものを食はせる、といふやうな通をふり廻してゐる。

ルコックは食事を終へてから、ブランデイの酒杯を前にして、ぐら〳〵居眠りをするふりをしながら、聞き耳をたてゝゐると、今度はメイが自分の身の上話からはじめて、胡椒軒の事件で逮捕られ、脱走するまでの顚末を語りだした。（その内容は判事に申し立てたのと寸分違はない。）そして面白いことには、判事や探偵が自分を貴族だとか名士だとか、飛んでもない見當ちがひをしてゐるといふことまで附け加へた。

彼は獨逸の方へ歸りたいけれど、ふところに金はなし、どうして旅費をつくらうかと、途方にくれてゐる。着物を賣らうと思つたが、どの古着屋からも拒ねられて、たうとう賣りそこねた。仕様がないから、かうして邪魔つけな包みを持つてあるくんだといつた。

すると、つば廣帽の男は、

「お前がそんなに困つてゐるなら、見殺しには出來ねえ。幸ひさういふ品物を取扱つてゐる店を知つてゐるから、一緒につれてつてやらう。」

「そいつは有難え。頼むぜ。」

兩人はそのまゝ出て行つた。無論ルコックとアプサントは、その後をつけたのである。

兩人の男は足早にムーラン街まで來て、とある薄暗い露路へ曲つたと思ふと、小汚なく燻ぶつた家へ姿を消した。

それから間もなく、兩人は出て來たが、メイは掌に銀貨を鳴らしながら、不機嫌さうな樣子で、

「故物買なんて奴は、まつたく仕樣がねえ。」

とぶつ〳〵いつた。着物を安く値切られて、僅かの金しか手に入らなかつたらしい。それでも、世話をした男の好意に酬いるつもりか、メイの方から誘つて、近所の居酒屋へ入つた。

一時間以上も飲んでから、そこを出たが、一町と行かないうちに、別の酒場の戸口をくゞつた。やがて店を閉める時刻が來たので、兩人は亭主に突き出され、今度は近所のまだ起きてゐる酒屋へころげこんだ。が、間もなく此店からも投り出され、また次へ〳〵と、梯子飲みをやつて行つた。

かうして、サン・ミシエル廣場までのたくつて來たときは、かれこれ夜半の一時ごろで、もう何處の飲み屋も、みな店を仕舞つてゐた。

兩人はちよつと立ちどまつて相談をしたあとで、仲よく腕をくみながら、サン・ゼルマンの方へ千鳥足をはこんで行つた。よほど醉ひが廻つたと見えて、よろけながら高聲に何か話してゐた。『〆た』『金は澤山さ。』そんな言葉が耳に入つた。

「こんなに接近して大丈夫かい？」

アプサントが心配しだしたが、

「怖々するなよ。」ルコックは平氣なもので、「彼奴等がかう兩人一しよに纏まつたからには、結局こつちのものだ。」

兩人の男は、稍足並をゆるめて、サン・ゼルマンに建ち並ぶ宏壯な邸宅を、一つ〳〵覗きこむやう

にしては、先へ進んでゆく。その様子から察して、何か悪い仕事でも相談してゐるのではないかと思はれた。

かくてラ・シエーズ街からバラーヌ街へ入つて間もなく、廣大な庭園を圍つてゐる低い塀の前で、兩人は立ちどまつた。

つば廣帽の男が何かいつてゐる。恐らく、この邸の主屋が、向うのグルネル街へ向いてゐるといふことをメイに説明してゐるらしい

「なアんだ馬鹿々々しい。いつまでつまらない眞似をやつてゐるんだ。」

とルコックがつぶやいた。

ところが、彼等は眞劍に何かやつてゐるのであつた。やがてメイは、つば廣帽の男の肩を踏み臺にして、その塀へ取りつくが早いか、姿がかくれて、庭園の方へどしんと跳び降りる音がした。

つば廣帽の男は往來に立つて、ぢつと見張り番をしてゐた。

二三、長蛇を逸す

メイは實に奇怪なことをやつたものだ。何しろ咄嗟の出來ごとなので、さすがに機敏なルコックもそれを止めるどころか、止めようと考へる暇さへもなかつた。

彼は只あきれて、一瞬間茫然としてゐた。

が、ハッと氣がつくと、決斷力が電光のごとく頭腦に閃めいた。と同時に、立番をしてゐる仲間の男との距離を眼で測つてゐたが、突然闇を貫く矢のやうに地面を飛んだ。

と、もう、その鐵のごとき掌で、確と男の口を抑へつけてゐた。男が聲をも立てず、逃げ出さうと藻掻くのを、足を掬つて引き倒し、兩手を縛り、猿轡をはめた。そして半ば窒息させたまゝラ・シエーズ街の角まで引きずつて行つた。

「不思議だね、突然にこの塀を跳び越えるなんて——」

アブサント爺は只呆氣にとられて、手を貸さうともしない。

「そんなことはどうでもいゝ。それよりも僕はメイを追蒐けなければならん。君はこゝに見張つてゐて、もしも彼奴が歸つて來たら、ふん捕まへろ、逃がしてはならんぞ。」

「それはいが、この倒れてゐる男をどうするんだ？」

「そのまゝ放つておけ。今に夜警の連中が來たら引渡せばいゝ。」

かういつてゐるうちに、警官の靴音が聞えた。

「やつて來たぜ。」

「しめたつ。大助かりだ。」

恰度そこへ、二人の警官が人影を見て怪しみながら近づいて來た。ルコックは簡單に事の次第を說明して、

「僕はこの邸に悪漢が入りこんだことを注意してやらねばならんが、いつたい誰の邸宅だらう。」
すると、警官の一人が、呆れたやうな顔をして、
「えッ、君は知らないのか。これが有名な、セルムーズ公爵の邸宅さ。何千萬といふ身上で、以前は——」
「あゝ、解つた〳〵。」
「賊が此邸へ鼻でも突込んだとすれば、今ごろは捕まつてゐるにちがひない。此邸ぢや月曜には恒例の晩餐會がある。今晩もそれがあつて今客が歸つたばかりのところだ。僕等が門前を通つたときは、まだ馬車が五六臺待つてゐたよ。」
メイがこゝへ飛びこんだのは、物盗りが目的でなくて、尾行者を捲くためであつたらしい。しかも彼は今夜こゝに晩餐會のあることを承知してゐて、庭から裏門の方へ抜けて、玄關先の混雑に紛れて姿を晦ます策戰だらうと、ルコックは推測した。
取り敢へず表門へ廻ると、ちやうど最後の客を乘せた馬車が、一臺出て行つたばかりのところで、下男共が前庭の燈火を消してゐた。そして、見るからに强さうな門衛の瑞西人が、大玄關の重い二重扉を締めにかゝつてゐるところであつた。
その瑞西人は、ルコックの怪しげな風態を一目見ると、
「お前なんかに用はない。早く歸れ〳〵。」

「いや、私は刑事のルコックといふ者です。名刺をお目にかけよう。これで合點がいつたでせう。實は今脱走した囚人が、此邸のお庭へ忍びこんだものですから。」
「エッ、囚人が？」
「えゝ、人を三人も殺めた、危險な囚人です。仲間が一人あつて、今塀を越えるのに手傳つてゐたから、其奴は我々の手で捕縛しましたがね。」
ルコックはこの際少し誇張していふ方がいゝと思つたのである。
すると、瑞西人は心持ち蒼くなつて、
「左樣ですか。兎に角人を呼びませう。」
と呼鈴の綱に手をかけようとするのを、ルコックは慌てゝ押し止めた。
「待つて下さい。彼奴が本館を抜けてこの戸口から逃げたとすれば、人を呼んだつて駄目です。」
「いや、庭から本館へ入りこむことは出來ません。なぜつて、庭に向つてゐる奥の戸口は、大夜會のときに限つて開けますが、月曜の晩餐會には開けないのです。しかも今日は、公爵閣下の命令で、殊更戸締りを嚴重にしろといふことでしたから。」
「そんなら、賊はまだお庭に隱れてゐませう。早く皆さんを呼んで下さい。いや、呼鈴を鳴らさないで、靜かに〳〵。」
大邸宅のことゝて、各室々は無論のこと、馬車小屋や、炊事場から驅り出された使用人が、五十人

近くも集まつて來た。
大きなカンテラに灯を入れて、下男共がそれを提げて、どん〳〵庭へ廻つたので、庭は忽ち白晝のやうに明るくなつた。
人々は庭園一杯に散らばつて、捜索をはじめた。園藝道具を藏つておく小舍、溫室、四阿、離亭、犬小屋の果まで、殘る隈なく探し廻つたが、怪しい人影は一つも見當らぬ。
若しや木に登つてゐはせぬかと、身輕な少年が大きな栗の木へ攀ぢ登つて、繁つた枝の間へカンテラを差し向けたりして、あらゆる木蔭を探した。けれど、やつぱり賊は見えない。
「賊は元の場所から、また塀を跳び越えて逃げたのでせう。」
と瑞西人はいひだした。この男は大型の短銃を手にして、始終ルコックの傍についてゐた。多分萬一を警戒するつもりであらう。
賊は果して逆戻りをしたゞらうか。さうとすれば、外に見張つてゐるアブサント等の眼に止まる筈だ。ルコックはさう思つて、一應アブサントに訊ねさせた。そのときは、前に捕縛した男を警察へ引立てゝ行つた警官も歸つて來て、三人で外を警戒してゐたが、鼠一疋這ひ出したのも見なかつたといふことだ。
ルコックは途方にくれた。そのとき、むづかしい顏をした、一見公證人らしく見える紳士が、庭園へやつて來た。

「公爵閣下の執事のオットオさんです。」
と、瑞西人がルコックに囁いた。
「私は公爵樣の代理として、お訊ねにまゐりましたが、いつたい、この騷ぎはどうしたんですか。」
オットオが鹿爪らしく問ひかけた。彼は主人のことを、公爵閣下とはいはずに、單に公爵樣といつた。妙に威張つた執事である。
彼は一通り說明を聽きとつてから、
「あゝ左樣ですか。さういふわけなら、後でお邸宅の內部も捜査たらいゝでせう。さうすると、奧樣も御安心遊ばしませうから。」
かうルコックに注意して、歸つて行つた。
再び捜索はつゞけられた。蟻一疋といへども發見されずにはゐないほど綿密に檢べた。凡そ形のあるもので、手を觸れずに殘されたものはないといふくらゐ、嚴密な捜索をやつたが、賊はつひに見つからなかつた。
「もう十分だ。庭園には隱れてゐない。これから邸宅の內部を捜させて戴きませう——が、その前に私の同僚を呼んで來て下さい。」
間もなく、アブサントがやつて來た。
そこで、ルコックは、アブサントと瑞西人と、そのほか下男共七八人と共に、本館の方へ引きかへ

した。

セルムーズ御殿と呼ばれるだけあつて、實に宏壯である。この大邸宅の多いサン・ゼルマン通りにだつて、竝ぶものもない立派な邸宅である。

しかし、内部の構造や裝飾がいかに優美であらうと、この際ルコックの一瞥にも値しなかつた。彼は賊を捕へる外の何事を考へる餘裕もなかつたのだ。美々しい客間から、古今の名畫を懸けならべた繪畫室、裝飾に粹をこらした食堂は申すに及ばず、あらゆる廊下、あらゆる戸袋を注意ぶかく檢べながら、奥の方へ進んで行つた。その間、下男共が燈火を持つて一々案内に立つた。

ルコックは、重い戸棚のやうなものは必ず除かして、蔭を覗き、内部を搜した。垂布や、窓掛や、帷は一つ〳〵しぼつて見た。どんな片隅でも見遁さなかつた。

かうして廣い邸内を二時間も搜索したが、つひに無效であつた。

「これで、もう御覽になるところはありませんよ。」

一人の年老つた下男がいふと、

「いや、まだ公爵閣下の御居間と公爵夫人の御居間が殘つてゐる。」

と瑞西人が注意した。

「もう澤山です。」

ルコックが辭退してゐるうちに、瑞西人は早くも、廣間の奥の戸口を輕く叩いた。そこから奥は、

公爵の起臥する幾つかの室がつゞいてゐるらしかつた。

すると戸が内部から開いて、彼のむづかしい顏をした執事のオットオがぬつと出て來た。

「奥に何ぞ用かね？」

オットオは頗る不機嫌である。

「公爵閣下の御居間の方へ行きたいのです。一通り檢べて頂かないと、賊が隱れてゞもゐたら大變ですから。」

「君は氣でも狂つたか。」執事は呶鳴りつけた。「賊が此方へ入れるわけはないではないか。それに公爵樣の御居間をお騷がせするなんて、飛んでもないことだ。公爵樣はひどく御疲れで、今、御風呂を召してから、御寢みにならうといふところだ。」

頭から叱り飛ばされて、瑞西人は悄氣でしまつた。ルコックも何となく無躾であつたのを感じて申し譯をいつた。すると奥の方から、

「これ〳〵、警察の方々のお邪魔をしてはならんぞ。」

と聲をかけたのは、正しく公爵であつた。

「さうれ、御覽なさい。閣下もあのやうに仰しやるではありませんか。」

瑞西人は得意になつて、やりかへした。

「御許しが出たとあれば仕方がない。こつちへお入りなさい。私が御案内しよう。」

ルコックは執事の案内で内へ入つたけれど、ほんの形式的に、書齋や、書き物室や、喫煙室を素通りしたに過ぎなかつた。浴室の前の隙間から、ちらと公爵の溫容に接する光榮を有した。公爵は、大理石で疊んだ、眞白な浴槽から聲をかけた。

「どうだね、脫獄人はまだ見附かりませんか。」

「はい、まだ見附かりませぬ。」

とルコックは敬々しく答へた。

けれども、執事は主人ほど上機嫌ではない。

「皆さんに御注意しておきますが、公爵夫人の御居間は女中達と私の受持ちで、簞笥の果まで檢べましたが、些しも怪しむべきところがござらん。」

ルコックは素より夫人の居間まで搜さうといふ考へはないので、そこから引きかへした。

年老つた下男は、客間の方に待つてゐたが、ルコック等が奧から歸つて來ると、

「御苦勞でございました。食堂へ御案内しますから、一口召上つて下さい。」

とすゝめた。多分主人からいひ附かつたのであらう。

この贅澤な貴族の食堂では、どんなにけつこうな料理と、どんなに芳醇な酒がふるまはれるだらう。さうおもふと、アブサント爺は咽喉から手が出さうな氣もちだつたが、ルコックは簡單に辭退した。

「折角ですが、今晩はさうしてはゐられません。」

さういつて、アブサントと共に公爵邸を引きあげて行つた。

ルコックは、早く大勢の中から逃れたかつたのだ。彼は先刻からどんなに努力して、怒りと失望を押隱して來たことだらう。

メイはつひに逃げた。消えた。いや、蒸發してしまつた。彼が判事に對してあんなに强い自信をもつて、生命にかけても正體を突止めてみせると誓つたメイが、するりと指の間から拔けて行つたのである。それを思ふと、彼は氣が狂ひさうであつた。

「小父さん、困つたことになつたね、この失敗は。」

「さうさ。ゼブロール警部は、定めてせゝら笑ふだらう。」

怨敵にもひとしいゼブロールの名を聞くと、ルコックは痛傷を負うた鬪牛のやうに跳びあがつて、

「何、糞！　まだゼブロールなんかに降參はしないぞ。メイは取り逃したが、その代りに、あの神出鬼沒ともいふべき仲間の男を捕縛したんだ。今に見たまへ、判事殿があの男を訊問して、有力な手がかりを捉むにちがひない。」

ルコックは見えざる敵を威嚇でもするやうに、拳骨を振り舞はしたが、やがて落ちついた口調でいつた。

「兎に角警察へ行かう。そして僕はあの男を調べなければならん。」

二四、思はぬ獲物

ルコックがアブサント爺と共に、最寄の警察へ行つたのは、未明の五時ごろであつた。

せつせと報告書を認めてゐた署長は、ルコック等の變裝に氣づかないで、妙な奴がやつて來たといふやうな顏付をしたが、名乘られて初めてそれが解ると、急に愛想よく握手をして、

「おめでたう。昨晩はえらい御手柄だつたね。」

「手柄とは？」

「昨晩諸君が捕縛した男さ。」

「あゝ、彼男ですか。」

「ハ、ア、諸君は彼奴の正體を知らないんだね。實に運のいゝ人達だ。今にどつさり賞與が貰へるだらう。」

「そんなに偉い奴でしたか。」

「いや大變な奴だ。三ケ月前に脫獄して、行方の知れなかつた奴で、諸君の手帳にも名前が載つてゐる筈だ。例のジョゼフ・クーチュリエさ。」

それを聞くと、ルコックは顏色が變つて、頭がぐらくとした。

「えッ、何ですつて？　ジョゼフ・クーチュリエといへば——有名な、懸賞付きの脫獄囚ぢやありま

せんか？」

「偉いお手柄だ。いまに夜が明けると、君は大した評判になるよ。そしてゼプロールが聞いたら、嘸くやしがることだらう。彼は、あの惡漢を逮捕出來る者は、自分以外にないなんて傲語しをつたからな。」

「貴方は勘違ひをしてをられるでせう。彼奴はクーチュリエではありません。」

「冗談いつちや可けない。俺は彼奴を訊問べたが、その云ふことが、我々の方へ廻つて來てゐる捜索命令としつくり合つてゐるばかりでなく、左手の小指が無いのも、人相書の通りだ。」

「それぢや、間違ひつこありませんね。」

とアブサントが相槌をうつた。

「さうさ。それにもう一つ確かなことは、俺がずつと以前に、彼奴をこの警察の留置場に叩きこんだことがある。それで彼奴も俺を見覺えてゐたよ。」

もう議論の餘地がない。その點はルコックもあきらめた。

「私に彼奴を訊問させて下さい。」

「御隨意に調べるがいゝ、しかし彼奴は、隙を見て逃げだすのに妙を得た奴だから、俺の部下を二人附けて見張らせよう。」

やがて、かの男——クーチュリエなる者を留置場から連れて來た。戸口には嚴重に鍵をかけ、左右

を警官で警備めた。

クーチュリエは、もう落ちついてゐた。彼はルコックの顏を見ると、

「あゝ、昨晩私を捕まへたのは、貴方でしたね。突然に締められたもんで面喰ひましたよ。今も頸筋が痛んで仕樣がありません。」

「ところで、お前に訊きたいことがあるが、正直に答へるだらうな。」

「えゝ、お答へしますとも。私は何も貴方に怨みはないし、却つて貴方が好きなくらゐです。」

「他でもないが、昨晩のお前の仲間は、ありや、どういふ男か。」

クーチュリエは急に顏が曇つた。

「昨晩初めて交際つたばかりで、詳しいことは知りません。」

「馬鹿をいつちや可かんよ。初めて會つた者が一緒にあんな仕事がやれると思ふか。あゝいふことをやる以上は、お互ひに深く知り合つてゐる證據だ。」

「昨晩の一件は、私もわるうございました。けれど、あの人が探偵つていふことは、私にはどうしても解りませんでした。私は網にひつかゝつたのです。」

「それは飛んでもない思ひちがひだ。あの男は警察の者ではない。それは俺が斷言する。」

クーチュリエは、その眞僞を確かめようとするやうに、胡散くさい眼付でルコックの顏を見まもつてゐたが、

「さうですか。そんなら昨晩のことを殘らず申しあげますが、初め私は、ムッフタール街の小料理屋で夕食を使つてゐると、あの男が入つて來て、私の隣りに席をとりました。自然、お互ひに言葉を交はしたのですが、彼は賣りたい着物があるといふから、懇意な古着屋へ連れて行つてやりました。すると、彼は非常に有難がつて、一杯奢つたものですから、私も返禮の積りで彼を誘ひました。さうして夜半まで飲み廻つてゐるうちに、物が二つに見えるくらゐ、醉拂つてしまひました。そのとき彼は、一緒に一仕事やらうと云ひだしました。何處か大きな邸宅へ忍びこんで、銀器を盜み出さうといふのです。そして、何もかも自分一人でやつつけるから、お前は塀の外に見張りをしてくれつて云ひます。私は何となくもぢ〳〵してゐると、彼は熱心にすゝめて、實はこの邸の奉公人に懇意な男があるので、內部の樣子はよく知つてゐるが、月曜の晩には晩餐會があつて、その晩に限つて食器棚に鍵がかゝつてゐないから、きつと成功するといふのです。」

ルコックはそれを聞くと、蒼ざめた顏に血の氣がうかんで來た。

「あの男は、毎月曜の晩に、セルムーズ邸で晩餐會があるといつたか。」

「えゝ、そればかりでなく、彼はその何ムーズとかいふ、邸の名前までも知つてゐました。」

或る不思議な、しかも極めて自然に起りさうな考へが、ふとルコックの胸を過つた。

「ひよつとすると、メイといふ男が、セルムーズ公爵その人ではあるまいか。」

そんなことを考へた。が、それは直ぐに自分で打ち消した。ちよつとでもそんな風に考へたことが

馬鹿々々しいとさへ思つた。餘りにロマンチックな、奇拔な物の見方をする自分を呪つた。

この場合、メイをセルムーズ公爵であると斷定せねばならぬ理由はない筈だ。初めからメイを上流社會の者であると睨んだ以上は、彼が公爵家の恒例晩餐會のことを知つてゐたとて、何の不思議があらう。

ルコックは、これ以上にクーチュリエを訊問する必要はなかつた。そこで調べを打ち切り、署長と握手をしてから、警察の門を出た。

今度もまた一杯喰はされたのだ。大いに自惚れてゐた探偵上の天才といふことも、かうなると一向當てにならぬ。メイは彼の追跡から逃れるために、偶然に小料理屋で出會した男を、仲間かのごとく見せかけてその男を捕縛させ、己れはそのまゝ姿を晦ましたらしい。

ルコックは、さうした常套手段に引かゝつて、まんまと掌中の珠を失つたのである。

「これから何處へ行かうかね。裁判所か、それとも警視廳か。」

アブサントが同僚のひどく失望落膽した態を見て、妙に不安を感じながら訊ねると、

「警視廳だつて？　厭なこつた！」ルコックは身ぶるひして、「こんなときに、ゼブロールの皮肉を聽きにゆく馬鹿があるかい。といつて、裁判所へ行くのもいやだ。今更セミュレ判事の前へ出て、辯解をされた義理でもなしさ。」

「そんなら、どうすればいゝんだ？」

「あゝ、僕は解らない。僕は米國へ高飛をするか——でなけりや、セエヌ河へ投身でもするんだ。」

だが、一町と行かないうちに、彼は立ちどまつて、

「否々、この事件はこれで終つたのではない。僕は見事この謎を解いてみせると誓つたのだ。これを解決せずに措くものか。」

と暫く考へこんでゐたが、やがて落ちついた口調でいひ足した。

「こんなときに、我々を救うてくれる人がたつた一人ある。さうだ、あの人に教へを乞ふより外はない。」

二五、タバレ先生

一晝夜ぶつ通しに活動した擧句なので、普通ならまづ一睡りといふところだが、ルコックは、忿激と、失望と、復讐心のために昂奮してゐて、眠るどころではなかつた。

アブサント爺に至つては、休息を知らない馬車馬のやうに、ぶつ倒れるまでも駈けつゞける類の男なのである。

この兩人は一旦ルコックの宿へ歸つて、變裝を解き、朝餉を取つてからまた出かけた。

やがて彼等は、監獄に間近いサン・ラザール街に姿を現はした。そして、とある大きな住宅の戸口に立つて、

「タバレ先生はいらつしやるかね。」
門番に訊くと、
「いらつしやいますが、御病氣です。」
「大變お惡いかね？」
「よくは存じませんが、持病の痛風だつていふことです。」
二階へ行つて、その住室の戸口の呼鈴を鳴らすと、丸ぽちやの可愛らしい女中が取次に出て來て、
「只今お醫者さまがお見えになつてゐますが、直きに濟みますから、ちよつとお待ち下さい。」
さういつて、瀟洒たる書齋に兩人を案内した。
ルコックがこれから敎へを乞はうとするタバレ先生とは何んな人か。こゝで先生のことを簡單に記述しておかねばならぬ。
彼は當代の畸人ともいふべき人で、その明敏な推理、殊にその透徹した觀察力は、殆んど天眼通といつていゝのだ。
彼は公設質役人を四十五年も勤めて、薄給で細々と生計を立てゝゐたが、思ひがけない遺産相續で、突然年收四萬法といふ財産がころげこんだので、すぐに役を退いた。それから道樂に古書蒐集をやりだして、幾つかの大きな樫の本棚に、ぎつしり詰まるほど珍本を蒐集めた。
彼はそれ等の書籍を片つ端から讀んで行つたが、その中に、或る名探偵の書いた備忘錄があつた。

讀んでみると中々面白い。その探偵は非常に敏感で、感受性が絹のやうにデリケートで、薄い刃物のやうに屈伏自在だつたとある。彼は丹念にその備忘錄を讀んだあとで、
「この人の頭の働きは俺にそつくりだ。この人が名探偵なら、俺だつて探偵になる資格がある。」
と心に叫んだのが始まりで、それからといふものは、ますゝ熱心に、今度は探偵に關する書籍を蒐集めた。書簡集であれ、備忘錄であれ、報告書であれ、苟くも探偵といふことに引かゝりのあるものならば、値を問はずに買つて來て、片つ端からそれを讀破した。
書籍を讀むばかりでなく、犯罪のあつた時は、自分で現場へ出かけて行つて、あらゆる細部までも檢べて獨りでこつゝ研究した。が、段々研究するだけでは滿足ができないので、その研究を實際に應用したくなつて來た。
ある日彼はたうとう警視廳へ行つて、自分に事件を囑託してくれと申し込んだ。警視廳ではあまり頼みたくもないのだが、その熱心に感じて一寸した事件を取扱はせてみると、巧く解決ができた。それから段々困難な事件をやらせたが、彼はますゝ驚くべき才能を發揮した。まつたく快刀亂麻を斷つの慨があつた。
それからといふものは、難事件の起るごとに引張りだされて、その解決の任に當つてゐた。しかし警視廳で彼がどんな地位を占めてゐたかは、ちつと云ひ難い。なぜつて、官吏とか囑託とかは、大てい俸給や手當を受けてゐるのだが、彼に限つて、そんなものは一錢たりとも受取らぬからである。

尤も、この頃は警視廳へも稀にしか顔を見せないやうになつた。しかし法廷に厭いた辯護士でも、依然として依頼者に有力な武器を供給してゐるやうに、タバレ先生も敎へを乞ふ者があれば、そのあらたかなる託宣を惜まない。そこで警視廳の連中が非常な難事件に逢着して、いよ〳〵行きづまると、祕密にこの先生の許へ相談にゆかねば納まりがつかないことになつてゐた。

やがて醫師が歸つて行くと、女中が「どうぞ此方へ」といふ。

導かれたのは、タバレ先生の居間である。先生は、天蓋で蔽はれた大きな寢臺に仰臥して、びつしより汗をかき、苦しさうな呼吸づかひをしてゐた。

扁べつたい額、圖抜けて大きな耳、不恰好に反りかへつた鼻、小さな眼、そして厚ぼつたい脣、さうした顏の造作を見ると、どうしたつて、無學で遲鈍な小地主ぐらゐにしか評價ない。こんな頓狂な顏の持主に、あの優れた才能はおろか、普通一通りの智慧すらあらうとは思へないのだ。

しかし、先生が一度口を開けば、この人相が生々と輝いて來る。「才走つた顏に眞の天才が無い。」とは、先生の場合に最もよく當てはまつた金言である。

先生は今、兩人の探偵が入つて來たのを見ると、その小さな眼をきらつかせて、

「おゝ、ルコック、よく來たね。アブサントも一緒か。君達は感心にこの爺を忘れなかつたんだね。」

「實は先生の敎へを仰ぎたいことがありまして。」

「さうか、ハ、ア。」

「私達は兩人の迷兒のやうに、途方にくれてしまひました。」

「うむ、相手はそれほど奸智に長けた奴かね？」

「奸智どころの騷ぎではありません。惡魔その者といひたいくらゐです。」

すると病先生は、ルコックを羨むやうな、不思議な表情をうかべて、

「それは偉い掘り出し物ぢや。何も歎すことはないさ。この節は世の中が平凡になつて、惡黨なども偉い奴が絶えてしまつて、つまらん奴等が大惡黨の手口を眞似るだけだから、一向に手應へがないな。犯罪があると、翌くる日に犯人が逮捕られてゐるではないか。乘合馬車か何かで犯人の棲家へ行つて御用だつ！　といへば、それでいゝのだ。味も素氣もありはしない。ところで、君の取扱つてゐるその犯人といふのは、何をやらかしたんぢや！」

「三人の男を殺したのです。」

「うむ、うむ、うむ。」老先生は異つた調子で三度うなづいた。「して、その場所は？」

「居酒屋です、バリエールの近所の。」

「あゝ解つた。メイとかいふ奴だな。シュバン婆の居酒屋の一件だらう？　新聞で見たよ。この間栗鼠のファンフェルロー（註、これもガボリオーの小說にしば〳〵出て來る探偵で、敏捷なところから栗鼠といふ異名を取つたのである）がやつて來ての話に、何でも犯人の素性が解らないので困つてゐる、そして專ら君が擔當してゐるといふ事であつた。結構ぢやないか。とにかく內容を詳しく話して

くれ――」

先生はさういつて、心地よげに枕によりかゝつた。

ルコックは事件の内容を詳しく話した。巡邏の警官隊が短銃の音を聞いて、胡椒軒に駈けつけ、ゼブロール警部が表戸を押し開けたところから、囚人メイがセルムーズ家の庭園に忍びこんで、それつきり姿を晦ましたまでの顚末を、細大もらさず物語つた。

タバレ老人は、聽いてゐるうちに元氣が出て來て、病苦をも打忘れたやうであつた。談佳境に入ると、ときゞ威勢よく相槌をうつたり、歎息したり、或は妙なる音樂にでも聽き惚れてゐるやうに、暫く沈默することもあつた。時には、

「あゝ、俺がそこにゐなかつたのが殘念ぢや。」

と獨りごとをいつたりした。

やがてルコックの說話が終ると、先生は非常に滿足して、

「巧くやつた。偉い。殊に『やつて來たのは曹魯西兵だ。』といつた一句から出發したところなどは、見上げたものぢや。君はこの事件を天使のやうに取扱つたね。」

「これは恐縮です。その實は愚物のやうにと仰しやるんでせう。」

「いや、俺は反語を使つたのではない。まつたく巧くやつたよ。俺の衣鉢を傳へる者は君ぢや。俺は安心して死ねる。俺は推理の名において君を抱擁したい――あゝ、あのゼブロール奴が君を裏切つた

な。たしかにさうだ。しかし、彼などは君の靴の紐を解くにも足らんわい。」

ルコックは彌次られてゐるやうな氣がして、極りがわるかつた。

「皮肉を仰しやらないで下さい。それでなくてさへ、私は今度の事件ですつかり評判を落してしまつたのですから。」

「折角讚めてゐるのに、そんな風に考つては困る。が、もう少し巧く行けさうなものだね。君は才能は十分だが、經驗が足りん。だによつて、少し有利な形勢が見えると有頂天になつたり、又、つまらぬことに失望落膽する傾きがある。そこぢや、腹の据ゑどころは。で、これまでの失敗は介意はずに、初一念を押し通して御覽。恰度蛾が燈火の周圍を離れないやうにな。若い者の失錯は有りがちのことで、今度の事件だつて、君は可成り粗忽をやつてゐるのだ。」

ルコックは、兒童が敎師からお小言を頂戴したときのやうに、頭を下げた。

「君は少くとも、三つの大失策をやつたね。それがために三度び好機を逸してゐる。」

「ですが、先生――」

「まア、まア、もう少し云はしてくれ。君は初めどういふ心懸けで出發したか。『決して物の表面を信じてはならぬ。事實に、又は事實らしく見える事柄に打衝かつたときは、その正反對を考へれば間違ひがない。』これが君の信條だつたではないか。」

「さうです。私はまつたくその覺悟で事に當りました。」

「結構な心懸けぢや。何處までもそれで押してゆけば、君の道はいつも明るく照されるのだが、殘念なことに、君はすつかりそれを忘れたね。」
「私がそんなへまをやりましたか？」
「ハ、ア、それぢや君は、デスコルバル判事が馬車から墮ちて、脚を挫いたと聞いたときに、どう考へたか？」
「私は信じました。何故つて——」
いひかけて一寸考へてゐると、先生はカラ〳〵と笑つて、
「ありさうなことだから、信じたんぢやらう。」
「假りに貴方が私だつたらどうお考へになりますか。」
「その正反對を信ずるね。その場合、正反對を信ずることが間違ひであるとしても、理窟の上でさうしなければならんのぢや。」
この亂暴な結論には、ルコックは承服しかねた。
「そんなら、デスコルバル判事が馬車から落ちたといふのは造りばなしで、實は怪我などしたのでないと、貴方は想像なさるのですか。」
「想像ぢやない。俺はそれを斷言するのぢや。」
と、老先生の顏は、急に眞面目な表情を取つた。

二六、正體はこれだ

「先生の御説によれば、デスコルバル判事は、何でもないのに怪我をしたと僞つて、二ケ月も邸に引籠つてゐるのですね。」
「その通りぢや。」
「だが、何のためにそんな謊をついたんでせう。」
「君にしてさういふ愚問を發するとは、情ないね。そんなことは直ぐに解りさうなものぢやないか。假りに君が裁判官だとする。そして或る事件が發生して、その犯人を君が訊問するために、監房を訪れたとする。犯人はそれまで身分を隱してをつたが、君が一ト目見ると變裝してゐることが判つた。しかも、その犯人が君の親友であつたら——或は仇敵であつたら——君はどうする？」
「どつちにしても苦しい立場です。公務と私情の板挾みですからね。私が裁判官なら、そんな事件の擔當は成るべく避けたいと思ふでせう。」
「さもあらう。ところで、其際犯人が君の親友でも仇敵でもいゝが、君は其男の素性を發表するか。」
これは非常に難かしい問題だ。ルコックは答へが出來かねて、考へてゐると、
「私が裁判官なら默つてゐます。」とアブサントが横合から答へた。「自分が云はなくても、誰か發見する者があるだらう。他人が發見するなら自分の良心に疚しい所がない——そんな風に考へます。」

アブサントは理窟を捏ねたのではなく、正直なところをいつたのである。
「よし〳〵。さてそんなとき、役目を避けるのには、どうしたらいゝか。何の彼のと考へるよりも、デスコルバル判事の遣り方が一等ぢや。脚を挫いたといへば、誰にも感づかれないで、二三ケ月引籠ることが出來るからな。」
「なるほど！　それに違ひありません！」
「そこで有力な證據を一つお目にかけようか。いつたい、人は自分の職業に對して或る程度の情熱を持つてゐるもので、デスコルバル判事が、セミュレ判事の許へ執事を使ひにやつて、事件がどうなつたかを訊かせたのは、あの人の職業に對する熱心が現はれたのぢや。しかし、その見方が肝腎ぢや。いかに熱心があつたにしろ、脚の骨を碎いた人が、高が旅藝人が人殺しをやつた事件の經過を、度々訊きにやる餘裕などありはしない。俺は脚を折つた經驗はないが、かうして痛風に惱んでゐると、たとへ世界の半分が他の半分を審判くやうな大裁判事件が起つたとしても、その經過を訊きに召使を差向ける氣持は、絶對に起らないね。それでデスコルバル判事が假病を使つてゐるといふことが、想像出來るではないか。」
ルコックは一言もなく頭を垂げた。
タバレ先生は、藥用酒を一杯ぐつと飲み乾して、
「君は、事件を解決する機會を數回取逃したぞ。例へばダイヤの耳飾りの持主を探した手順なども、

用意が足りん。」
「私としては、あらゆる苦心をしたつもりですが。」
「努力は認めるが、完全とはいへない。早い話が、ワッチョオ男爵夫人の遺物を賣拂つたといふ話を聞いたときに、君はどうした。」
「すぐに、その競賣を取扱つた男の許へ行つて、目錄を調べましたが、その目錄には大きなダイヤなどは一つも載つてゐないので、これは駄目だと思ひました。」
「いや、そこに手がかりがある。」と老先生は勇み立つて叫んだ。「いゝか、さういふ高價なダイヤが目錄にないとすれば、夫人は死ぬときに所持してゐなかつたのぢや。死ぬる前に、懇意な人へ贈つたか、賣つたかにちがひない。だから俺ならば、男爵夫人が親しくしてゐた女友達の名前を調べて、その貴夫人連の奥女中に手を廻すね。そのくらゐのことは、君のやうな若い好男子には、朝飯前の仕事ではないか。」
「そこまでは氣がつきませんでした。」
「待て、待て、こゝで君がやつた第二の失策を擧げなければならん。君は、メイが自分の所有だと僞つたあの旅行鞄に手をかけながら、まんまと一杯喰はされたではないか。あれは仲間の男が、マリアンブール旅館の女將に託けたもので、中に入れた衣類は、特にその目的で買入れたものだ。」
「私もさう睨んだけれど、あの場合、どうすることも出來ませんでした。」

「それだから駄目だつていふんだ。俺なら、巴里中の古着屋を一軒々々訊いて廻るくらゐのことはするよ。さうすると、何處かで『あゝ、これは私共の店で賣つた品です。これ〳〵の人相の人が寸法書をもつて買ひに來ました。』といふ奴に打衝かる筈ぢや。」

「失敗た！　そんな確かな、簡單な方法を、なぜ思ひつかなかつたのでせう。私は自分の莫迦に愛想がつきました。」

「まア、まア、靜かにしなさい。莫迦といへば語弊がある。不注意といつた方がいゝ。ところで、宥しがたいのは、メイを放した後の尾行の仕方ぢや。君は何故普通の警官のやうに、馬鹿正直に彼奴の後をつけ廻したのか？」

「そんならあのまゝ逃がしてやればよかつたと仰しやるんですか。」

「いや、只逃がしてはいけない。彼がオデオン座の階段へ腰を卸したときに、無論マリアンブール旅館へ立ち廻る思案をしたのぢや。俺ならば、そのときに先廻りをしないで、何處までも後を追けてゆく。そしていよ〳〵マリアンブール旅館へ立寄つて、間もなく出て來たならば、今度は放つておく。行きたいところへ行かせるがいゝ。その代り此方は旅館の女將から眼を離さないで、外出したなら、影のやうに後を追けるんだね。彼女は、メイが脫走した一件を眞先に例の仲間の男へ告げにゆくに違ひないんだから、そこを突きとめると、ひとりでに謎が解けて來るではないか。」

「なるほどさうでしたね。さうすべきでした。」

「ところが、君は旅館へ先廻りをして、ボーイを脅かしたではないか。漁師が鐘や太鼓で魚を追ひちらしちや、形無しだ。」

ルコックは注意力が二つに分れてしまつた。先生の意見を聽いてゐる傍から、無數の新計畫が勃然と起つて來る。もはやぢつとしてゐられない。

「先生、貴方は私を救つて下さいました。今の御說をうかゞつて、何だか取りかへしがつきさうな自信が出てきました。幸ひ、ダイヤの耳飾りや、その他の證據品が私の手許にありますから、今度は確かりやり直します。」

「それはいゝが、何を目的に活動をはじめるんだい。」

「無論、メイを發見するためにです。」

「君はまだ、あの道化者の正體がわからんのか？」

「解りません——」

ルコックは身ぶるひをして、顏をそむけた。先生から自分の眼を見られるのを恐れた。

「嘘を吐け。君は解つてゐる。メイなる者は、實はセルムーズ公爵その人ぢや！」

「ハツハツハ、際どい御冗談ですね。」

アブサントは笑ひだした。けれど、ルコックにとつて、それは眞面目なことであつた。

「私も一度はそれを考へましたが、自分で打ち消したのです。」

「なぜ打ち消したのか。」
「それは――その――」
「君はその論理が危いとおもつたゞらう。胡椒軒で人殺をやつたメイなる者がセルムーズ公爵であらうとは、途方もないことだからなア。けれど俺は少しも矛盾を感じないよ。そればかりでなく、君なんかは現代史に疎いから、そんな風にまごつくのぢや。ゼブロール警部のやうな平凡な探偵で一生を終りたくなければ、現代史ぐらゐは研究せにやならん。」
「今度の事件と現代史とどういふ關係があるか、私にはさつぱり譯がわかりません。」
先生は、それには答へないで、アブサントの方を向いて、
「君、濟まないが、書齋へ行つて、右の方の本棚から『現代名士傳』といふ大きな二冊つゞきの本を持つて來てくれないか。」

二七、哀れなルコック

アブサントがすぐに書齋へ行つて、その二冊つゞきの「現代名士傳」を抱へて來ると、タバレ先生は熱心にさら〳〵と頁をくりはじめた。
「えゝと、エスベイロン――エスカール――もつと先だな――エスケーラック――エシエル――デスコルバル、うむ、これだ〳〵。このデスコルバルだ。今俺が讀上げるから、聽いてゐたまへ。」

云はれるまでもなく、ルコックはおそろしく緊張して、耳をかたむけた。老先生は聲に力を入れて讀みはじめた。

デスコルバル（ルイ・ギヨーム・デスコルバル。男爵。）外交官及び政治家。一七六九年、十二月三日、モンテニヤックに生る。家はその地方の舊家にして、代々法律家を出す。巴里に遊學。成業間際にして大革命勃發。年少氣鋭の彼は、初め熱心に革命主義を謳歌せるも、やがて自由てふ美名のもとに極端なる虐政の行はるゝを見て、慊焉の情を起せる折柄、親戚にあたるロードレの勸めにより、反動派に與す。
其後、外務大臣タレーランの推擧により、第一總統ナポレオン・ボナパルトの恩寵をうけ、特命大使として瑞西に派遣せらる。これ彼が外交官たる經歷の第一歩なり。次いで、那翁が帝位に在る間、數次の重要なる條約締結に參與して偉勳を奏し、ます〳〵重用せらる。それがために、王政復古の際――那翁沒落し、ルイ十八世王位に復するに及び、たちまち失脚して、悲境に立てり。モンテニヤックに内亂の勃發するや、反逆罪に坐して逮捕せられ、軍法會議に於て死刑を宣告せらる。但し此刑は執行せられずして已めり。そは、セルムーズ村の牧師にして、彼の親友なるミドン師が、彼のために身を挺して命乞ひをなせるがためなり。
デスコルバル男爵に一子あり。夙に裁判官たり。ルコックは、聽き終つてがつかりした。

「今のは、デスコルバル判事の父親の傳記ですね。そして、何も參考になりさうな點がないではありませんか。」

すると、先生はにや〳〵笑ひながら、

「しかし、この傳記によつて、先代デスコルバル氏が死刑の宣告をうけた人だつていふことが判つただらう。もう少しの御辛棒が願ひたいね――今に何もかも判然するから。」

また新らしい頁を開けて、今度はセルムーズ公爵の條を讀みはじめた。

セルムーズ（アーヌ・マリー・ヴイクトル・ド・タングリ。公爵。）將官及び政治家、一七五八年一月十七日、モンテニヤック附近のセルムーズ莊に生る。セルムーズ家は、佛蘭西にて最も舊く、最も有名なる一族なり。

セルムーズ家の一族は、革命勃發と同時に外國に亡命し、アーヌ・ド・セルムーズは、コンデ軍に在りて偉功を樹てたり。數年後、劒を負うて露西亞に客となり、那翁一世の率ゐし佛蘭西軍が露西亞遠征に失敗し、かの慘澹たるモスコオ退却の際、公爵は露西亞兵を指揮して母國軍を驅け惱ませりと傳ふ。

その後王政復古の業成り、ブルボン家のルイ十八世が王位に復するに及び、彼もまた亦佛蘭西に歸る。過激尊王黨の一人として聞ゆ。彼はさきに革命政府のために沒收せられたる廣大なる私領を回收し、且つ外國にて獲得せる爵位尊號を允許せらる。

王命によりて軍務に就き、モンテニヤック師團長に補せらる。幾何もなく同地方に那翁黨の叛亂勃發するや。彼は軍法會議の首班として、その一味徒黨を審判するにあたりて、峻嚴、一歩も假借せず、悉く彼等を斷罪せり。

「解りました！」ルコックは叫んだ。「それは先代セルムーズ公爵の傳記でせう。つまり、デスコルバル判事の父親に對して死刑を宣告した者は、先代のセルムーズ公爵だつたのですね。」

タバレ先生は得意滿面。

「どうぢや、歴史の有難味がわかつたか。もう一つ大切なことが殘つてゐる。聽いてゐたまへ。」

さういつて、更に、當代セルムーズ公爵の項を讀みあげた。

セルムーズ（アーヌ・マリー・マーシャル。）――前掲セルムーズ公爵の嗣子。一七九一年、一族の亡命中、倫敦に生る。英吉利において初等教育をうけ、墺地利の宮廷において高等教育を完成す。彼は歸國後、しば〳〵重要なる公務をおびて、墺地利宮廷に派遣せらる。政見、及び政敵に對する僻見において、彼は全然、父公爵のそれを繼承せり。彼はその學殖と、識見と、卓拔の才能をもつて、王黨の成長に貢獻し、一時黨首として辛辣なる手腕を揮ひ、毀譽を一身に集む。

後つひに批難の標的となり、官職を退く。彼のために壓迫せられたる反對派の、彼に對する反感は、頗る根深きものにして、恐らく彼の存生中は消滅せじと云はる。

病先生は、讀み終つて「現代名士傳」を閉ぢた。そしてわざと謙遜した假聲をつかつて、
「どうですな、俺の小さな歸納法についての御意見は？」
ルコックは、答へに窮るほど、種々の考へで頭が充滿になつてゐた。
「しかし變ですね。セルムーズ公爵のやうな人が入獄して、二ケ月も邸を空けたとすれば、巴里中にそれが知れ渡らなければならん筈ですがね。」
「馬鹿をいひなさい。公爵夫人と忠義な執事と策應してうまく立ち廻るなら、公爵は、二ケ月はおろか、たとへ一年間邸を空けたつて平氣なものだ。召使でさへも主人の不在に氣がつくまい。」
「解りました。が、もう一つ、どうしても腑におちない事實があります。」
「何だね。それは。」
「外でもありませんが、胡椒軒の喧嘩で人殺しをやつた者が、眞實セルムーズ公爵ならば、すぐに名乘りをあげて、自分は暴漢に襲はれ正當防衛の手段に出たといへば、無罪放免になることは、判りきつてゐるぢやありませんか。公爵の名前一つで、監房の戸は直ちに開かれます。それだのに、彼は何を苦しんで、自殺などを企てたのでせう。セルムーズ公爵のやうな大貴族に取つては、人生は永久の春です。自殺を計るなんて、想像もつかないことです。」
すると先生は、あきれたやうに、「ふむ」といつて、更に説明の勞をとつた。
「君は、たつた今讀んだ文句を忘れたのか。『反對派の彼に對する反感は頗る根深し。』とあつたではないか。彼がいかに一方の勢力家であるとしても、一旦入獄すれば、そこに弱味が出來る。その弱味を敵から衝かれた日には、隨分高い代償を拂はねばならん。いゝか。」
かういつて、まづ政治家といふものゝ難かしい立場を説いてから、
「なほ、あの晩女を伴れて――それは多分公爵夫人だらうと思ふが――胡椒軒へ行つたことを説明する場合になると、公爵は家庭上のある忌まはしい祕密を暴露しなければならんのだ。そこで恥を取るか、自殺を取るかといふ二つた筋道に迷つた擧句に、斷然生命を捨てゝ名譽を完うしようといふ、悲愴な決心をしたのぢや。」
先生は一語々々に力を籠めて説き明した。
先刻から兩人の會話を聽いてゐて、しつくり了解めなかつたアブサント爺も、こゝに至つて成るほどと感心した。胸がからりと晴れわたつたやうな氣分になつた。
ところがルコックは、眞蒼な顏をして脣をかすかに震はせ、一大決心を堅めた人のやうにすつくと起ちあがつた。
「先生、どうぞ私の虛僞をお許し下さい。」と彼は思ひ切つていひだした。「かう申しては誠に失禮ですが、實は先刻から承まはつた御説の趣きは、すべて、私も一度は考へてみたことなのです。たゞ、私は自分の考へに確信が持てなかつたので、先生の御口をとほしてそれが聽きたいばつかりに伺つたのです。」

やがて彼は、斷乎たる決心を色に現はして、つけ加へた。

「今、私は取るべき手段を決めました。」

ところが、タバレ先生は、

「お氣の毒ぢや。」と慘ましさうに兩手をあげて、「君はセルムーズ公爵を捕縛しようといふのか。可哀さうなルコック！　公爵は、一旦逃れた以上は、もはや萬能ぢや。しかるに君は、微力な一探偵に過ぎないではないか。今、公爵に立ち向つたなら、それこそ暴虎憑河ぢや。硝子を鐵壁へ叩きつけるにも均しく、君といふものが微塵に粉碎されるばかりだ。まア〳〵思ひ止まるがよからう。早まつたことをして、生命を取られたつて、俺は知らんぞ。」

「決して、早まつたことなど致しません。今公爵を捕縛しようなんて、及びもつかぬことです。しかし、私は早晩、彼の祕密を突きとめた上で、きつと押へつけて見せます。私は當分の間隱れて活動します。そして、この事件の祕密をすつかり探査して、メイなる者がいよ〳〵セルムーズ公爵に相違ないといふ動かぬ證據をにぎつた曉において、私は猛然と表面に乘りだして來て、きつと復讐してお目にかけます。私が、この恥辱を雪がずに措くものですか！」

青年探偵ルコックは、切齒扼腕して師の前に誓つた。

ルコック探偵後記

一、不吉の使者

さて話は、初陣のルコック探偵がこの慘澹たる敗衂を嘗めた時から、二十餘年前に溯る。

それは千八百十五年、八月の第一日曜のことであつた。時刻は恰度午前の十時、こゝセルムーズ村の教會堂では、彌撒のはじまりを告げる鐘の音が、おごそかにひゞきわたると、附近の善男善女が三々五々つれだつて、續々とやつて來た。

ところが、いつもなら教會をかこつけに出て來る人々で、村の酒場が押すな〳〵の大繁昌を呈するのだが、この日はまつたく變つてゐた。寺庭のそこにもこゝにも一團をなして集まつた男達が、笑ひ聲一つ立てないで、ひそ〳〵囁き合つてゐる樣子は、何となくたゞならぬ事件が迫つてゐるのを思はせた。

尤もそれは、ブルボン王家のルイ十八世が、チュイルリー宮殿へ歸還してから僅かに一ケ月、かのウオタールーに流された血潮はまだ大地に生々しい痕を止め、一方には、百二十萬といふ聯合軍の大兵が佛蘭西國内に駐屯して、普魯西のマッフリング將軍が巴里に戒嚴令を布いてゐる時であつた。

殊にこのセルムーズ村では、王政復古と聞いて、人民が大恐慌を來した。また壓制と增稅で惱まさ

れるばかりでなく、村が今にも亡びさうな形勢になつて來たのだ。といふのは、初めこの村の人々は大抵、革命政府が舊貴族から没收して人民に拂下げた土地を買受けたのであるが、外國に亡命してゐたその貴族達が、今度の王政復古で内地へ歸つて來たについては、早速舊領地を回收するにちがひない。さうすると、村人はたちまち生活の本據を奪りあげられるわけだ。

さてこそ、この附近は、今や人心恟々たる有樣となつたのである。

そのとき、一本街の彼方から、馬蹄に火花を散らしながら驅けて來る者があつた。騎手は汚い青色木綿の寬衣を着た男だ。

「やあ、シュバン爺がやつて來たぜ。自暴に慌てゝゐやがる。」

「彼奴、馬泥坊をやつて來たんだよ。」

シュバンといふ爺は、直ぐにこんなことをいはれるだけ、評判のわるい男だ。日傭取が表看板だが、その實は泥坊が本職で、妻子を盜みによつて養つてゐるのだ。この一家は、麥でも、酒でも、薪でも、果物でも、すべて盜んだ物ばかり使つてゐるといふ强か者で、そ土地では毛蟲のやうに嫌はれてゐるのである。

やがて爺は、村の旅舍の前に馬を止めて、ひらりと飛びおりた。人々は、平生ならこの男を避けたいのだが、今は場合が場合なので、此方から聲をかけた。

「おい、シュバン爺さん、そんなに急いで何處からやつて來たんだい？」

「町からだよ、一刻も早くお前さん達に知らせるためにね。」

町といふのは、こゝから約十哩を隔てたモンテニャックの町を指していふので、其町はこの郡の首府になつてゐるのだ。

「さては、敵が押寄せたか？」

「あゝ、やつて來たぜ。だがその敵は、お前さん達の考へてゐる外國兵ぢやねえんだ。それはな、舊の御領主のセルムーズ公爵さ。」

「ナ、何だつて？　公爵は死んだつて噂だつたぢやないか。」

「それが大間違だよ。現に公爵は町のフランス旅館に泊つてるんだから、これほど確かなことあねえ。今朝俺が旅館の前を通ると、旅館の主人のロオヂロンさんが、俺に金をくれて何をいふかと思ふと、實は昨夜からセルムーズ公爵が御子息と二人の召使をつれて、此館に泊つてゐるが、お前濟まないけれど、今からすぐにうちの馬に乘つて、セルムーズ村へ行つて、俺の友人のラシヌール郡長にこのことを告げてくれつていふ頼みだらう。そこで俺は泡ア食つて飛んで來たのさ。」

「公爵が町へ來たつて、俺達の關係したこつちやない。何時までゝも旅館に泊つてゐたらいゝぢやないか。俺達は出迎へになんか行きやしない。」

「迎へに行くまでもなく、公爵樣は二時間と經たないうちに、此村へお出でになるよ。」

「此村へ來てどうするつもりなんだらう？」

「それは聞かないがね、」とシュバン爺が答へた。「大概わかつてゐるぢやないか。舊の領地を奪還ようつていふ肚なんだよ。そこでルッスレ、お前さんは河畔の畑を返さにやなるまい。彼處は二タ作出來て結構な場所だからね。ゴオシュ爺さん、お前さんはあの受難像の立つてゐる土地を奪あげられるさ。それからシャンルイノオは、ボルドリーの葡萄畑が危えぜ。」

シュバン爺は、不吉な使者に適はしい顰めつ面をしてゐたが、もし仔細に彼を觀察したなら、脣邊に皮肉な微笑を湛へ、眼は意地わるく光つてゐるのを認めたであらう。彼は平生村人から爪彈きされてゐる鬱憤をば、こんなときに晴らさうといふので、内心に快哉を叫んでゐるらしかつた。

「兎に角、俺たちはデスコルバル男爵に御相談しようぢやないか。」

と、シャンルイノオと呼ばれた、威勢のいゝ若者がいふと、

「それが好い〳〵。」

百姓達が異口同音に贊成して、男爵邸へ出かけようとすると、その中でとき〴〵新聞を讀んだりして、村の物識りといはれてゐる男が皆を押制めて、

「待て〳〵。迂闊なことをしてはいけない。デスコルバル様は、ブルボン王家が還つてからといふものは、すつかり立場がわるくなつたんだ。内務大臣はあの人を間罪表の中へ書きこんで、警察に監視させてゐるんだからな。」

「そんなことあ何うだつていゝさ。」シャンルイノオは叫んだ。「デスコルバル様は相談に乘らないまでも、權利を護る方法を俺たちに教へて下さるだらう。」

するとシュバン爺は例の皮肉な口調で、

「まア待つた。さう慌てなさんな。公爵様は何もお前さん達を虐めるつもりぢやあるまい。お前さん達が舊領地を拂ひ下げたといつたつて、高が知れたもんで、彼處いらの土地は皆合せても、一年に五千法ぐらゐの收入しかなかつたものだ。」

「まつたくだ。」とシャンルイノオが相槌をうつた。「その收入が四倍にもなつたのは、俺たちが汗水滴らして開墾したお蔭ぢやないか。元は茨つ株だらけで、山羊も通れない荒地だつたんだからな。」

「公爵様は、どこまでもお前さん達から土地を奪上げるなんて云やしまい。小米の者を虐めて、こゝら全體の騒動になつちや困るからね。俺の考へでは、公爵様はたつた一人の分を奪上げるつもりだらうと思ふよ。その一人といふのは、元郡長のラシヌールさんだ。」

「それは左樣だらう。」と一人の年寄がいつた。「ラシヌールさんは、舊の公爵領を大概自分の所有にしてゐるんだからね。」

「さうとも。序にぶちまけて云つてしまはうぢやないか。」とシュバン爺は得意になつて、しやべり出した。「第一、ラシヌールさんは公爵家のお邸に住まつて、公爵家の森を自分の獵場にして、公爵家の馬車で出歩くといふ贅澤ぶりだからね。ところが、今から二十年前はどうだい、あのラシヌールは、俺と同じ貧乏人だつたぢやないか。それが今では年收五萬法の大地主で納まつてゐる。大層な御威

勢で、お前さん達があの人の土地で雀一羽でも殺したら、牢屋へ叩つ込まれるんだ。那翁皇帝のお蔭で郡長にまで經上つたが、今度の王政復古で首になつたんだ。が、あの人はそんなことは何うだつて介意やアしない。今でも事實上は、この土地の大將なんだからね。」

そのとき教會堂では恰度彌撒が濟んだので、善男善女がぞろ〳〵と出て來た。と、やがて問題の人ラシヌール氏も、妙齡の一人娘をつれて出口のところへ立ち現はれた。その娘は眼が覺めるやう美人だつた。

シュバン爺はつか〳〵と彼の前へ行つて、早口に旅館の主人の言葉を傳へた。ラシヌール氏は、思ひもかけぬその知らせに仰天して、殆んど失神せんばかりであつたが、やがて氣を取り直して、何か心に決したもの〻ごとく、足早にそこを去つた。

それから間もなく、四頭立ての旅行馬車が一臺、街道を大驅けに驅けて來て、牧師館の前へぴたりと停つた。

と、かのシュバン爺が、女房と二人の倅を從へて、親子四人が物々しくその馬車を取圍いたものだ。そして彼等は聲を限りに叫んだ。

「セルムーズ公爵閣下萬歲！　ばんざアい！」

それは實に奇妙な光景であつた。

公爵はつか〳〵と牧師館へ入ると

「やア、牧師さん。」大貴族に特有な、決して人見知りをしない寬濶さでいつた。「突然に邪魔をしてお氣の毒だね。俺はセルムーズ公爵。こゝにゐるのは俺の倅——侯爵です。」

牧師はお辭儀をした。しかし客の爵位に阿るといふ風でもなかつた。

この牧師は、元はモンテニャックの水百姓の倅だが、羅甸語を修めて、僧籍に入つてからも刻苦修養を怠らなかつた人で、なか〳〵確かりしたところがあつた。村ではミドン師と呼ばれ、誰も彼も尊敬してゐた。

「舊領主の御訪ねにあづかりまして、光榮の至りです。しかし御滿足になるやうなお構ひも出來ませんで、お氣の毒です。」

「いや、そんな心配は要らん。俺は老軍人ぢやから、特別に構つてなどくれなくてもいゝ。しかしお邪魔をしたゞけのお禮はあげるよ。」

牧師は眼を光らせた。この無躾な言葉にむつとしたのであつた。

牧師は、この舊領主の歸還で村人がまた難儀をすることだらうと思へば、何となく悲しい氣持になつて、それとなく相手の樣子を研究しはじめた。

公爵は五十七になつてゐたが、實際の齡よりはずつと若く見えた。青年時代には政變のために苦勞をして、中年には放浪、それに引きつゞいてあらゆる放埒をやつて來たにも拘らず、その頑丈な健康は少しも衰へを見せてゐない。彼は貴族らしいすべての優雅と、廷臣に特有なすべての惡德とを備へ

てゐるらしかつた。それに貴族の通弊ともいふべき、頑固で傲慢な氣性は爭はれないやうであつた。

子息のマーシャルは、父親ほど骨格が逞しくはないが、やはり堂々たる風采をもつてゐた。澄んだ碧眼とふさ〳〵した髪は、一層その容貌を美くしく見せた。到るところで若い婦人から騷がれたのも無理がない。教育と智慧においては、昔風な父親よりはずつと勝れてゐるだらう。片意地で、貴族らしい偏見をもつてゐるとしても、父親とちがつて、多少考へてから實行するといつたやうな性質であるらしい。

智慧者と呼ばれた牧師の、公爵父子に對する觀察は、ざつとこんな風であつた。

なほこの牧師は、政界の事情にも通じ、一般人民の感情も知りぬいてゐるので、公爵の無鐵砲な意見に一々雷同するといふやうな、馬鹿げた眞似は出來かねた。それで政治上の談から早速二三の押し問答がはじまつたが、そのとき召使が來客を取次いで來た。

「ラシヌール樣が、孃さんを伴れてお見えになりました。公爵樣にお目にかゝりたいさうでございます。」

二、財産返上

公爵は、このラシヌールといふ名前が思ひだせなかつた。

「ラシヌールといふのは何者だね、牧師さん？」

「ラシヌール氏は。」と牧師はひど〳〵躊躇ひながら答へた。「セルムーズ莊の今の持主でございます。」

「うむ、俺の莊邸を奪つた不屈者がやつて來たか。その者を此室へ案内しなさい。」

やがてラシヌール氏が、孃をつれてそこへ入つて來た。顏は蒼ざめて、額に脂汗を滲ませ、そのぎらぎらする眼付に、心の困惑があり〳〵顯はれてゐた。

「お前か、セルムーズ莊の主人といふのは？」

公爵はぞんざいな口調で眞向から浴せかけた。

牧師は、これまで名譽ある紳士として交際して來たラシヌール氏——この地方の最有力者だつたラシヌール氏が、こんな侮辱をうけるのを見るに忍びなかつた。

「ラシヌールさん、どうぞお掛けなすつて下さい。孃さん、あなたもどうぞ——」

牧師は公爵へ面あての意味をも含ませて、鄭重に椅子を勸めた。が、ラシヌール父娘は遠慮して、几帳面に起立してゐた。

「公爵樣。」とラシヌール氏が愼ましく云ひだした。「私はもと御邸の耕夫でございました。」

「あゝ、さうか。」

「貴方の伯母さまにあたるアルマンドお婆さまは、私の母を大變可愛がられまして、私が生れたときは名付親になつて下さいました。」

「おゝ、さうだ、俺はいまお前を思ひだしたよ。俺の家族は隨分お前等の面倒を見てやつたものぢや

が、多分その恩返しのためぢやらうな、大急ぎで俺の莊邸を買込んだのは？」

元は賤しい耕夫であつたとはいへ、修養と刻苦精勵で、今の地位を贏ち得たばかりでなく、人格も向上し、學問も獨學で十分に出來てゐる。そして今は自分の眞價をよく心得てゐる。いかに何でもこんな侮辱に甘んずることは出來ない。それで彼は憤然席を蹴つて歸らうとした。

アルマンドお婆さんが死ぬる間際に、彼を枕邊に呼んで、かねて隱してあつた八萬法の金を彼に託けて「この中一萬法はお前にあげるから、あとの七萬法で、競賣に出てゐるこの莊邸を買取つてくれ。」といふ遺言であつた。そのことは、娘の外に誰も知つた者がない。こゝで沈默をまもれば、彼は依然セルムーズ莊の主人となつてゐられるのだ。

けれど、娘のマリーが眼顏でしきりに急き立てるので、彼もつひに決心して公爵のはうへ向きなほつた。

「公爵樣、私がセリムーズ莊を買取つたのは、アルマンドお婆さまから懇々のお賴みがあつたからで、その金は實はお婆さまからお託かりした金でありました。ですから、私はその財產を貴方に御返しするために伺つたのでございます。」

「さうか、元金のはうはそれでいゝが、」と公爵はいつた。「利子はどうなるんだね。俺の記憶によれば、このセルムーズから上る年收は、二萬法はあつたゞらう。それをよく廻したら可成りの額になつてゐる筈ぢや。その金はどうしたのか？」

この場合、さうした要求はあまりに苛酷であつた。子息のマーシャルもこれには呆れかへつて、そんな話は止めるやうに眼付で相圖をしたけれど、公爵には通じなかつた。

「その收入は生活費と、子供等の敎育費につかひました。生活費と申しても、まる〳〵自分のことにばかり使つたのではなくて、大部分は土地の改善費に用ひました。それがために、以前にくらべて二倍の收穫があがるやうになりました。」

とラシヌール氏、が氣兼ねをしながら恐る〳〵いふと、舊領主はせゝら笑つて、

「要するにお前が二十年間領主の役目をしてゐたのぢやな。面白い喜劇ぢや。お前は裕福になつたゞらう。」

「どういたしまして、私の所有物とては何もございません。それゆゑ、アルマンドお婆さまから私が頂いた一萬法だけは、頂戴いたしたうございます。」

「なに、伯母がお前に一萬法與れたといふのか？　それは何時のことぢや？」

「土地を買ふ金をお託かりしたその晩でございました。」

「ふむ、伯母がその金をお前に與れたといふ證據があるのか？」

生憎證據といふものはないので、ラシヌール氏は全く答へに窮してしまつた。

「父の言葉が何よりの證據でございます。」そのとき、つと前へ進んだマリーが、凛とした聲でいつた。「父は自分から財產をお返ししようと申し出る位ですから、決して僞りではございません。」

マリーは、こんな田舎には稀に見る、淑やかな美人だつた。都會で多くの美しい貴婦人を見て來たマーシャルも、この娘の粧らざるに輝いてゐる美貌には見惚れないわけに行かなかつた。

何をいつても甲斐がないと知つたラシヌール氏は、やがて衣嚢から書類の束を取りだして、

「これは地權證書ですが、たつた今お返しします。私は貴方から何も頂かうとは思ひません。そしてこの村へは二度と再び足踏みをしない決心です。文無しで入つて來た私は、文無しで出て行くばかりです。」

と、憤然として彼は暇をつげた。そして外へ飛びだしてからマリーを顧みて、いつた。

「娘や、お前は今の話をどう思ふ？」

「結構ですわ。お父さまは立派に義務をお果しになりました。かうした決心の出來ない人こそ可哀さうだと思ひますわ。」

父親は答へなかつた。そしてマリーがまた何か云ひかけると、

「うるさい！　默つてをれ！」

それつきり彼は首をうな垂れて、默々として歩いて行つた。長の歳月粒々辛苦して築きあげた地位をば、一朝にして、讐へやうのない屈辱の下に、根こそぎ奪ひ去られたのである。その怨みのいかに深いかは、彼の身になつて見ねばわからぬことであつた。

娘も言葉なく、はら〳〵して後に從つた。

すると、「モシ〳〵、待つて下さい。」と呼びかけながら、呼吸せき切つて駈けて來たのは、今の先別れたばかりの公爵家の子息マーシャルだ。彼は何とかしてもう一ト目この美人を見て、物をいふ機會が捉へようとするのであつた。

「僕は貴方がたを追かけて來たのです。」と彼はラシヌール氏によりも、娘に向つて聲をかけた。「嬢さん、僕が話をつけるから、御安心なさい。僕はあなたのやうな美くしい眼に、涙を知らせたくないんです。父には何とでも辯護してあげます！——」

「いや餘計なお世話だ。ラシヌール嬢は辯護人など要りはしない。」

と唐突に横槍を入れた者がある。マーシャルが喫驚して振りかへると、そこに一人の青年が突立つてゐた。それは、かねてマリーと婚約者の間柄である。デスコルバル男爵家の子息のモリスであつた。

「何をいふ？　僕はセルムーズ侯爵だ。」

「僕はモリス・デスコルバルだ。」

もう一言侮辱の言葉が出たら、決闘の口實にしようと待ちかまへた。彼等は、親達の黨派からも自分達の戀においても、互ひに仇敵であることを知つて、眼から火が出るほど睨み合つた。がマーシャルは、父公爵のことを思ひだすと、この場は穩かに退きあげねばならぬと思つたので、

「デスコルバル君、この復讐はきつとするぞ。」

捨て臺辭を殘して、元來た方へ引きかへした。と、モリスは後から浴びせかけた。

「そんなことをいつて、後で悔むな。」

ところが、その次の日――モリスは近所の森で、いつものやうに戀女のマリーを待つてゐたが、暫くして彼女の姿が見えたので、直に駈けて行つて、優しく手を執つて脣におしあてようとすると、彼女は悲しさうな身ぶりで、その手をひつこめた。

「モリスさま、わたしはもう出られないのですけれど、貴方が御心配なさるといけないと思つて、父に隠れてまゐりましたの。何故つて、たつた二時間前に、父と堅い約束をしたのです。もう二度と貴方にはお會ひしないし、お手紙もあげないつていふことをね。」

とマリーは急きこんだ口調でつゞけた。

「わたしはお別れしなければなりません。幾ら焦つたつて、どうすることも出來ないやうになりました。わたしはこのことを申しあげるためにまゐつたのです。モリスさま、わたしのことはどうぞ忘れて下さいまし。」

「忘れろつて？　ひどいことを云ひますね、マリーさん。では、あなたも僕のことを忘れるつもりですか。」

「わたしは弱い女です――」

「驚いたね。僕はこんなことにならうとは思はなかつた。一體あなたは、お父さんを動かす方法を知らないから困る。」

「そんなことはありません。わたしは父の足許にひれ伏して願ひましたわ。けれど、父はどうしても諾いてくれません。」

「それは說き方が足りないからです。幾ら父親だつて御自分の氣まぐれで、僕たちの幸福を損ふ權利はない筈です。これほど熱心な戀ゆゑに、あなたは當然僕のものだ。僕はきつと說き伏せてみせる。」

「モリスさま、貴方は誤解していらつしやいます。どうぞ父にお會ひになることは止めて下さい。今となつては、父がした理由がよくわかつてゐます。どうぞ眞實を知つて下さい。わたしは父がお斷り承知しても、わたしがお斷りしなければならないのですから。」

「はゝア、あなたはシャンルイノオに心中立てをしてゐるんだね。彼はあなたと結婚すると振れ廻つてゐるつていふから、きつとさうでせう。」

「それはあんまりですわ。シャンルイノオと父の間にどんな話があつたとしても、わたしが諾くものですか。わたしは已むを得ない事情の犧牲になつたのです。そのために愛してゐる貴方とお別れしなければならなくなりましたけれど、他の男を受入れるなんて、そんなことはありません。」

「それなら僕が惡かつた。」

モリスは聲を落した。しかし彼は何とかして活路を開かうと焦つた。

「マリーさん、かうなつた上は、僕と一緒に駈落て下さい。」と急きこんでいつた。「今から出かけると日の暮れる前に國境が越えられやう。」

彼は手をひろげてマリーの方へ寄つて行つた。そのまゝ彼女を抱へて駈けださうとする意氣込だつた。が、マリーはたゞ一瞥でそれを押止めた。

「駈落るなんて、飛んでもないことです。落目になつて誰からも見離されたあの可憫さうな父を、どうして棄てられませう。この上わたしがゐなくなつたら、父はどんなに落膽するでせう。ですからそんな話はもう止めにして、貴方はどうぞお歸りなすつて下さい。」

折から人の來た氣配に、その話はそれつきり杜絶えた。

モリスは寢耳に水のこの婚約破棄は、何の意味かさつぱり解らなかつた。しかしそれは何うあらうとも、逆境におちたマリー父娘を飽くまでも助けねばならぬと、彼は心に誓つた。

三、丘の孤屋

ラシヌールは、多年住みなれたセルムーズ莊と、それに附屬する一切の土地財產を舊領主の手に返上した。そして彼が新に隱遁した草庵は、丘の上に建つた孤屋で、間數は三間しかない、見すぼらしい家であつたが、眺望は實に雄大だつた。オアゼルの溪谷を眼下に見おろし、遙か彼方には、峩々たる巖の上に聳えてゐるモンテニャックの城砦が手に取るやうに見えた。そこへ初めて訪づれた、モリスの父親のデスコルバル男爵は、小急ぎにやつて來て、輕く戸口を叩いた。

やがてラシヌールは、男爵を奥の一間へ案内した。

「こゝが客間兼書齋です。」

裝飾などは見すぼらしいけれど、書籍は何成り多く積み重ねてあつた。そこに三人の青年が、せつせと幾つかの小荷物を取片づけてゐた。その一人はシャンルイノオだつたが、もう一人は知らない青年であつた。

「これが倅のジャンです。」とラシヌールがその青年を男爵に紹介した。「十年前に御覽になつたときとは、まるつきり變つたでせう?」

ジャンは恰度二十歳だつたが、骨ぼつたい顏に、早熟にも口髭など生やしてゐるので、齡よりも老けて見えた。脊がすらりと高く、體格も立派で、容貌だつて人並以上に賢さうだが、それでゐてあまり好い印象を與へない。何處か落ちつきのない眼付で、狡猾さうな笑ひ方をする青年だつた。

「學費がつゞかなくなつたので、此子を巴里から呼び戻しました。」とラシヌール氏は說明した。「しかし今度の沒落は、此子のためにはいゝ藥になりませう。百姓の子なんか都會へやると、碌なことを覺えませんからな。親は偉くなつて貰ひたさに遊學させるんですが、子供の方では却つて墮落する者が多いので——。」

「お父さん、止して下さい。」青年は慌てた。

「そんなことは二人つきりのときに仰しやつて下さい。」

「いゝよ、デスコルバルさんは他人ぢやないんだから。ねえ、男爵、私はどんなにこの子を自慢した

でせう。親馬鹿とはよく云つたものです。それだのに、此子は年中賭博宿だの、舞踏場のやうなところに入り浸つてゐたさうです。それもいゝが、しまひに下等な寄席の踊り娘に迷ひこんで、其娘を喜ばせるために、自分も舞臺に立つたといふから、慊れるぢやありませんか。」

「舞臺に立つことは、何も咎めるには當りますまい。」

「しかし親を欺くことは罪惡です。學資を貰つてゐながら、方々に借金をこしらへて、それが二萬法といふ莫大な額になつたのです。半月前なら私も多少の融通が出來たけれど、今はどうすることも出來ません。といつてその借金を拂はぬわけにも行かないから、この際セルムーズ公爵父子のお袖に縋らうかと、實は思案をしてゐるところです。」

男爵は、その言葉の意外なのに驚いた。あれほど怨んでゐた公爵父子に金の無心を云はうとする心もちが、一寸解りかねた。

「その後公爵に會ひましたか。」

「公爵にはお目にかゝりませんが、御子息とは度々會ひました。先方では惡い顏一つしないで、何もかも私の要求を容れてくれました。私がアルマンドお婆さんから貰つた一萬法も出してくれることに話が決まりました。そればかりでなく、私をセルムーズ莊園の支配人に採用して、元の獵場看守の小舍に住ませようといふ相談もありましたが――それだけはお斷りしました。私は、これから一奮發して、ほんたうに自分自身のものを築き上げるつもりです。」

「それで差當り何をやるんですか？」

「行商をやります。御覽のとほり、品物も仕入れてありますがね。」

「それはつまらん。」と男爵はいつた。「そんなことで活計が立つものでない。」

「いや細かく算盤をはぢいて決めたのですから、大丈夫です。ざつと三割の利益があります。何しろ大の男が三人がかりですからね。私と倅と、それにシャンルイノオも仲間になつてくれます。」

やがてラシヌールは、男爵の訪問時間が可成り長びいたことを氣附かせるために、そは〳〵と包みの整理を手傳つたりした。しかしそんなことで追拂はれる男爵ではなかつた。

「ラシヌールさん、實は其方に懇談したいことがある。」

「さア、御覽のとほり、私は忙しいんですがね。」

「たつた五分間でいゝです。今日お忙しければ明日出直します。俺はこの話が出來るまでは、毎日でもやつて來ます。」

ラシヌールはたうとうあきらめて、二人の青年を他室へ遠慮させてから、

「さてデスコルバルさん、御用向は大ていお察ししてゐます。多分マリーと御子息との婚約の一件でせうが、あれだけは堅くお斷りします。御子息は死ぬほど失望されたでせう。それはよく解つてゐますが、私としてはさうするより方法がありません。その理由はどうぞお訊きなさらんで下さい。」

「そんなら、俺を友人と思はないんだね。」

「親友です――親友なればこそです――これまでの御好意は一生涯忘れることではありません。さうした思ひ出がなければ、私といふものはどんなに寂しく、惨めな人間だつたでせう。しかし、それだからといつて、今度の事情を打ちあけるといふことは出來ません。」

やはり男爵の考へたとほりだ。彼等は行商に事よせて毎日方々に出歩き、荷物の運搬もなか〳〵忙しさうだ。ラシヌールが近頃馬を一頭買込んで、それに乘つて附近の村々を駈け廻つてゐるといふ噂も聞いてゐる。そればかりでなく、この草庵には、百姓婆の客が間斷なしに出たり入つたりしてゐるのだ。もはや疑ふ餘地はない。そこで男爵はラシヌールの腕をばちぎれるほど握りしめて、

「ラシヌールさん、貴方はセルムーズ公爵家に對して、どんな恐ろしい復讐を考へてゐるのか。俺だつて子供ぢやあるまいし、大てい察しがつきますよ。貴方がセルムーズ家をます〳〵怨んでゐるといふことはね。」

「そ、そんなことは――」

「隱したつて駄目だ。その怨みを忘れたやうにいふのは、多分、先方に油斷をさせるため、そして最後に、徹底的にやつつけるため――」

そのとき突然に戸が開いて、マリーが閾に立つた。

「お父さま、セルムーズ侯爵さまがお見えになりました。」

「もう少しで用談が片づくところだから、一寸お待ちを願ひますといつておくれ。」

すると男爵は聲をひそめて、

「あの青年がやつて來ましたか。」

「えゝ毎日です。例日はもつと遲く來ますがね。」

「御宅では彼を歡迎するんだね？」

「えゝ、あの人の好意を無にするわけには行きませんからな。」

「しかし貴方は、あの若い侯爵が毎日通ひつめる目的がお判りでせう。」

「目的といつても、私に會ひに來るだけですよ。」

「ところがお氣をつけなさい。シャンルイノオは嬢さんと結婚をするなどといつてゐるさうだし、あの侯爵は侯爵で、嬢さんを――」

「妾にする――つもりかも知れません。しかし娘は確かりしてゐるから心配はありません。」

とラシヌールは、男爵に歸宅を催促でもするやうに握手をした。それから直ぐに戸をあけて、セルムーズ侯爵を呼びこんだ。

若い侯爵は、デスコルバル氏に出會して、ちよつと面喰つたけれど、例の社交慣れた態度で丁寧に挨拶をしてから、主人に向つて快活に談話をはじめた。

「お預りした品物は、すつかり馬車に積んで送りだしました。もう此方へ着く時分です。」

眞先にそんなことをいつた。

男爵は折角の話を來客に中斷されて、取りつく島もなくなつた。隣室へ行つてマリーを說かうとすると、ジャンとシャンルイノオが見張りをしてゐるといふ形勢なので、詮方なく默つてすごゝと暇をつげた。

男爵は快々として歸路をたどりながら、寂しい森のあたりへさしかゝると、後から呼び止める者があつた。それは先刻ラシヌールの草庵で出會つたセルムーズ侯爵だつた。侯爵はそこ〳〵に話をきりあげて、男爵の後を追かけて來たのであつた。

「お呼び止めして失禮ですが、一寸物をいはせて下さい。」と彼はいつた。「僕は貴方の黨派——那翁黨の者ではないが、さればといつて、王黨に恩怨ある者でもありません。それゆゑ公平な立場から御忠告するんですが、貴方はこの場合、早く外國へお立退きになつたらいゝでせう。幸ひこゝは國境が間近ですから、馬の好いのに乘つて大急ぎでお出でになれば、直きに國境外へ出られませう——何しろ形勢が危險ですからね——御注意しておきます。」

云ひすて、彼はセルムーズ村の方角へ行つてしまつた。男爵は呆氣にとられた。

「いつたい何であんなことを云つたんだらう。俺を逐ひ出さうとする下心なんだな——」

もうマーシャルの姿は見えなかつた。

そのとき森の彼方に蠢く二人の人影——一人は若い令孃、もう一人は老婦人だが、何者かの動靜を探らうとするらしく、茂つた木蔭に隱れてゐるのであつた。

それは、その附近の王黨の貴族クルトルニュー侯爵家の一人娘のブランシュ孃が、食客の伯母さんを伴れての忍び姿と知れた。それにしても兩女は何のためにこんな處を忍び歩いてゐるのか？

近頃セルムーズ公爵が陸軍中將に昇進して、モンテニャック師團長に補せられると同時に、クルトルニュー侯爵は憲兵司令官を拜命して以來、この兩家は殊の外親密になつて、公爵家の子息マーシャルとこのブランシュ孃が、めでたく婚約を取結んだのである。が、彼女は戀人のマーシャルが、日毎にラシヌールの草庵に通ひつめてゐるのに不審を抱き、ひよつとして大切の戀人をあの美人のマリーに取られてはならぬといふ心配から、樣子を探りに來たのに相違なかつた。

四、修羅の一夜

春なほ淺き三月四日の黃昏時、丘の上なるラシヌールの草庵前で、嚴重に武裝した一隊の荒くれ男が、どつとばかりに喊聲をあげると、先登に立つたラシヌールは、

「諸君、俺は一歩も後へは退かぬ決心ぢや。それ、この通り！」

いふより早く、一束の藁に火をつけて、草庵の茅葺屋根に投げた。と、折からの風に煽られて屋根はめら〳〵と燃え上り、五分と經たぬうちに、草庵は烈々たる火焰につゝまれてしまつた。

すると、遙か彼方のモンテニャック城砦の窓々から、一時にぱつと明るい燈が見えた。それと前後して、溪谷に沿うた丘のところ〴〵に篝り火が燃えあがつた。それらは、沿道の同志がラシヌールに

答へる相圖の火であつたのだ。

ラシヌールは心地よげにその篝火の數をよみ終つて、馬の鐙へ片足をかけたとたんに、二人の人がばたゝと駈けよつた。と思ふと、その一人が早くも轡を捉へた。

「やあ、ミドン師にデスコルバル男爵。何をなさるッ？」

「我々はこの狂氣じみた首途を止めに來たんだ。」と男爵が叫んだ。「貴方は、憎惡のために氣でも狂つたか？」

「いや貴方がたは何も御存知あるまい。」

「知らぬことがあるものか。モンテニャックを占領する計畫に相違ないと睨んだ。貴方は彼町の兵營は、セルムーズ公爵といふ猛將が指揮してゐることを知らんのか。なほそれにも增して恐ろしい危險がある——外でもないが、かういふ場合にはきつと裏切る者が出ますぞ。」

「誰が裏切るといふんですか。」

「誰彼といはんが、途方もない夢を描く者は、現實にぶつつかると必ず怯むものだ。」

「お止しなさい、ラシヌール。」と牧師も叫んだ。「貴方には理性の聲も聞えないんだな。こんな薄弱な計畫の下に、何百人といふ貴重な人命を損つてはならん。これは必ず失敗する。」

二人の親友が命がけの切諫である。これには遉ラシヌールも少したじろきかけた。と、その瞬間、百姓姿に男裝した一人が、つと列伍をぬけて來て、切諫者の前に立つた。

「おゝ、あなたはマリーさんではないか！」

「さうです。わたしも愛する人達と生死を共にします。御忠告は有難いんですが、今となつてはお聽きするわけにまゐりません。あの篝火を御覽なさい。あれは、クロワダルシイの四つ辻へ方々から人數を繰りだすといふ相圖でございます。父が行かないと五千人の人が指揮者を失ふことになります。もう一刻もぐづ〳〵してゐる時ぢやありません。どうぞ父を止めないで下さい。一分間も猶豫すれば人の生命にかゝります——さア皆さん、進んで下さいッ！」

その間にラシヌールは奮然馬に跨つて、

「進め！」と號令した。

人々はどつと喊聲をあげながら、眞直に丘を降りて行つた。

男爵は、その隊伍の中にちらと子息の姿を認めると、夢中になつて呼び止めた。

「モリス、待て！　お前は行くことはならんぞ！」

「行かなければなりません。僕は副將といふ役目をもつてゐます。」

「母親を忘れたか、モリス？」

「お母さまだつて、卑怯者を喜びはしません。僕は勇敢に死んで、泣いて貰ひます——さやうなら、お父さま。」

デスコルバル氏は、矢庭に子息を引きよせて、犇とばかりに抱擁した。これが最後の訣別だとお

もつた。

「そんなら行け。さやうなら。」

やがてモリスは、すた〳〵隊の後を追ひかけた。彼等の雄叫びの聲が次第に遠ざかつて行つた。

男爵は石のやうに突立つてぢつと見送つてゐたが、ふと夢から醒めたやうに牧師のはうへ振りかへつて、

「たつた一つ希望があります。これから邸へ引かへして、馬車で、集合所だといつたクロワダルシイへ出かけませう。飽くまでも彼等を說き伏せて、解散させなければならん。」

二人はデスコルバル莊に向つて駈けだした。

それから約二時經つた後だ。その夜早くも、クロワダルシイに集合した人數は約二千名——首領の率ゐる一隊がなか〳〵到着しないので、それを待つべきか、それとも直ちに攻擊するかの二派に意見が分れて、軍議の最中に、はげしい馬蹄と車輪の音がして、一臺の馬車が驅けこんで來た。と思ふと、デスコルバル男爵とミドン牧師がそこへ降り立つた。ところが二人は無論、暴動を止める目的で驅けつけたのだが、結果からいへば、それを促進したに過ぎなかつた。

「今となつては後へ退けない。」とその隊の副將らしい男が興奮していつた。「進むも退くも死ぬる生命は同じです。奮鬪して勝つより外に方法はありません——おい、皆んな、進まうではないか——先んじて遮に無に勝つんだ——進擊々々。」

むづ〳〵してゐた百姓隊は、その下知につれてどつとばかりに押し出した。物の十五分と經たぬうちに、彼等は城砦の門前まで押して行つた。城砦内には多數の内通者があつて、開門をする手筈になつてゐた。門は果して左右に開かれた——これが官軍の幹部に裏を掻かれた結果であつたとは、後に知られたのだが——

それとも知らぬ百姓隊は、血を流さずに町を占領するとは大成功とばかり、まるで有頂天になつて、銃に裝彈もしずに、雪崩をうつて城内へ踏みこんだ。

ところが、先登が外壁を通過して、恰度撥ね橋へさしかゝつた時だ。この城砦の總指揮官セルムーズ中將は、暴徒が完全に袋の中へ入つたのを見すまして、小高いところから相圖の短銃を一發ぶつ放した。と、つゞいて轟然たる銃聲。それはかねて城内に伏せてあつた官兵四百の銃口から一齊射擊を浴せたのだ。しかし將軍よりも兵士の方が遙かに人道的であつたから、彼等の殆んど總てが、上空に向つて發砲したのであつた。

それでも、百姓隊の四五人がぱた〳〵と打倒れた。皆瀕死の重傷だ。セルムーズ公爵は、射擊の效果などを檢べる餘裕もなく、馬を一隊の先登に立てゝ、直ちに進擊に移つた。

この猛襲に遭つて、訓練のない百姓兵は早くも浮足を立てた。

「逃げるな！　進め〳〵！」

指揮者は聲を限りに呶鳴つた。一隊の中には那翁の麾下に屬して百戰を經た古强者も混つてゐ

て、頻りに絶叫して士氣を鼓舞するけれど、一旦浮足立てた百姓兵は、折からの闇に恐怖も手傳つて、只もう周章狼狽するばかり。何ともいへない混亂狀態に陷ちてしまつた。

形勢危殆の情報を途中で受取つたラシヌールが、汗馬に鞭をあげつゝ、單騎クロワダルシイへ駈けつけたのは、恰度城砦で一齊射擊が行はれたのと同時だつた。

そのうちに味方の者がどん〳〵遁げて來る樣子なので、彼は馬を立て直して、それ等の敗走者を喰止めにかゝつた。

「遁げるな〳〵。後から二千人の援兵がやつて來るぞ！」

と、しきりに呶鳴つた。しかしこの場合、援兵が一萬來るといはうが、二萬といはうが、結果は同じことだ。彼等はそんな言葉は、てんで耳に入れはしないのだ。

ラシヌールの周圍には、いつの間にか、百人ほどの最も勇敢な者達が集まつて來た。ミドン牧師も心配さうな顏をしてその中に混つてゐた。牧師は混亂中にデスコルバル男爵と別れ〳〵になつたが男爵はどうなつたゞらう。生死のほども分らない。牧師はその安否が氣がかりなので、そこを立ち去らうとしなかつた。

そのうちに、モリスやシャンルイノオの率ゐた一隊が到着した。一隊といつても僅かに十五人。セルムーズを出發したときは五百人にも餘つた同勢が、途中から散り〴〵に落伍して、今はそんなに減つてしまつたのである。

ラシヌールは人々と共に、このまゝ解散するか、それとも殘兵を纏めて最後まで戰ふかを協議したが、主立つ者の意見が二つに分れて容易に決しない。するとシャンルイノオは奮然前へ出て、

「俺は戰ふためにやつて來たんだ。」と叫んだ。「華々しく鬪つて死ぬる覺悟だ！」

「さうだ〳〵、やつつけろ！」

議論は消えた。彼等は早く要害の足場につかうとして、一齊に動きだした。が、シャンルイノオはその方へは行かずに、モリスを少し離れたところへ呼びこんで、

「モリスさん、貴方はこゝを落ちて下さい。」

「何をいふ？　僕だつて戰ふためにやつて來たんぢやないか。」

「それが可けない。マリーさんを連れて、一刻も早く落ち延びて下さい。」

「厭だ。僕はこゝで死ぬ。」

「貴方はこゝで死ぬる權利がない。貴方の生命はあの女のものです。あの女は心も體も貴方に捧げてしまつたんだから。」

「えつ、酷いことをいふね。」

「隱したつて駄目です。あゝいふことは誰だつて支へきれない誘惑なんです。それは貴方やあの女ばかりの罪でない。ラシヌールさんが惡いのです。實をいふと、私は非常に憤慨して、貴方を殺さうか自殺しようかと迷つたことがあります。鐵砲で貴方の後から狙ひをつけたこともありました。けれど

あの女が後でどんなに歎くだらうと思つて、思ひ止まりました。みんな神様の思召です――ところがラシヌールさんも私も、今夜こゝで死なねばなりません。さうするとマリーさんを見護る者は、貴方の外にありません――さア敵が來ない間に、早く遁げて下さい――」

いつてゐるうちに、激しい銃聲が起つて、話が妨げられた。官兵が急に追擊して來たのである。

「マリイさん！　マリイさん！」

廣場の中央に、健氣にも父親の馬の轡をとつてゐたマリーをば、シャンルイノオが遮二無二抱きあげて、デスコルバル男爵の乘りすてた馬車へつれ込んだ。そのとき、廣場へ雪崩こんだ官兵が、人の蠢く氣配を見て、忽ち肉薄して來た。

「こゝは俺が引受けた。早く〳〵。」

シャンルイノオが猛然と銃を振り廻はして彼等に立ち向つた。その隙にモリスとミドン牧師が馬車に飛び乘り、モリスが手綱をとるが早いか、全速力で驅けだした。

やがてセルムーズ公爵の本隊が、太鼓を亂打しながら殺到した。無數の銃劍が闇にきらめく林のごとく動いて來るのを見た。その間から「退却！　退却！」と、ラシヌールの、血に叫ぶやうな聲が聞かれた。

劍戟と叫喚が漸く收まつたときは、夜半の一時を過ぎてゐた。官兵が前進した後の廣場は荒涼として、ところ〴〵に重傷者が蠢き呻いてゐるばかりであつた。

首魁ラシヌールは負傷して馬の下敷になつてゐたゝめに官兵の眼を遁れ、再擧を計るべく國境方面へ落ちのびた。勇士シャンルイノオは思ふ存分暴れ廻つた末に、手傷を負うて、つひに捕虜となつた。なほ悲むべきは、デスコルバル男爵が、亂軍の間に暴徒の一人と認められて、捕縛されたことであつた。

五、この背信

騷擾の一夜が明けると、モンテニャックからセルムーズにかけて嚴重な搜索が行はれた結果、暴徒の主立つた者が二百人も捕縛されて、片つ端から城砦に押しこめられた。

首魁セルムーズの首には、二萬法の賞金が懸けられた。

さてこゝに一つの插話がある。やはり騷擾の夜の出來事で、かのセルムーズ隊がクロワダルシイに向つて行軍中に起つたことだが、モリスとマリーは隊の先登に立ち、ジャンとシャンルイノオは後尾について、脚の鈍い百姓兵を勵ましながらやつて行くと、後方から馬を飛ばして來た者があつた。

「怪しい奴だ、檢べよう。」

直ちにその馬を引止めたが、騎手はセルムーズ侯爵のマーシャルだつた。彼はいよ〳〵暴動が起つたと聞いて、本邸から父公爵の許へ駈けつける途中で捕まつたのである。

彼が毎日草庵へ通ひつめてゐる間は、ラシヌールはその目的が娘にあるのを知りつゝも、モンテニ

ヤック師團長の子息で、憲兵司令官の婿がねとなるべき彼を利用して、官邊の形勢を探知し、或は若干金の融通をうけたりして、程よくあしらつてゐたが、かうなると、短氣一徹のジャンは、決して彼を許さなかつた。

「サア捕まへたぞ、惡黨貴族！　貴樣達は僕の父親の財產を捲きあげて、自暴自棄にならせた上に、妹を墮落させようとしたんだ。さア復讐だ。決鬪するから降りろ！　遁げたら射放すぞ！」

と矢庭に短銃を突きつけたので、侯爵は仕方なく馬を降りて、

「どうせ殺される生命なら、潔よく決鬪しよう。ところでジャンが勝てば問題はないんだが、僕が勝つた場合は、どうする？」

「勝負は時の運だ。貴方が勝つたときは、夜半の二時まではモンテニャックへ行かないといふ約束で、自由に歸つてよろしい。」

シャンルイノオが保證すると、

「そんなら決鬪に應じよう。武器を貸せ。」

そこでシャンルイノオは自分の劍を侯爵に貸した。ジャンも劍を拔いて、街道の中央で斬合ひをはじめた。ジャンの手の内は見事なものであつた。彼が憤怒をこめた鋭鋒には、侯爵もたぢ〳〵となつて、防ぎかねて見えたが、無言ではげしく切結んでゐるうちに、どうした機みか、ジャンが氣合と共に突込んで來た敵手の切尖を拂はうとした瞬間にぱつたりと倒れた。相當の深傷ではあつたが、生命

に別條はなかつた。そこに居合せた元ラシヌール家の小作人のボアニョーといふ男が、負傷したジャンをひそかに自分の家へ擔ぎこんだ。

マーシャルも横つ腹に可成りの傷をうけたが、氣丈にもそのまゝ馬に乘つてセルムーズの方へ引返した。翌くる日この傷口を自分で祕密に洗滌つてゐるところを、偶々父公爵に發見された。公爵は子息が、若しや暴徒に加擔しての傷ではないかと、顏色を變へて詰問したが、決鬪と聞いてほつと安心した。しかしマーシャルがその決鬪の相手の名を堅く祕して、父親にも告げなかつたのは、遺がに心ある仕方であつた。

もう一つ特記すべきは、この一揆が案外脆く打負かされたのは、かねてセルムーズ公爵が間諜に使つてゐたシュバン爺が、その晩逸早く師團長の官邸へ駈けつけて、公爵に情報をつげたゝめに、官邊の警備が急速に行きとゞき、兵營の内部で内通を約束した者も、手が出せなかつたといふのが、大きな原因となつたのであつた。

暴徒の斷罪については、間もなく軍法會議が開かれた。審判長モンテニャック師團長セルムーズ公爵、審判副長は憲兵司令官クルトルニュー侯爵といふ顏振れで、辯護士は形式的に附けられたけれど、その辯論は一向に聽かれず、革命裁判にもまさる峻烈な訊問のもとに、首謀者と認められた二十一名は、豫定どほり死刑を云ひ渡されたのであつた。

このとき首魁ラシヌールはいまだ縛に就かず、シャンルイノオの死刑は已むを得ないとするも、デ

スコルバル男爵までも死刑者の中に含まれたとは、實に亂暴極る審き方であつた。
自分達の功勞苦心を誇張するために、かうして事件を出來るだけ大袈裟なものにしたセルムーズ公爵とクルトルニュー侯爵は、この暴徒鎭撫の功により、手盛りで、王室からおもき恩賞にあづかつたのである。
首魁の娘マリイと、男爵の子息モリスと、ミドン牧師は、幸ひに罪を免れた。さて彼等はなにしも、無實の罪で死刑に行はれようとしてゐるデスコルバル男爵を救ひ出さねばならなかつた。で、彼等は額をあつめて謀議をこらした末に、マリーが或る日、ひそかにモンテニャックの師團長官邸を訪づれた。
「閣下に直々密告いたしたいことがございます。」
玄關番に囁いたこの一語が利いて、すぐに奥へ通されたが、
「逆徒の娘が何で此邸へ來たのか？」と公爵は苦りきつて問ひかけた。
「實は密告がございます。それを貴方にお賣りしたいと思つて伺つたのでございます。」
公爵は驚き怪しむ表情でマリーの顏を見まもつてゐたが、何を思つたか、から〳〵と笑ひながら、長椅子にどつかと腰をおろして、
「それは面白い。買はう。」
「外でもありませんが、貴方は一味徒黨の廻狀をお讀みになりましたか。」

「讀んだとも。あの印刷した廻狀は、俺の衣囊に一ダースも入つてゐる。」
「あれは誰が書いたか御存知ですか。」
「デスコルバル男爵か、でなければ、お前の父親のラシヌールが書いたんだらう。」
「違ひます。此邸の若樣がお書きになつたのでございます。」
「コレ、何を申す！　愼みなさい！」
公爵は火を吐くやうな眼付をして、顏は憤怒で紫色に變つた。
「けれど證據がございます。わたしは或る貴婦人から賴まれてまゐりましたが、その女はマーシャル樣のお書きになつた草稿を所持してをります。それで——」
皆まで聞かぬうちに、公爵は戸口へ飛んで行つて、破鐘のやうな聲で子息を呼んだ。やがてマーシャルが其室へやつて來ると、
「お前が暴徒の廻狀を書いたといふが、一體どうしたのぢや？」
「その廻狀とやらを見せて下さい。」
「これぢや。」
公爵が衣囊から取りだした刷物の一枚を讀んでみると、
拜啓　かねての緣談首尾よく取り運び、いよ〳〵婚儀相結ぶことに決定したるにつき、我等は昨今その準備に熱中いたし居り候。式典の儀は、來る三月四日をもつて執行ひ申すべく

候ふ間、當日は是非々々御賁臨を給りたく、待上げ候。なほ友人諸君を多數御誘引下さらば幸甚に御座候。　敬具

「あゝこれです。僕はまんまと欺かれたのです。この草稿は安つぽい紙に僕の筆蹟で書いたもので、出來るだけ適當な辭句を使はうとして、二三ケ所消したり書き入れたりしたところがあります。」

「どうしてそんなものを書いたのぢや？」

「僕はシャンルイノオに欺されたのです。或る日ラシヌールの草庵へ遊びに行つたとき、あの男が伯父とかの家に婚禮があるので、その招待狀を書かされることになつたけれど、自分には巧く行かないから、一つ書いて下さいといふ賴みなので、僕は何の氣なしに書いてやつたんですが、これが暴徒の廻狀に使はれようとは、夢にも思ひませんでした。」

「馬鹿！」

公爵はぷり〳〵憤つて、室の中をぐる〳〵歩き廻つたが、やがてマリーの前に立ち止つて、

「娘さん、その草稿を見せてくれい。」

「今は持つてまゐりません。」

「そんなら何處にあるのか。」

「或る人の手許にございます。その人が或る條件の下に貴方へお渡しするでせう。」

「誰ぢや、その或る人といふのは？」

「それは申されませぬ。」

「俺がその條件を厭だといつたら、どうするんだ？」

「そのときは、或る確かな者を使者として、明日の早朝に巴里へ出發させます。そしてその使者は、巴里にゐる貴方の反對派の有力者に、若樣のお書きになつた草稿を渡す手筈になつてゐます。さア、さうならぬ前に草稿を買つて下さいますか。それともお嫌ですか。」

「惡黨！　賣女！　蝮蛇！」公爵は叫んだ。「實に怪しからん。俺は巴里に多數の敵がある。彼等はそんな草稿なら片腕とでも取替へたがつてゐる奴等ぢや。彼等はその草稿と共に、シャンルイノオが法廷に於てマーシャルが一味に加擔してゐたといつた虛僞の供述を盛んに利用するだらう。それに、マーシャルの體には生々しい創がある。その創をなぜ祕密に治療したかといふことが問題になる。これ、マーシャル、お前は惘れかへつたたわけ者だ。セルムーズ家を亡ぼす者はお前ぢや。」

「お父さまがそんなことを仰しやるから、草稿が高くなるぢやありませんか。」

マーシャルは父親に不平をいひながら、マリーの方へ向きなほつて、

「あの草稿と引きかへに何が欲しいつていふんですか。」

「デスコルバル男爵樣の生命と自由が欲しいのでございます。」

すると公爵は、落雷にでも打たれたやうに跳びあがつて、

「なぜ判決が下る前に來ないのか。一旦判決を下した以上は、俺の力にも及ばんのぢや。」

「しかし、臨機應變といふことも考へてみなければなりません。」とマーシャルがいつた。「それで刑の執行は何日なんですか。」

「明日だ。」

「そんなら、今夜中に何とかしなければなりませんね。今は七時だから、十時までに城砦へ行けば間に合ひます。それにしても、兵士か牢番の手を借りなければ巧く行きさうもないが——誰か氣のきいた者がゐないでせうか。」

そのときマリーはいゝ考へが浮んだ。

「わたしが恰度いゝ人を知つてゐます。伍長ですがね、あの人ならお役に立ちませう。」

それは、もと那翁麾下の勇士で、ひそかに那翁黨に好意をもち、かねてデスコルバル男爵の人格を崇敬してゐる或る伍長を指したのであつた。

「大急ぎでその男と相談しよう。」マーシャルは勇み立つた。「姓名は何といふんですか。」

「バボアつていひます。擲彈兵第一中隊にゐる筈でございます。」

そこで祕密に手筈がきめられた——その晩の眞夜中過ぎ、夜明けに間もない頃、デスコルバル男爵の囚はれてゐる城砦の塔が聳え立つ斷崖の遙か下の方に、八人の人が待ちかまへてゐた。それは男爵夫人と、モリスと、マリー、ミドン牧師、それに男爵の友人である四人の退役將校だつた。

彼等は今か〳〵と塔の窓から眼も離さずに見上げてゐたが、四時ごろになつて、やつと人影がその

高い窓を出ると、蝸牛が這ふやうな恰好でそろ〳〵と降りはじめた。それは云ふまでもなく、男爵であつた。それからしばらく往つてもう一つの人影が、極めて敏捷に降りて來た。それはバボア伍長だつた。

下から見てゐると、この二つの人影は、無事に塔の土臺卽ち斷崖の頂上のところへ降り立つた。それから鐵挺を巖の破れ目に突き立てながら、足場をさぐつてゐるらしかつたが、やがてその一人が突出した巖の方へ出て來て、斷崖を除々と辷りはじめた。それは無論男爵であつた。

下に待つてゐた人々は有頂天になつて喜んだ。夫人は兩腕をひろげて、早くも斷崖の眞下へ駈けて行つた。

と、そのとき、突然アッ！ といふ叫びと共に、男爵はもんどりうつて、五十呎の高さから眞倒樣に墜落した。麻繩が切れたのである。

その繩は自然に切れたゞらうか？ モリスはすぐにその切れ端をしらべると。「欺られたつ！」と叫んだ、たしかに刃物で斷ち切つたらしい形跡があつたからである。

六、決鬪狀

デスコルバル男爵はどうなつたゞらう。男爵ばかりでなく、その一族をはじめ、マリーや、ミドン牧師など、男爵と親密であり同情があると思はれた人々が十人ほど、かの逃亡を企てた曉方から行方

不明になつた。その逃亡の手助けをしたパボア伍長も、それつきり姿を晦ました。
セルムーズ公爵等は不安になつて來たので、改めて彼等に對して逮捕命令を發した。が、行方不明で一人も縛につかない。それから極力捜査をつゞけたけれど、些しも手がかりがなかつた。
一方に於て、死刑囚である男爵が逃げたといふことが、城砦内の大問題となつた。で、早速調査をはじめることになつたが、他手にまかせると藪蛇を出す虞があるので、セルムーズ公爵とクルトルニュー侯爵が主任となつて祕密に取調べることゝした。マーシャルもそれに參加した。彼等はそれ〴〵の意味において、妙に痛し痒しといふ氣持だつた。
まづ現場を臨檢したが、斷崖の下のところに夥しい血痕があつた。
「男爵はこゝから墜落したんでせう。大怪我をしたにちがひない。」
マーシャルがいふと、
「そんなことはない。怪我をしたのなら、それが知れずにゐないからね。」
とクルトルニュー侯爵が打消した。マーシャルには、その言葉が腑に落ちなかつた。
塔の下に殘つてゐた麻繩を見ると、あまりに短かつた。ひよつとすると長さを間違へたのであつただらうか。否、自分が牧師から受取つたときは、確かに十分の長があつたのに、どうしてこんなに短くなつたのか。これもマーシャルに取つては、疑問の種であつた。
次に審問を開いた。そして監房に關係ある士官や下士や、兵卒に至るまで、悉〳〵訊問したけれど、

彼等はさうした計畫のあることを些しも氣がつかなかつたし、逃走の現場を見た者もなかつた。
その中で一人の兵士が、多少手がかりになりさうなことを申し立てた。それはかうだ。
「昨晩、私は監房へ通ずる廊下に立ち番をしてゐますと、夜半の二時半頃になつて、一人の將校がやつて來ました。呼び咎めると、通行券を出して見せたので、そのまゝ通しました。その將校はデスコルバル男爵の監房の隣りの室に入つて、約五分間その室にをりました。それから歸つて行きました。」
「君はその將校の顏に見覺えがあるだらうな？」
マーシャルが訊ねると、
「わかりません。だぶ〳〵な外套を着て、鼻がかくれるほど襟を立てゝゐたので、顏は見えませんでした。」
その將校といふのは、一體何者だらう？　後でマーシャルがそのことを云ひだすと、クルトルニュー侯爵は慌てたやうな、厭な顏をして、
「この營内には暴徒に同情してゐる將校が大勢をるといふことを、貴方は知らんのか。その男も何か手助をするために行つたのぢやらう。」
しかしこの言葉にも、マーシャルは首をひねらぬわけに行かなかつた。
とにかく男爵が逃げたと聞いて、モンテニャックの市民は痛快を叫んだ。尤も彼等のさうした喜びも長くはつゞかなかつた。何故つて、その日が恰度死刑執行の當日だつたので、市民はその新に死ん

でゆく人人の靈を弔らはねばならなかつたからである。

シャンルイノオは、刑場へ引出されてからも怏々と悶え苦しんでゐるらしいので、附添の坊さんが問ひかけた。

「お前は何人かを探し求めてゐるんだね？」

「デスコルバル男爵です。」

「男爵は昨晩逃げたよ。」

「チエ、有難い、それで私は安心して死ねます。」

彼は最後の瞬間にも、顏色一つ變へず、むしろ誇らしい微笑をうかべながら、泰然として銃殺の刑に服した。

首魁ラシヌールは二萬法懸賞附のお尋ね者となつたが、間諜の天才シュバン爺が鵜の目鷹の目で搜し廻つた末、たうとう國境附近にその隱れ家を突き止めたので、官憲は急に騎兵隊を差向けて、わけもなく捕縛した。

勝てば官軍、敗くれば賊だ。自分一個の復讐ばかりでなく、或は那翁黨の全國的蜂起や、王黨の顚覆を夢みたかも知れないラシヌールも、今は市井の盜兒シュバン如きに、その血の償までも奪られたとは、何といふ皮肉な運命であらう。

彼も直ちに軍法會議に引出されたが、さすが一味の首領だけに、少しも惡びれた風がなく、同志の

姓名などは一言も洩らさなかつたけれど、自分の罪狀はすら〳〵と告白して、罪に服した。この首領だけは銃殺でなく、斷頭臺にかけられたが、彼は自から首をさしのべて、潔よく死んで行つた。

セルムーズ家のマーシャルは、初めクルトルニュー家のブランシュ孃に可成り興味をもつて、婚約までも取交はしたが、だん〳〵交際してゐるうちに、何だか女の方に打算と卑俗な野心が多分にあるので、鼻につきだした。虛榮心が強くて、氣まぐれで、恐ろしく我がまゝなのも嫌だつた。あの淑やかなマリーにくらべると雲泥のちがひだつた。

けれど、一度結んだ婚約を破るわけには行かない。しかもこの緣談は先方の熱心から急に進行した。やがて麗かな春の日に、セルムーズの敎會堂において、ミドン師の代りに入つた牧師の司會の下に、結婚式が執行はれた。

花嫁が戀を得た歡びに引きかへ、マーシャルは何か深い物思ひに沈んでゐるらしかつた。花嫁がいそいそと彼の腕に寄りすがつたとき、彼の目には、却つて戀しいマリーの面影がはつきり浮んで來るのであつた。

その日公爵邸では盛大な披露の宴を張つたが、贅をつくした晩餐が終へて、來賓たちがそろ〳〵客間の方へ引きあげる時分に、一人の召使がそつとマーシャルの傍へ來て、

「只今若いお百姓らしい人がまゐりました。貴方樣にお目にかゝりたいさうでございますが、姓名を申しませんので——」

「こんなめでたい日には、誰にでも會はう。」
玄關へ出てみると、蒼白い顏をして、眼をぎらつかせた一人の若者が突立つてゐた。
「ジャン・ラシヌールぢやないか！　何といふ大膽な奴！」
「貴方は僕を殺したつもりで安心したゞらうが。」とその若者がいつた。「私は無事に地獄から戻つて來ましたよ。」
それはジャンの變裝した姿であつたのだ。
「一體何の用で來たんだ？」
「モリス・デスコルバルに賴まれて、手紙をもつて來ました。」
マーシャルはその手紙を開封して、讀み了ると、
「さては、さうであつたか。情けないことをしたんだなア。」
と手紙を握つたまゝ、血相變へて奥へ駈けこんだ。
折から奥の客間では、父公爵はクルトルニュー侯爵と談話をしてゐたが、マーシャルはつか〳〵とそこへ入つて、いきなり侯爵にかの手紙をつきつけながら、
「これを讀んで御覽なさい。」
と叱鳴つた。侯爵は讀んでゆくうちに眞蒼になつて、手がぶる〳〵ふるへた。
「俺には、この意味がわからん。」

するとマーシャルはその手紙を引奪るやうにして、
「僕が讀みあげるからお聽きなさい！」
セルムーズ侯爵殿——前に、貴下の浮沈にも係る重要なる文書をば、我等より貴下に提供いたし候ふところ、貴下はその交換條件として、男子の名譽にかけて小生の父デスコルバル男爵の生命を救ふべきことを誓約せられ候。
しかるに、貴下はその約を實行するに當り、僞りて豫じめ截斷せる麻繩を與へ、父をしてかの斷崖より墜落せしめたるは、如何なる御處存に候ふ哉。
斯くのごとき行爲は破廉恥の甚しきものに有之候。よつて小生は一滴にても血の通ひをるかぎり、貴下のこの罪を懲らさずんば已まざる決心に候。ついては小生よりこゝに決鬪を申込み候ふ間、幸ひに御承諾ありたし。期日は明日、場所はレーシュ。なほ時刻、武器等は貴意に任せ申すべく候。もし貴下にして恥を知らざる卑劣漢ならば、立合の場所に憲兵を差向け、小生を捕縛せらるゝも可なり。左る手段は貴下の最も得意とするところに御座あるべく候。　敬具
モリス・デスコルバル
「しつ！　聲が高い。外聞がわるいではないか。」
と父親の公爵があわてゝたしなめた。しかしマーシャルは亢奮してゐるので、それには介意はず、侯爵の方へ問ひかけた。

「貴方はどうお考へですか。」
「俺には、さつぱりわからん。」
「貴方がおわかりにならんでも、僕はわかりました。あの晩、男爵の監房の隣りの室——僕が麻繩を
おいた室へ入つた將校は何者であつたか。その人が彼室で何をやつたか——貴方のために、僕は男が
廢つたのです。」
いふより早く、手紙を侯爵の顏へ叩きつけて、
「かうしてくれるつ——卑怯者！」
侯爵はひどく赤面して、がつくりと崩折れてしまつた。
マーシャルはそのまゝ邸を飛び出さうとすると、玄關まで追かけて來た花嫁ブランシュ嬢が、彼の
前に立ちふさがつて、
「貴郎、何處へいらつしやいますの？　あら、この使ひの人は？　貴郎はこの人の妹のところへい
らつしやるのね。きつと呼び出しが來たんでせう。」
「氣高い婦人の惡口をいつては可けない。うむ、僕はマリーを搜しに行くのだ。」
云ひすてゝ、彼はジャンと共に、すたゝ邸を出て行つた。
その夜はモンテニャックの官邸に泊つて、獨り物思ひに耽つたが、翌くる日は、モリスから申込ま
れた決鬪で、正午といふ時刻まで約束した當日。

彼は官邸の厩から馬を一頭引きださせ、それに乘つて立會の場所と指定されたレーシュへついたの
は、十一時半頃だつたが、間もなくモリスと、ジャンと、男爵の逃走と同時に姿を隱したバボア伍長
の三人——皆お尋ね者だが——打揃つて怖れ氣もなくやつて來た。
伍長は長い包みものを小腋にかゝへてゐた。その中にはジャンの才覺で手に入れた劍が二口入つて
ゐたのである。
「約束どほり決鬪はう。」
モリスはすぐに挑戰した。
「まア待つてくれ。君は昨日の話を聞かないんだね？」
「殘らず聞いた。けれど、君を不快に思つてゐることに變りはないんだ。今になつて立ち澁るとは卑
怯な奴だ。君は一體どれほど侮辱を與へたら決鬪に應ずるのか？」
マーシャルもさすがに赫然となつて、伍長が渡した劍を執るより早く、ぴたり中段に構へて、
「さア來い！　マリーが氣の毒と思へばこそ遠慮してゐたが、もう容赦はせんぞ！」
「何を小癪な！」
モリスは勢ひ込んだ攻勢の構へ。
互ひに爪先寄りにじり〳〵と進みよつた。はげしい氣合とゝもに切尖が相觸れて、將に火花を散ら
さうとした一刹那、伍長がその白刃の只中へ跳びこんで颯と雙方を引きわけた。

「軍隊が來た――逃げろ！」
十四五人の兵が彼方の森から駈け足でやつて來るのが見えた。
「僕がいつたとほり、卑怯者は兵隊をお伴につれて來たんだ。」
とモリスは劍を膝がしらでたゝき折つて、發矢とマーシャルの顏へ投げつけた。
「これでも喰へ！」
「惡黨！　裏切者！　卑怯者！」
三人は聲をそろへて罵りながら、反對の森の方へ姿を隱した。
マーシャルは呆氣にとられたが、やがてそこへ駈けこんで來た兵士等の前に立ち塞がつて、
「待て！　君等は僕が誰だか判つてゐるか？」
「はい、セルムーズ公爵閣下の御子息でせう。」分隊長がいつた。
「さうだ。君等に賴むが、あの三人を追跡しないでくれ。」
「それは可けません。我々は命令によつてやつて來たのです。」
「誰が命令したんだ？」
「昨晩憲兵司令官から命令があつたさうで、我々は大隊長から云ひ付かつたのです。さア退いて下さい。我々は命令を遵奉しなければなりません。」
分隊長が眞先に立つて遮二無二、三人のあとを追跡した。

マーシャルはがつかりした風で、坂道をおりると、また馬に騎つた。が、昨晩あんな騷をやつたセルムーズ莊へは歸る氣がしないので、再びモンテニャックの官邸へ行つて、自分の室に引籠つつた。
その晩彼は、一通の書面をしたゝめて新夫人の許へとゞけた。
ブランシュどの――我等の關係は終りを告げ申し候。和解は叶ひまじく候。御身は今後自由なれども、離籍はいたしかね候ふ間、わがセルムーズ家の家名を傷つくることのなきやう、くれ〴〵も御注意願はしく候。
離婚訴證等は世間態もよろしからざるにつき、單に別居いたし候ふ方然るべく候。御身においても御異存なきことゝ存じ候。
今後御身に對しては、年收三千萬法の貴族夫人に適はしき手當を余の手許より支出いたすべくその方法については、一切を余の公證人に託すべく候。
マーシャル・ド・セルムーズ
ブランシュはこの手紙を讀んで、いふばかりなく失望落膽した。良人から捨てられたのだ。どうしたつてラシヌールの娘マリーに見かへられたとしか思へないので、憤懣と嫉妬で胸は火のやうに燃えた。婚禮の晩から良人に捨てられるとは、何といふ屈辱、何といふ不幸であらう。男心の情なさよりも、戀敵と思はれるマリーをば、極端に呪つた。
「あの女を殺さずにおかうか！」

と彼女は心に叫んだ。そして一夜を泣き明かした彼女は、翌日父侯爵に伴れられて、生家の方へ歸つて行つた。

七、嫉妬の鬼

斷崖から墜落したデスコルバル男爵が、義俠心に富んだ百姓ポアニヨーの家へ運びこまれたときは呼吸が微かに通つてゐるといふだけで、殆んど死人同樣だつた。

何しろ附近の醫師を呼べない場合なので、幸ひ醫藥のことにも長けてゐるミドン牧師の執刀で、思ひきつて手術を行つた。

「私の弱い力では、とても覺束なかつたけれど、只もう神の御力に頼りすがりました。」

と牧師が後に告白したほど、それは困難な手術だつた。が、幸ひにその信仰が酬いられて、手術後の經過は良好であつた。

それから人々は、ポアニヨーの家の屋根部屋を病室として、男爵を看護しながら、ずつとそこに隱れてゐた。けれどお尋ね者が大勢同じ家にかたまつてゐるわけに行かぬので、モリスとマリーと伍長とは、ひそかに國境地方へ忍んで行つた。そして彼等は、方々を流浪しながら具さに辛酸を嘗めた。

そのうちに、マリーは旅で病氣に罹つたりして餘り兩親の戀しさに、獨りポアニヨーの家に歸つて來た。

マリーの兄のジャンは、父ラシヌールが斷罪されてから、まるで復讐鬼のやうになつて、常に野宿をして、一挺の銃を頼りに密獵で生命をつなぎながら、恨み重なる怨敵を附け狙つてゐた。彼はもう人の諫めなど耳にもかけず、その復讐慾はどこまで行つたら滿足するか、底が知れなかつた。

婿の仕打からセルムーズ公爵と仲違ひになつたクルトルニュー侯爵は、その後中央政府への首尾もわるく、つひに憲兵司令官の職を褫がれて以來、快々としてゐたが、或る日附近の森の中で何者にか狙撃されてから、急に頭が變になつて、狂ひ死に死んでしまつた。

また、その年も暮れなんとする十二月の或る日のこと、セルムーズ公爵は附近の山地へ狼狩りに行くといつて、早朝から馬に騎つて出かけたが、夕方になつて、乘馬が汗みどろになつて喘ぎながら騎手なしで戻つて來た。それから大騒ぎをやつて、捜索隊をくり出すと、恰度五日目に、或る絶壁の下に死んでゐる公爵が發見された。屍體はめちやくちやに負傷して血みどろになつてゐた。

ところが、それから間もなく、かの銃を肩に野山をうろついてゐたジャン・ラシヌールの姿が、ふつと見えなくなつた。

さてデスコルバル男爵は、その後の經過良好で、夫人と牧師の手厚い看護によつて、ますます快方に向つた。が、その反對にマリーが何となく體に衰へが見えだして、次第に痩せ細つて行つた。憂鬱な顏をしてぶらぶらしてゐる日が多かつた。

ミドン師が心配して度々そのことを訊ねるけれど、マリーは飽くまでも、病氣ではない、どこも苦

しいところがないと答へるばかりであつた。
彼女はいよ〳〵隱しきれない時機が來れば、何處ぞ他へ身を隱すより外はないと、ひそかに決心をしてゐたのである。
病人の看護から財政の切盛りまで引きうけてゐたミドン師は、或る日彼女にこんなことをいつた。
「マリーさん、あなたゞけはお尋ね者でないんだから、シャンルイノオが遺言であなたに遺したボルドリーの彼の家へ入つたらどうです。明日公證人の許へ行つて御覽なさい、たつた今ピエモンの方から歸つたといふ風でね。そして遺產讓渡の手續をすましてから、お寂しいだらうが、當分の間あの家に一人で住まつてゐて下さい。そのうちに時機を見て、男爵をもそこへお連れします。この屋根部屋は狹苦しいので、空氣の流通がわるくて、御病人にはよくないのです。」
翌くる日マリーはすぐに公證人の許を訪ねて、すべての手續きを濟ました上で、公然ボルドリーの家に入つた。
それはラシヌールが同志を操縱する方便のため、シャンルイノオに向つて娘を娶合せるといふ祕密の口約を與へて以來、シャンルイノオがマリーに對して絕えず清き愛をさゝげてゐた記念として、彼女に遺した財產であつた。
彼女は牧師の忠告をまもつて、たつた一人そこに住まつてゐたが、最近に日まぐるしくも多くの苦難を經て來た彼女にとつては、さうした寂しい生活でさへも、殆んど幸福そのもののやうに思はれた。

そのうちに近所の人々も、だんだん親しく訪づれて來るやうになつた。
が、日數の經つにつれて、體の方の不安が加はつて來た。それで彼女は、あゝか、かうかと獨りでいろ〳〵考へた末に、國境で病氣をしたときに世話をしてくれて、いつでも苦しい時は助けてやろといつた、那翁黨びいきの老醫のことをふと思ひだした。
「あの方に縋るより外はない。」
さう決心した彼女は、或る日詳しい書面をしたゝめて、近所の若者に賴んで、ビガノの方へとゞけてもらつた。
と、その晩マリーの家の戸口を忍びやかに叩いたのは、かの老ドクトルであつた。約を履んで彼女を救ひに來てくれたのである。
老ドクトルは、それから約二週間ボルドリーに滯在した後、或る日、夜の明け〳〵にそこを出發したが、そのとき彼は、廣い外套の下に、生れたばかりの男の兒を抱へてゐた。彼はその赤ん坊を自分の子として育てることを約束したのであつた。
このことがあつてから間もなく、デスコルバル男爵の回復を一日でも早めるために、いよ〳〵マリーの家へ病床を移さうといふ祕密な相談がきまつた。そこで、まづ必要な器具や藥函などを、ボアニヨーの倅に持たせて、目立たぬ方法で運びこんだ。さうしておいて、夜遲くなつてから男爵を連れて行かうといふ手筈であつた。

マリーは、この數ケ月にない嬉しい氣持だつた。朝からいそ〳〵と掃除をはじめ、ときゞ〳〵小歌を口吟んだりした。自分にも不思議なくらゐはしやいでゐた。

ところが、その日の夕方、庭のリラの茂みにかくれて、二つの人影が忍びこんだ。それは例のブランシュとメデア伯母さんであつた。

それとも知らぬマリーは、間もなく、戸口に鍵を插しつぱなしにして、前庭の小徑づたひに外へ出て行くと、ブランシュは、

「彼女がゐない間に、わたしは家内の樣子を覗いて來ますからね、あなたはどんなことがあつても、ここを動いては可けませんよ。いゝんですか。」

と伯母さんに云ひおいて、大膽にも家の内へ忍びこんだ。

成るほど、かねて探りを賴んだシュバン爺の報告に異はず、それは貧しい住居だつた。室は皆床板もない土間で、天井からもみがらだの枯草がぶら下り、家財といつては、不細工な卓子や椅子が二つ三つ並んでゐるだけで、他に何一つ裝飾らしいものがない。

臺所には美味さうなにほひがして、大鍋に何かぶつ〳〵煮えてゐた。

「いよ〳〵怪しい。」とブランシュはつぶやいた。「彼女が一人で食べるにしては多過ぎる。」

それから二階の室へゆくと、彼女はアッと驚いた。そこは階下の貧しさと較べものにならぬほど贅澤な裝飾を施した、氣持のいゝ室であつた。

「思つたとほりだ。わたしはすつかり欺されてゐたんだわ。マーシャルはあの女が可愛いので、こんな隱れ室をこしらへて、通つて來るんだわ。こゝであの二人が、どんなにわたしを嘲つたことか。」

室の樣子がいかにも人待ち顏である。煖爐には火があか〳〵と燃えて、その傍に大きな肱掛椅子がおかれ、椅子の前には綺麗に刺繍をほどこしたスリッパが揃へてある。

煖爐棚の上には、湯氣の立つてゐる肉汁の入つた小鉢が載つてゐた。それはマリーの飲みかけらしかつた。

ブランシュはこの發見について考へながら、あたりを見廻はしたが、恰度隣りの化粧部屋へ通ずる硝子戸の傍の卓子の上に、大きな函があつて、その中に小壜が幾つも並んでゐて、そのうちの青色の壜に「劇藥」といふ貼り札がしてあつた。

それを見ると、憎しみに燃えてゐた彼女の頭に、忽ち或る惡魔的な考へがひらめいた。彼女は何の躊躇もなく、その小壜の中味——硝子の粉とも白砂糖とも見られる粉末——の全部を小鉢の中へあけて、匙で一二分間靜かに攪きまはした。それほど落ちついてゐた。それからちよつぴり嘗めてみると、微かに苦味があつた。

「これでよし。」

階段を降りようとするとたん、階下から人が話しながら昇つて來る氣配に、はつとしたが、他に逃げ場がないので、慌てゝ奥の方の化粧部屋へ身を隱した。

昇つて來たのはマリーと一人の若者だつた。その若者は大きな包みを抱へてゐた。
「あら、こんなところにカンテラがあつたわ。」とマリーの聲。「たしかに階下の卓子においたと思つたのに。わたしは嬉しいので夢中なんだね。」
若者は包みをおろすと、ほつと一息して、
「荷物はこれでお終ひです。あとは體だけいらつしやればいゝんです。」
「向うを何時頃に御出ましになりますの？」
「十一時です。こゝへお着きになるのは十二時頃でせう。」
「待ち遠いわ。晩餐の支度も出來てゐますからね、歸つたら左樣申しあげて下さい。」
「かしこまりました。有難うございます。」
若者は歸つて行つた。ブランシュは、夜半に來るその客といふのは、マーシャルにちがひないと思つた。
マリーは若者のおいて行つた包みを解いて、着ものを整理して、衣裳棚に藏ひはじめたが、それを終へると漸とかの肉汁の小鉢に氣づいて、
「あら、何て馬鹿だらう。すつかり忘れてゐたよ。」
獨りごとをいひながら、小鉢を口へもつて行つて、一口飲むと厭な顏をして下においた。味がまづいといふよりも、冷たくなつて脂肪がぎら〳〵浮いてゐたからであつた。で、彼女はそれを匙でよく

き廻はしてから飲み終ると、次の仕事に取りかゝつた。
それからカンテラをもつて階下へ降りて、暫くしてから再び昇つて來たときは、物凄く蒼ざめて、眼玉が異樣にぎら〳〵してゐた。彼女は狂ほしくあたりを見廻はした。額に手をやると冷い汗でべとべとしてゐるので、思はずアッといふと、激しい吐瀉がはじまつた。
その度に彼女は身もだえして苦しんだ。絶えず微かな呻きをつゞけ、ときゞ〳〵全身を震はせて、激しく叫んだ。きれ〳〵な言葉で「水が欲しい。」とか「早く死にたい。」とかいふのが聞えた。苦痛がこみ上げてくると、神樣々々と呼びかけたり、夢中であらゆる友人の名前を呼んだりした。
そのうちに氣力が衰へて來た。一度ひどい痙攣があつて脣に血泡を吹いたと思ふと、ぐつたり仰のけになつて、もう動かなかつた。
ブランシュは、化粧部屋の戸の隙間からこの有樣を覗いてゐたが、
「あ、たうとう死んでしまつた。」
毒藥が人を殺すといふことは知つてゐたが、こんなに恐ろしい苦痛が伴ふものとは知らなんだ。自分でもぞつとして、一刻も早く逃げだしたくなつた。で、そつと戸を開けて室の方へ出て來たが、三足と歩かぬうちに、マリーが突然苦しさうに身を起して、兩手をひろげて、
「ブランシュさん——」と呼び止めた
昔の友達で今の敵であるブランシュの姿を見ると、マリーはすべてを察したらしかつた。

「あつ、あなたが毒を盛つたのね？」
「えゝ、復讐したんだわ。婚禮の晩に、あなたは兄さんをつかひによこして、マーシャルを呼びだしたではありませんか。あれつきりわたし達はわかれてしまひました。あの怨みをいま晴らしたんだわ。」
「わたしは解らない――」
「白ばつくれちや可けない。あなたはマーシャルのお妾のくせに。」
「わたしが、セルムーズ侯爵の？　飛んでもない――」
「そんなら、この室の贅澤な飾りは誰がしたの？」
「シャンルイノオ。」
「だけど、今晩こゝへ來る人は、シャンルイノオぢやないわね。このスリッパは誰のために溫めてゐるの？　この食卓は誰のためなの？　一體誰を待つてるんです？」
「それは云はれません。」
この場合いかに苦しくとも、デスコルバル男爵の名を出すことは出來ないのだ。
「云へない筈です。あなたは戀人を待つてゐるんでせう。マーシャルにちがひないんだわ。」
そのときマリーは、ふと何事かを決心したらしく、漢掻きながらも上衣を裂き破つて、奥の方に縫ひこんであつた一枚の紙片を取りだした。

「セルムーズ侯爵のお妾だなんて飛んでもないことです。わたしはモリス・デスコルバルの家内ですわ。さアこれがその證據――」
ブランシュは、その折りたゝんだ紙を引きのばして一ト目見ると、さつと顏色が變つた。耳が、がんがん鳴つて、冷汗があらゆる毛孔から流れ出るかと思つた。
結婚證明書――それはモリスとマリーが國境地方を流浪してゐる間に、或る小さな教會堂で結婚式を濟まして、そのときに登錄した證書なので、何といつても動かぬ證據だ。ブランシュは早まつて、無益に大罪を犯したのである。もう考へる餘地はない。
「大變々々、誰か來て下さい！」
彼女は夢中になつて叫んだ。
もはや十一時で、恰度人の寢靜まる時刻――まして寂しい孤つ家のことゝて、人が聞きつけるわけはなかつた。
それにも拘らず、只一人その聲を聞きつけた男があつて、やがて要愼ぶかく階段をのぼつて行つた。しかしマリーは無論のこと、ブランシュも夢中だつたので、その跫音は聞えなかつた。
「ブランシュさん、人を呼んだつて仕樣がありません。」マリーは纖細い聲でいつた。「それよりも、靜かにわたしを死なせて下さい。もう駄目。とても助からない――」
「マリーさん確かりして下さい――死んでは可けない――あゝ、わたしは何うしたらいゝでせう。」

と、マリーは、朦朧となつてゆく意識の下から、滿身の氣力をふりしぼるやうにして、
「ブランシュさん、聞いて下さい。非常な祕密で、誰も知らないことだけれど、わたしはモリスの子供を産み落しました。モリスは半年も前から行方が知れません。あの人が死んだとすれば、子供はどうなるでせう。ブランシュさん、わたしは今あなたの手にかゝつて死ぬるんですよ——そのかはり、あなたは、彼子の母親になつて育てゝやつて下さい。いゝんですか。そのことを誓つて下さい。」
「誓ひます——きつと育てゝあげます。」
ブランシュは涙に咽びながら誓ひを立てた。
「ありがたう。その言葉を忘れないでね——でないと、わたしは祟りますよ。わたしは死んでも、あなたの傍に見てゐますよ。いゝんですか。」
「決して、決して忘れません——それで、そのお子さんは？」
「わたしは馬鹿でした。——卑怯でした——世間の噂が恐ろしいので、他人に與れてやつたのです。可憫さうな坊や、許しておくれ——おゝ苦しい——ブランシュさん、賴んでよ——！」
まだ何か云ひつゞけてゐるらしかつたが、聲があまりに微かで聞取れなかつた。ブランシュはびつくりして、
「確かりして下さい——お子さんは何處にゐるの？　——聞かして下さい、たつた一言——マリーさん——」

肩は動いたが、それは斷末魔の苦痛のためであつた。次の瞬間には、もう全く絆切れてゐた。
ブランシュは氣拔けがしたやうに、茫然と立ちすくんだ。
と、先刻階段を忍び昇つた男が、つと室内へ踏みこんで來た。
「おゝ、お前はシュバン！」
「嬢さん、いゝ鹽梅でございましたね。だがぐづ〳〵してゐちや大變だ。早く逃げませう。」
シュバン爺は、子供でも抱くやうに、輕々と彼女を小脇に抱へ、マリーの屍體を跳び越えて、階段を降りるが早いか、屋外へ飛びだした。
戸口の前で彼女をおろすと、そこにはメデア伯母さんがはら〳〵して待つてゐた。
「私が近道を敎へてあげるから、早く〳〵。」
シュバンが先きに立つて急き立てながら、森の方へ眞直に駈けだした。
「あのマリーは天使のやうな女だと思つてゐたら、隱し子を産んだつてね——だから若い娘は當てになりませんな。」爺はしゃいだ口調でいつた。「それはいゝが、子供を何處へやつたんでせう？」
「わたしはその子を探し出さなければならない。」
「そいつは骨が折れますぜ。」
そのとき突然にから〳〵と嘲ふ聲がしたので、爺はぱつと跳び退いたが、もう遲かつた。木蔭から電光のごとく閃めいた短劍で、つゞけざまに四度も突き刺され、深傷にたまらず、ぱつたりとその場

に倒れた。
「野郎思ひ知つたか。これで大願成就だ。」
「うむ、バルスタンだ——旅舍の亭主だ——」
と爺は苦しい呼吸の下から呻いた。
刺した男は後をも見ずに、森の中へ姿を消した。彼は國境の山地に小やかな旅舍を營つてゐるバルスタンといふ惡黨で、前に暴徒の首魁ラシヌールの首をシュバン爺と爭うて、大喧嘩をやつて、シュバンからさんざんに侮辱された上に、懸賞金を攫はれたが、今その怨みを晴らしたのであつた。
「早く歸りませう。シュバンはもう死んでしまつたのよ。」
メデア伯母さんは、茫然してゐるブランシュの手を引いて、どんどん莊邸の方へ駈けだした。
しかしシュバンはまつたく死んだのではなかつた。やがて彼は起きあがつて、よろめく足を踏みしめながら、やつと自分の小屋へたどりついて、いまのさき夜仕事から歸つたばかりの長男にむかつて、
「倅や、た、大變なことになつたぞ——クルトルニュー家のブランシュ孃さんが、ラシヌールの娘をたつた今毒殺した——お前が馬鹿でなければ、この一件で金儲けが出來る——俺はそれを聞かせたいばつかりに歸つて來たんだ——おゝ苦しい、もう駄目だ——」
爺はそれだけいつて、そこへ倒れたなり息が絶えてしまつた。

八、金の無心

このマリーの變死については、長い審問の後に、決定書が發表された。
毒殺と認む。前科數犯を有するシュバンなる者が、マリー・ラシヌールの不在を幸ひに彼女の住宅に侵入し、食物中に毒藥を混入して殺害せるものなり。
右毒殺者シュバンは、當夜犯行後バルスタンなる者の手に殺害せられたり。而してその加害者バルスタンは、今なほ所在不明なり。
この決定書が發表されて間もなく、長い間別居してゐたセルムーズ侯爵夫妻が、目出度く和解をしたといふことが傳へられた。
その時分、マーシャルは父公爵に代つて、その地方の政務を取捌いてゐたが、彼は老公の取つた亂暴な政策を改め、人心を緩和しようとして、しきりに骨を折つた。そのお蔭でデスコルバル男爵も久方ぶりで公然本邸へ還ることを許されたが、間もなく上告の結果無罪の判決を得て、まつたく青天白日の身となつた。
男泣きに泣いて愛妻マリーの柩を送つたモリス・デスコルバルは、今は二人の間に生れた子供の行方を探し出すことに唯一の希望をかけて、人知れず心膽を碎いた。
ミドン牧師も、セルムーズの教會堂に復歸してからは、專らモリスを援けてこの子供捜しに奔走し

てくれた。二三腹心の者にも旨をふくめて、附近のあらゆる家庭について隈なく探したけれど、少しも手がかりがなかつた。さうしてゐるうちに、時は空しく過ぎて行つた。

しかし、あらゆる創をば徐ろに癒してくれるものは「時」の力である。あの美くしいオアゼル河の溪谷は、今は全く常の靜けさに立ちかへつて、曾てあゝした血腥さい暴風が吹き荒んだことなど想像もつかぬくらゐであつた。

その頃、マーシャル夫妻は永住の目的で、突然巴里へ引移つた。

マーシャルは老公の死後、跡目相續により改めて公爵となり、久しく他手にわたつてゐた巴里のセルムーズ邸を買ひ戻して、修繕をはじめたが、何しろ大邸宅のことゝて、その修繕に半年以上もかゝるといふので、その間は旅館生活で我慢をしなければならなかつた。

ブランシュは、巴里に着いてからは、大都會の賑はひや、變つた旅館の生活に氣が紛れて、心の底に祕めた例の恐怖も、しだいに薄らいで行くやうであつた。

ところが或る日のこと、彼女は公爵の留守の間に、室の長椅子にゆつたりと腰をかけて、メデア伯母さんに何か新刊本を讀ませてゐるところへ、旅館の女中が客を取次いで來た。

「奥さまに、お客さまでございます。」

「誰方？」

「シュバンと仰しやいます。」

シュバンといふ姓は、爆彈が破裂したほどの悚動を彼女等に與へた。

ブランシュは、着てゐた白カシメアの服のやうに眞蒼になつて、跳びあがつた。メデア伯母さんも、アッといふなり、本を手から取り落した。

間もなく案内されて來たのは、見すぼらしい百姓姿をしたシュバンの長男だつた。彼は室内の立派さに魂消たやうに、きよとんとそこに突立つてゐた。

「何の用なの？」

問ひかけられてはつと我れにかへつたシュバンは、廻りくどい口調で、故郷には敵が多いので旅に出なければならなくなつた事情や、父親の死後は貧乏で困難してゐることなどを、じゆん〳〵と語りだした。

「もう澤山。どうしてわたしにそんなことを云つて來たの？　もう二度と來ないといふ約束で、この度だけ少し都合してあげませう。」

「私はお惠みをいたゞきに來たんぢやありません。實は大手を振つて頂戴出來る物がございますので——」

「お前さんに借りはない筈だがね。」

「私だつてお貸した覺えはありませんがね、私の爺は、誰の御用を勤めて死んだんでしたかなア？爺が死ぬる間際の遺言には、『たつた今、ボルドリーで、ブランシュさまがマリーを毒害したんだ

が、俺がゐなければあの方は危いところであつた。俺はどうせ助からぬ生命だから、罪を被るつもりだ。お前はこの秘密さへ握つてゐれば、一生涯喰ひつぱぐれがない。』つてね。こんな風に申しました。はい。」

ブランシュは努めて平氣な顏をしてゐた。一度この男に降參すると、永久に頭があがらなくなるのを恐れたからである。

「つまり、わたしがあの時の下手人だから、お前さんの要求に應じなければ、告發をするつて云ふの？」

シュパンは默つて肯づいてみせた。

「そんならもう用がないから、お歸り！」

大膽にも高飛車をきめると、シュパンは却つてもぢ〳〵して、どうしようかと考へてゐるらしかつたが、そのとき窓際に立つてゐたメデア伯母さんが慌てゝ、

「ブランシュさん、大變。」と聲をかけた。「旦那さまがお歸りよ。」

失敗つた。良人がこゝへ入つて來て、シュパンの來意を嗅ぎつけたら、忽ち秘密が曝露る。さうすると取りかへしがつかないことになる。

そこで咄嗟に、彼女は自分の財布をシュパンの手に握らせて、奥の戸口から裏階段の方へ連れ出しながら、

「今日はこれだけ——公爵には秘密にね——」

彼女がシュパンを送りだしてから室へ戻つたのと、公爵が歸つて來たのと、殆んど同時だつた。實に間一髪で破滅を免れたのであつた。

しかしそれで味を占めたシュパンは、公爵夫妻が木邸へ引移つてからも、ときゞ〳〵秘密に夫人を訪ねて來ては金をせびつた。おまけに彼はだらしのない浪費者で、幾ら與れても傍に水を注ぎこむやうなものであつた。友達といへば碌でもない破戸漢ばかりなので、ますゝ〳〵墮落し、零落れて、乞食のやうな服裝をしてゐることが多かつたが、何處で馴合つたのか、變な女と夫婦になつた。その婚禮の費用も、後でボリットといふ子供が生れたときの經費も、すべてブランシュの手許から出たことは勿論である。

公爵が外交官になつた當座、ブランシュも良人と一しよに倫敦にも維也納にも行つて、數年間はそれ等の外國に滯在したが、その間にも、絶えずシュパンから金の無心狀が舞ひこんだ。

外交官として聲名を馳せたセルムーズ公爵は、任期を終へて巴里に歸ると、かねての志望どほり、いよ〳〵政治界に乘りだしたが、何しろ門地と、才能と、財力の三拍子を兼ね備へてゐるので、その地位はずん〳〵向上して行つた。

頭腦明晰、才氣煥發で、よくその黨派を操縱し、政界を縱横自在に馳驅した。けれど、それほど得意な時でさへも、家庭においては少しも樂しまなかつた。死んだマリーの面影が、一刻も彼の心を去

らなかつたのである。

「愛し愛されることが人生のすべてだ。餘事は空の空なる哉だ！」

と彼は心に叫んでゐた。そのくせ夫妻の間には氷の障壁が横はり、絶えずそれが厚くなつてゆくのであつた。

夫人ブランシュは、自分の住ふ棟がきまつてゐて、夫人附きの大勢の召使にかしづかれ、夫人專用の馬車を備へ、他目には華やかに見えながら、極めて寂しい生活を送るべく餘儀なくされた。そして彼女の魂ひは絶えず祕密の惱みに虐まれてゐた。

シュバンの金の無心は相變らずつゞいたが、或るとき暫くそれが杜絶えたので、不思議に思つてゐると、六週間目に新聞記事でその謎が解けた。それによれば、シュバンは或る晩泥醉して弟と大喧嘩をやつて、つひに弟を殴り殺したゝめ、二十年の懲役を云ひ渡され、ブレストの監獄へ送られたのであつた。

その後ブレストに監獄騒動が勃發したとき、シュバンは眞先に銃殺されてしまつた。

それは正月のことであつたが、二月には、メデア伯母さんがふと風邪から急性肺炎になつて、たつた三日患らつたばかりで死んでしまつた。それでブランシュは唯一の相談相手を失つた。

故郷では、デスコルバル男爵夫妻も、バボア伍長も先年この世を去つた。三人とも土地の人々から非常に惜まれて、鄭重に葬らはれたといふことであつた。

親の跡目を相續して男爵となつたモリス・デスコルバルは、巴里へ出て來て久しく法律を研究してゐたが、そのときはもう判事の職に就いてゐた。

かう數へ來れば、ブランシュにとつて恐ろしいのは、只一人ジャン・ラシヌールだけであつた。ジャンは居所も、生死のほども判明しないけれど、彼は何處かで虎視耽々と附け狙つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

さてそのジャンがどうなつたかといふと、彼は妹のマリーが殺されたとき、ひよつこり姿を現はして彼女の財産を全部賣拂つたが、その金をどうしたのか、それから間もなく、旅役者の一座に一ケ月四十五法の給料で雇はれたときは、無一文になつてゐた。

それから最も悲慘な放浪生活がはじまつた。彼はあらゆる地方を渡り歩き、一つの座から他の座へと轉々した。その間にあぶれて食ふや食はずの目に遭つたことが數へきれないくらゐだ。一家の沒落とその身の辛苦を思へば思ふほど、敵に對する怨みは焔々と燃えた。かうして十六年間も下積みの生活に隱忍してゐたが、恰度十六年目に露西亞の或る劇團に雇はれたのが芽をふくもとで、それから六年間の奮鬪でどうやら一本立ちのマネジャーとなつて、トン〳〵拍子に十萬法の金を儲けた。

纏まつた金が出來ると、矢も楯もたまらなくなつて、早速佛蘭西へ歸つて、故郷セルムーズを訪づれた。何しろ二十何年といふ歳月が過ぎてゐるので、風物は依然として舊のまゝだが、人はことごとく變りはてゝゐた。

彼は眞先にマリーの墓參りに行つたが、そのとき、或る饒舌な婆さんから、このマリーが產み落した子供を、二組の人がいまだに探してゐるといふ話をきいた。その一組はモリスにきまつてゐるけれど、他の一組は何者の手先とも判らない。そこで彼は暫くその邊に滯在して樣子を探ると、その一組といふのは、巴里の祕密探偵の子分が出張してゐるので、どうやら公爵夫人ブランシュの依賴によるものらしいと見當がついた。しかしブランシュがそれほど熱心にマリーの子供を探してゐる理由がわからない。

「シュバンの倅共に訊いたら、この謎が解けるだらう。」

さう思つて、早速巴里へ出て探してみると、シュバン一家はシャトオ・デ・ランチエの近所に「胡椒軒」といふ居酒屋を營つてゐたが、長男シュバンの寡婦が女主人で、その倅のボリットが手助けをしてゐた。が、この一家は昔ながらに評判がわるく、相變らず貧乏で、火の車を廻はしてゐるのであつた。

ジャンは此軒で一杯飲んで歸らうとすると、寡婦は心付を一錢でも多く貰ひたさに、

「まアよろしいではありませんか。」

引きとめて、くどくと貧乏話をやつた末に、かう見えても亭主が生きてゐる時分は、公爵夫人の御ひいきにあつかつて、金に不自由なく暮らしたものだなどと法螺を吹きだした。

「さては、妹を毒害した者はブランシュに違ひない。」とジャンは獨りうなづいた。「そのときにマ

リーの口から、子供を產んだことを聞いたのであらう。それに老シュバンからその祕密を探られたゝめに、シュバン一家を助けなければならなくなつたのだ。」

ジャンは財布から金貨を一つかみ取りだし、それを卓子の上において、

「どうだい女將さん、俺の手助けをしてくれるなら、お禮は望み次第だ。」

「お有難うございます。旦那さま。わたしに出來ますことなら、何でもいたします。」

「わけないことだよ。お前さん手紙が書けるかい？」

寡婦は手紙ぐらゐ書ける女であつた。そこでジャンは文句を敎へて、次のやうに書かせた。

公爵家奧方さま——ボルトリーの一件につき祕密に申しあげたきこと出來いたし候ふまゝ、明日午後四時までに私方へ御いで下されたく待ち上げ候。五時になつても御出なきときは、公爵さまに直々御手紙を差しあげ申すべく候。

「それで奧さまがお出でになつて、用事はと訊かれたとき、何と申し上げたらいゝでせう？」

「用事なんかいふ必要はない。たゞ金の無心をいへばいゝんだよ。」

ジャンは翌くる日のその時刻に、胡椒軒の二階の節穴から覗いてゐると、ブランシュがやつて來て、女將から願はれるまゝ默つて金を與れて行つた。

「しめた！」とジャンは雀躍した。「やはり俺の考へたとほりだ。あとは此方の都合次第でいつでも呼びだせる！」

九、慘劇前後

セルムーズ公爵は、反對黨の抑壓にあまり辣腕を振ひすぎたゝめ、自分に對する反感が著るしく濃厚になつて來たのを見て、それを緩和する目的で、英吉利、獨逸、墺地利、伊太利の諸國をしばらく漫遊した。そして、餘炎のさめた時分に、瓢然巴里へ舞ひもどつた。

それから間もない或る日のこと、外出先から乘馬で邸の方へ歸つて來ると、恰度夫人が眞黑な服を着て、足早に門を出てゆくうしろ姿を認めた。

「今のはブランシュにちがひないが、あんな服裝をして何處へ行くんだらう？」

不審に思ひながらそつと後をつけて行くと、夫人はタランヌ街で辻馬車に乘つて、どん〳〵驅けさせたが、シャトオ、デ、ランチエ街へ入ると間もなく馬車を降りた。それからそこの空地をぬけて、汚くるしい居酒屋へ入つて行つた。

公爵は呆氣にとられた。どう考へていゝかわからなかつた。それで直ぐに邸へ引かへしたが、忠義な執事のオットオに旨を含めて、かの居酒屋を調べにやつた。

オットオは夕方になつて、當惑した顏で歸つて來た。

「どうだ、判つたか？」

「はい、あの居酒屋の女將といふのは、ブレストの監獄騷動のときに銃殺されたシュバンの寡婦でございます。」

公爵はシュバンといふ名を聞くと何か思ひあたつたらしく、さつと顏色を變へて、すぐに夫人の居間へ驅けて行つた。そこはひどく取り散かつてゐた。夫人はそのとき胡椒軒から歸つて着がへたして、室を取片づける暇もなく、來客で客間の方へ行つたらしかつた。

「今日のことはブランシュに訊いても、正直には云ふまい。俺は默つて樣子を見てゐよう。」

さう思ひながら室内を見廻したが、ふと、銀象眼をした一つの大きな手函が目に止つた。それは彼女が娘の時から傍を離さずに持つてゐる函であつた。

「この中に祕密の手がかりがあるだらう。」

煖爐棚の上にあつた鍵束をとつて試つてみると、四本目の鍵でわけなく蓋が開いた。内には書類が一杯に入つてゐた。

最初手に觸れたのが一枚の請求書。

「セルムーズ夫人の子息捜索費用。一八……年第三期分。」

とある。公爵は頭がぐら〳〵つとした。ブランシュが子供を探す？　彼女に子供があつたのか？

その請求書の内譯を見ると、

「社員二名セルムーズへ出張費用。社主出張費用。その他諸雜費。心附……」

それで總計が六千法で、「シエフツー」と署名がしてあつた。シエフツーといへば、辣腕だが惡

事も働くので評判のわるい私立探偵で、最近古井戸の中から屍體となつて發見された男だ。多くの人を裏切つた奴なので、いづれ怨みある者から殺されたらしかつた。

なほ手函の底の方を探ると、拙い筆跡で「今晩二千法お願ひいたし候。もし下さらぬときはボルドリーの一件を公爵さまに御話いたすべく候。」と書いたシュバン寡婦の手紙と、シェフツーの請求書がまだ〳〵幾枚も出て來た。それから一等底にはかのビガノの牧師が作製して、老ドクトルとバボア伍長が連署したモリス・デスコルバルとマリーの結婚證明書が入つてゐた。

「さては、マリーを毒害したのはブランシュだつたのか！」

すべての祕密がはつきりと公爵の頭に灼きついた。彼はふるへる手先でそれらの書類を元どほりに函へ收めてから自分の室へ歸つて來た。

それは二月初旬のことであつたが、公爵はその日から、夫人の一擧一動にも目を配つた。どんな手紙でも必ず公爵が密かに讀んでからでなければ、夫人の手には渡らなかつた。

あの慘劇の起つた懺悔日曜の前夜に、シュバン寡婦はジャン・ラシヌールの指圖で、「明日曜の夜十一時にぜひ〳〵胡椒軒へ御出下されたく候。」といふ手紙をよこしたが、その手紙も勿論夫人の手へとゞく前に、公爵が目を通したのである。

夫人は夜の十一時といふ指定の時刻があまり遲くもあるし、そんな寂しい場所へ出かけることは迷惑だつたけれど、呼びだされた上は行かずにもゐられないので、お氣に入りのカミイルといふ奥女中

を供につれて、その時刻間近にそつと邸を抜けだした。

このことを前夜から知つてゐた公爵は、かねて執事のオットオに命じて用意させた荷揚人足のぼろ服に着かへ、髪や髭を掻き亂し、手も勞働者らしく染めて、誰が見たつて見分けがつかぬほど巧みな變裝をして、夫人の後を追けて行つた。

「私もお供します。お一人ではお危ふございます。」

オットオがいふと、

「俺は短銃があるから大丈夫ぢや。」

と頑張つて、公爵は一人で出かけた。

外へ出ると、すぐ後ろにすた〳〵人の歩く氣配。

「はゝあ、オットオ奴がついて來たな。」

さう思ひながら、夫人とカミイルの乘つた辻馬車の後を追かけて、夜霧の中をランチエ街の方へ急いだ。

やがて胡椒軒へ行きつくと、まづ横手へ廻つてそつと窓から覗きこんだ。

ブランシュとカミイルは、いかにも下層社會の女らしい服裝をしてゐた。そして、やはりぼろ服を着た眼付の惡い二人の男と一人の若い兵士と一座になつて、食卓をかこんでゐた。食卓の上には大きな鉢が一つ載つてゐた。

シュバン寡婦は室の中央に突立つて、ブランデイを飲かけながら、べちやくちやぬけしやつてゐた。

公爵が二度目に覗いたときは、この婆は奥へ引込んだらしく、姿が見えなかつた。

若い兵士が起ちあがつて、頻りに何かしやべりだした。ブランシュとカミイルは熱心に耳を傾けた。かの悪漢らしい二人の男は、卓子に肱をついて顔を見合つてゐたが、ふと意味ありげな目配せを取り交はした。ブランシュは隨分巧く變裝したつもりだつたが、ダイヤの耳飾り（これはワッチヨオ男爵夫人から彼女が直接に讓りうけたものである）を外すことを迂かり忘れてゐた。今二人の悪漢はそれに目をつけたのである。

やがて、その一人が突然ブランシュの頸つたまをつかまへて、ぐいと卓子へ押しつけた。と、カミイルが夢中になつて止めたので、漸と納まつたけれど、この女中がゐなければ、そのダイヤは危く夫人の耳からもぎ取られるところであつた。

その時だ、公爵が不意に戸口から飛びこんで行つたのは！　そして内へ入ると同時に、門をおろした。

「おゝ貴郎！」

「公爵さま！」

夫人と女中が同時に叫んだ。

「それつ、殺んでしまへ！」

悪漢共は猛然と公爵に向つて襲ひかゝつた。

公爵は跳びのきざま、短銃を突きつけて狙ひ撃ちに二度發砲した。二人の悪漢はその場に倒れた。

と、かの若い兵隊服の男が矢庭に組みついて來た。そして公爵の手から短銃をもぎ取らうとして、そこに猛烈な格闘がはじまつた。公爵は格闘しながらも、夢中になつて夫人の方へ絶叫した。

「ブランシュ、早く遁げろ——外にはオットオが待つてゐるぞ——家名が大切ぢや！」

兩人の婦人は裏口から庭の方へ逃げだした。と殆んど同時に、表戸をドン〳〵叩く音——警官隊がやつて來たのだ。

公爵はこの物音に愕然として、滿身の力をこめて敵を投げとばすと、敵は卓子の角にしたゝか腦天を打つて、死んだものゝやうに床へへたばつた。

公爵はその間に逃げようと思へば逃げられぬこともなかつたが、今自分が逃げだせば、警官が追かけて來て、まご〳〵してゐる夫人が捕まるにちがひない。で、こゝは逃げる場合でないと決心した。

そこで公爵は、恰度二階から降りて來て仰天してゐるシュバン婆の腕をつかんで、嚴かに云ひわたした。

「お前がこの祕密を守れば、お禮は十萬法だぞ。いゝか！」

その瞬間に表戸をめり〳〵と蹴破つて、ゼプロール警部を眞先に、警官の一隊がどつと押し込んで來た。公爵は一歩も退かじと、彼等に向つて銃口を突きつけた。

「こゝで二分間彼等を喰ひ止めることが出來れば、俺は救はれるのだ。」
心のうちに念じながら、辛くも二分間防ぎ終せた。
「もう大丈夫！」
公爵は短銃を床へ投げだし、一躍して裏口から逃げださうとすると、
「コラ待て！」
そこから押し込んで來たルコック探偵が、出會ひがしらに組みついた。公爵はたうとう床へ押し倒された。
この方面からオットオが援けに來るだらうと期待してゐた公爵は、がつかりして、
「萬事休矣！　やつて來たのは曹魯西兵だ！」
かう叫んで、潔よく縛についた。
二時間の後、彼はバリエール警察の留置場へ投りこまれてゐた。
公爵はその暗い留置場に默々として身を横たへた。
こゝで身分が知れると、一黨の領袖にして公爵ともあらう者が、異樣な服裝で場末の居酒屋へ行かねばならなかつた事情が世間に知れるばかりでなく、評判の惡いシュバン一家との關係から、夫人がボルドリーにおいて、ラシヌールの娘マリーを毒害した舊惡までも暴露することは明々白々だ。さうなると、自分に對して怨みを懷いてゐる政敵等は、得たり賢しと惡宣傳をやるだらう。

裁判、牢獄、大醜聞、永久の汚辱——とても堪へきれるものでない。
「一家の名譽と纖弱い妻の安全といふことを思へば、わが身を殺す外に方法がない。」
公爵は悲愴な決心をした。そして靜かに自殺の手段を考へてゐると、だしぬけに騷々しい跫音がして、一人の男が同じ留置場へ投げこまれた。その男は大の字にふんぞりかへつたまゝ、高鼾で寢こんでしまつた。警官に摘まれて來た泥醉者らしかつた。
ところが、よく見ると、それは案外にも執事のオットオだつた。しめた！　と公爵は胸を躍らせながら、頭をなるだけオットオの方へ寄せて眠つたふりをしてゐると、オットオが低い聲で囁いた。
「奥樣は安全です。」
「さうか。しかし明日になつたら何もかも暴露るだらう。」
「御前は御身分をお明しになりましたか？」
「いや、警察では俺を浮浪人と思つとる。」
「結構です。御前はどこまでも白ばつくれてゐて下さい。」
「駄目ぢや。ジャン・ラシヌールが默つてゐまい。」
しかし實際において、それは杞憂に過ぎなかつた。といふのは、ジャンはその晩虹霓ホテルから胡椒軒へ行く途中の暗がりで石切場から墜落し、頭部に大怪我をして倒れてゐたのを、翌朝職人等が發見して、病院へ擔ぎこんだ。折も折、ジャンはこの時ならぬ災難のために、千載一遇の好機を逸した

わけだが、公爵にとつては實に天祐ともいふべきことであつた。
だが公爵もオットオも、その晩はまだ、ジャンがさうした奇禍に遭つたといふことを知る筈もなかつた。
「大丈夫です。ジャンの方は何とかして喰ひ止める方法がありませう。」とオットオが元氣をつけた。
「御前は飽くまでも浮浪人になつてゐて下さい。こゝが我慢の仕どころです。さうすると、あとは金の力でどうにでもなります。」
「しかし俺が何者で、何處から來て、何處に住まつてゐたかを問はれたらどうする？」
「それです。それを打合せるために、私はこゝへ入りこんだのです。私は實は巴里に内縁の女が一人ありますが、誰も私達の關係を知りません。彼女はミルナーといつて、剃刀のやうに切れる女です。マリアンブールといふ旅館を營つてゐます。御前は職業は旅藝人で、名前はメイ。ようございますか。元は捨子で、諸國を流浪してゐたが、ライプチッヒの方から日曜日に巴里に着いて、右のマリアンブール旅館に旅行鞄を預けたと仰しやい。私はその旅行鞄にメイといふ姓名を記しておきます。」
それから頭のいゝ兩人は、迅速に、正確に、防禦の手筈をば一項々々きめて行つた。
やがてすべての相談が出來上つたところで、オットオは漸と醉から醒めたやうな風をして、釋されると、一目散に外へ飛びだした。
少し遲れて胡椒軒から驅けつけたルコックが、地團太ふんで口惜しがつたのはその時だ。

さアそれから、この怪囚人と、神出鬼沒のオットオと、ルコック探偵の戰ひがはじまつたのであるが、その千變萬化を極めた經過は前に詳しく記述したから、こゝには略するとして、只こゝに特記したいのは、公爵邸ではその長い間、夫人と執事の周到な注意によつて、奥女中カミイルの外は、誰一人として、主人公爵の不在に氣づかなかつたことである。
徹底的に手こずつた官憲が取つておきの非常取段として、メイを逃走させたその日、公爵邸では執事のオットオが、マリアンブールの女將から、公爵が護送馬車を拔けだして、ルコック探偵が後を躡けてゐるといふ警報を聞いて、今か〳〵と待ちかまへてゐた。と、夜半になつて公爵が庭園の方から忍びこんで來たので、オットオは手早く主人の髭を剃り落し、そのまゝ浴室へ案内した。
と間もなく、ルコック等は賊を搜すべくどや〳〵と邸内にあがりこんで來た。浴室の附近を探しかけたとき、オットオが驅けだして、これより奥へとほること相成らぬと頑張つてゐる聲がするので、公爵は、
「これ〳〵、警察の方々の御邪魔をしてはならん。」
と浴槽の中から聲をかけた。しかし内心はびく〳〵ものであつた。
さうとも知らぬルコックは、邸内を殘る隈なく搜したけれど賊の影も見えないといふので、悄然と退きあげて行つた。
「これで家名は救はれた。たうとうルコックを打負かしたぞ。」

公爵は初めてほつとしたのである。

暫くして風呂から上つて、緩やかな寢衣を被り、久しぶりに手足を伸ばしてゐるところへ、執事が夫人からの手紙をもつて來た。封を押切つて讀むと、

御無事にて御歸館遊ばし、何よりうれしく御喜び申し上げ候。わたくし事は、かくいろいろの事情明らさまに相成り候上は、もはや存生ふる面目も御座なく候まゝ、貴郎樣をお慕ひ申し上げつゝ、惜しき御暇いたし候。御許したまはりたく候。

公爵は愕然として、夫人の居間の方へ駈けて行つた。

內側から鍵がかゝつてゐたので、押破つて入つたが既に遲かつた。夫人は毒を仰いで死んでゐた。長椅子の上に行儀よく横たはつて、胸に手を組み合はせ、眠るがごとく死んでゐたのであつた。

公爵は熱い涙に眼をうるませて、泌々歎息した。

「あゝ、不幸な女だ！　犯した罪の應報でさんざんに苦しんだのぢや。神樣はゆるしてくださるだらう！」

一〇、ルコックの復讐

怪囚人メイとその仲間の男から徹底的に翻弄され、完膚なきまでに打ち負かされたルコックは、その翌くる日、探偵界の耆宿タバレ先生の垂示を感謝しつゝ『きつと復讐する。この恥辱を雪がずには

おかぬ。』と誓つた。

しかしルコックは、單にメイとセルムーズ公爵と同一人物であるといふ確信にもとづいて、公爵を捕縛することが出來るだらうか。そんなことは出來るものでない。當の公爵も直ちに恐れ入るほどの確かな據證をつかんだ上でなければ、第一彼の上官がそれを許さぬのだ。

彼はその晩はまんじりともしないで考へたが、次の朝にまづ、この事件の最初の受持判事だつたデスコルバル男爵を訪問した。

「旦那樣はお客樣とお話中ですが、お差支もないやうですから、上つてお待ちなさい。」

執事のいふがまゝに、ルコックは書齋へ通つたが、そこには誰もゐなかつた。そして不思議なことに、天鵞絨の幕で仕切つた奧の室から、感に迫つた切れ〴〵な聲と、咽り泣きと、接吻でもしてゐるらしい音が聞えた。

ルコックははつとして、惡い時に來たと思つたけれど、退くにも退かれず、もぢ〳〵してゐるうちに、ふと絨氈の上に開封した手紙が落ちてゐるのが眼に止まつた。彼は咄嗟の出來心でその手紙を拾ひあげた。

拜啓　この書面時參人は、小生の妹マリーの實子、卽ち貴君の子息に相違ありません。そのことを證明すべき確實な證據を彼にたくして、おとゞけします。これによつて御認めください。

小生は先きにマリーから讓られた遺産をば、彼の敎育費に充て、畏敬する人々に彼を託しておいたところ、彼はその人々の薫陶の下に、幸福に成人いたし、御覽のごとく學業人格共に優れた青年となりました。しかるに小生目下の生活は、彼にとつて甚だ不適當と思ひますから、この機會において、彼を貴君の御手許へお返ししします。

マリーを毒害したセルムーズ公爵夫人は、昨日毒を仰いで自殺を遂げたさうですが、元來小生はセルムーズ夫妻に對し、哀れな妹のために、もつと〳〵恐ろしい方法で復讐する手筈だつたのに、小生不慮の災難に遭つてその意を果さず、ために彼等夫妻は、僥倖にもあの程度の損害で事濟みとなつたのです。まづは取急ぎ要用のみ、匆々。

ジヤン・ラシヌール

ルコックは暫時化石でもしたやうに突立つてゐた。

「この手紙で見ると、胡椒軒の慘劇は、このジヤン・ラシヌールといふ者が、公爵夫妻に復讐を企らんだことから起つたんだな。このジヤンといふのは、二十何年前に先代セルムーズ公爵に對する恨みから百姓一揆を起した巨魁ラシヌールの倅に相違ないが、その妹が公爵夫人のために毒害されて、その腹に出來たデスコルバル男爵の子供が、今頃になつて男爵の手許へ送られたとは、どういふわけだらう？　不思議だ。實に複雜を極めてゐる。この關係を探るには、どうしたつてセルムーズ地方へ出かけなければならん。さうだ、直ぐに行かう！」

ルコックは主人男爵に會ひもしないで、そこ〳〵に暇をつげた。そしてその日の午後に、セルムーズへ向けて出發した。

セルムーズへ着いてからの彼は、例の絶倫の精力と緻密な頭腦を傾けて、東奔また西走、モンテニヤックに、レーシュに、或はボルドリーに、或は國境方面に、あらゆる關係地方を踏査した。そして僅々一ケ月間に、この事件の裏面に伏在した二十餘年間の因緣と輕緯のすべてを、細大もらさず調べあげたところで、巴里へ歸つて來た。

今やルコック探偵の頭の中は、白日のごとく明るくなつた。實に精密な調査をとげたもので、殆んど間然するところがない。が、只一つ殘念なことには、政界の巨頭セルムーズ公爵に向つて「お前は逃亡した囚人メイに相違あるまい。」と極めつけるべき、直接の證據がない。

これが最後の、最も困難な問題として彼に殘つた。

さて、公爵夫人ブランシュが自殺を遂げてから恰度一ケ月目に、公爵は自邸の書齋で靜かに讀書をしてゐると、執事のオットオがやつて來て、

「デスコルバル男爵樣から御使者でございます。お手紙を直接にお手渡ししたいと申します。」

「此室へ通せ。」

やがて、脊の高い、赭ら顏の、髮も頤髯も赤ちやけた男がそこへ入つて來て、手紙をうや〳〵しく公爵に差し出した。

公爵は封を切つて讀み下した。

恭啓　過日は貴下の御窮狀を見るに忍びず、ことさらにかの囚人メイを見知らぬふうを裝ふことによつて、貴下を御救けいたし候。小生の心事は夙に御諒察のことゝ存じ候。さて唐突ながら、小生明後日正午までに、金子二十六萬法の必要にせまられ候ふところ、一時御手許より御融通下さる間敷哉。相見たがひの御懇情をもつて、御援助をたまはりたく伏願いたし候。拜具

モリス・デスコルバル

公爵はちよつと當惑した風であつたが、やがて卓子に向つて返事を書きはじめた。が、かの使者が背後からその文言を覗いてゐたことには氣づかなかつた。

復啓　御依賴のものは、明後日といはず、今夜中に當方より御とゞけいたすべく候。小生は貴下のためならば、財産は無論のこと、一命をも惜まざる存意にこれ有り候。過日微服してメイと自稱せる小生をば、昔時の仇敵と御認めありしにも拘らず、抂げて御見遁し下され候御高義に對し、今回のごときは、萬分一の御報恩をいたしたるに過ぎざることを御記憶下されたく候。敬具

マーシャル・ド・セルムーズ

書き終へると封筒に收めて、一ルイの心付と共に使者にわたした。

「御返事ぢや。早う歸つて男爵へ御渡しして下さい。」

だが使者は動かなかつた。彼はその手紙を衣囊へねぢこんだ、と思ふと、素早く顎鬚をむしり取つて、はつと床へ投げつけた。

「やつ、君はルコックです！」

「正にルコックです。」探偵は傲然と答へた。「私はどうしても復讐をしなければならなかつたのです。さうしなければ、警察官としての私の立場がなくなりますからね。今差上げた手紙は、デスコルバル男爵の筆蹟を眞似て、私が認めた僞せ手紙だつたのです。」

公爵は無言だつた。

「なほお斷りしておきますが、」とルコックは附け加へた。「私はいま受取つた御眞筆の告白書を裁判官にわたすと同時に、閣下の無罪を證明すべき證據をも提出するつもりです。なほ令夫人が亡くなられたので、マリー毒害の一件は表面へ出る氣遣ひがありません。その點は御安心なすつてよろしいでせう。」

それから一週間經つて、セミュレ判事から、かの胡椒軒の殺人事件に關し、セルムーズ公爵は無罪といふ判決が下された。

ルコック探偵はその手腕を認められて、間もなく警部に昇進したが、感ずるところあつて、その日、奇拔な印顆を一つ註文した。それは、自分の紋章と定めた、牡鷄の勇ましく翼をひろげた意匠と

共に「油斷大敵」といふ標語を刻したものであつた。
彼はその後一生を通じて、この標語を堅く〳〵守つたといふことである。

ルコツク探偵終

河畔の悲劇

河畔の悲劇

一、早曉の訴へ

千八百六十……年七月九日、木曜日の夜の明け〳〵のことであつた。

巴里の北、セエヌ河に沿うてコルベイユから約一哩をへだてた、オルシバルといふ町の町長邸の訪問鐘を、遽たゞしく叩く者があつた。

その消魂ましい音で眞先に目をさました執事が、窓をあけてみると、常々小盜みや密獵で評判のわるいベルトオ爺と、その倅のフイリップといふ若者が、血相かへて、鐘を叩いてゐるのだ。

「こら、どうしたんだい。煩いぢやないか。」

「町長樣に大至急會はして下さい。ナニ、取次いだつて、貴方が叱られる氣づかひはありません。」

二三押問答の末に、執事は奥へ行つたが、間もなく、づんぐりと肥つた赭ら顏の町長クルトア氏が寢衣姿のまゝ、睡さうな眼をこすりながら玄關へ出て來ると、

「町長樣、た、大變です。トレモレル伯爵樣のお邸に、人殺しがありました。」

とフイリップが急きこんでいつた。

町長は、その伯爵とはごく親しい間柄なので、それを聞くと、さつと顏色を變へた。

「ナニ、伯爵の邸に人殺し？　それや眞實か？」

「たつた今見て來たのです。彼邸の水際に死んでゐたのは、伯爵家の奥樣にちがひありません。」

「それは大變だ。すぐに行つて見にやならん——私が着がへをする間待つてくれ。」

それから執事を呼んで、

「おい、バプテスト、大急ぎで保安判事の許へ行つて、今これ〳〵だから直ぐにお出で下さいと云つて來い。」

執事は慌てゝ飛びだした。

やがて執事が保安判事のブランタ氏をつれてもどつて來たのは、町長の身支度が出來たのと同時だつた。

「お早う。」保安判事は閾際から聲をかけた。「今使ひの人に聞けば、伯爵夫人が殺されたつていふぢやありませんか。困つたことになりましたなア。」

「えゝ、私もたつた今、この二人に聞いたんですがね。飛んだことになつたもので。」

町長はもう他行の服に着替へて、別人のやうに取澄ましてゐた。この町長は、地位ある者がやたらに慌てると、威嚴にかゝはると思つてゐるのだ。尤も、微々たる商人から數百萬の資產をつくり上げた人だけに、そんなことは殊更やかましく考へてゐるらしかつた。

それに較べると、保安判事は明けつ放しで、さつぱりした人であつた。

「實にお氣の毒ですな。」と判事はいつた。「とにかく現場を檢べにやならんが、憲兵伍長にも直ぐに彼邸へ出向くやうに、私からいつてやりました。」

判事もしかし、幾分か、强ひて冷靜を裝うてゐる風があつた。

この保安判事は、土地では「ブランタさん」と呼ばれて、誰からでも、尊敬されてゐた。元はメランの辯護士で、なか〳〵繁昌したものだが、五十の時たつた一月の間に、最愛の夫人と二人の子息が病死してからといふものは、多年幸福だつた家庭生活が一遍に覆へされた。それで悲觀のあまり世の中のあらゆる野心を捨てゝ、まるで隱者のやうな氣持になつてしまつたが、その後このオルシバルの保安判事の地位が空いたのを知ると、隱居仕事にはよからうといふので、そのかぶを讓りうけたのであつた。

「さア大急ぎで出かけよう。」

町長とブランタさんは、ベルトオ父子を先頭に、伯爵邸を指して急いだ。

このオルシバルといふ町は、セエヌ河に沿うて、青々と茂つた森の間からは、土地の豪家や貴族の邸宅の高い屋根がところ〴〵に聳えてゐて、いかにも裕福らしい、瀟洒たる趣をそなへてゐる。巴里から左程遠くもないのに、日曜といへば近郊を荒し廻る巴里の遊び客も、こゝだけは忘れたのか、滅多に入込むこともなく、いつも靜然としてゐて、平和そのものゝやうな町なのだ。

「この町にも、たうとう人殺しが出來たか。これまでは只の一度も、そんな不吉な事件がなかつたの

だがなア。」

町長は歎息しながら、胡散さうにちら〳〵とベルトオ父子の方を見た。

倅のフィリップは眞先に立つて、性急に歩いてゐたが、爺はうつ向いて、妙に考へぶかい風で歩を運んでゐた。

やがて伯爵邸の前へ來ると、門は固く締つてゐた。

町長は訪問鐘をがん〳〵鳴らした。けれど、玄關まで僅か五六ヤードしか隔てゝゐないのに、なかなか人が出て來さうな風もない。

と、そのとき、眞向うのラナスコール夫人の邸前に、馬具の掃除をやつてゐた一人の馬丁が、

「皆さん、鳴らしたつて駄目ですよ。其邸は誰もゐないんです。」と聲をかけた。

「ナニ、人がゐない？」

「旦那樣と奧樣はいらつしやる筈ですがね、取次の者がゐないんです。召使達は、舊料理女をしてゐたデニイさんの結婚披露に招ばれて、昨晩お揃ひで巴里へ出かけたのです。」

「そんなら昨晩は、伯爵と奧樣と二人つきりだつたんだね？」

「えゝ、お二人つきりです。」

「それは大變だ。」

「此門にぐづ〳〵してはゐられない。」とブランタさんは急きこんだ。「おい、誰か錠前屋を呼びに行

つてくれ。」
「私がまゐりませう。」
ベルトオの倅が驅けださうとすると、恰度そのとき、街の向うから、笑ひさゞめきながらやつて來たのは、此邸の召使達であつた。二人の男と三人の女中が打揃つて、歸つて來たのだ。彼等は門前に人が立騒いでゐるのを見ると、急に笑ひし談を止めて、すた〳〵と早足になつたが、執事のフランソアといふ男が、一人眞先に驅けて來た。
「皆様は旦那様に御用でいらつしやいますか。」
と執事は、町長とプランタさんの方へ丁寧にお辭儀をした。
「先刻から呼んでゐるのに、返事がないんだよ。」
「そんな筈はありません。旦那様はいつも早くお目覺めですから、事によると、何處ぞへお出懸けになつたのでせう。」
「皆さん大變です、きつと、御夫婦とも殺されてゐますよ。」
ベルトオの倅が突然に叫んだ。それを聞くと召使達は、昨晩からの愉快を一遍に吹きとばされたやうに、ぎよつとして顏を見合せた。
「えつ、そんな災難があつたのですか。」と執事は呆氣にとられた。「さては、あの金に目をつけた奴——」

「何か思ひ當ることがあるのか？」
「實は、昨日の朝、旦那様のお手許に大金が入りましたので。」
「うむ」町長は眉をよせて、「お前達は昨晩此邸を何時に出かけたのだ？」
「夕食を早めに濟まして、八時に出かけました。」
「皆んな一緒にか。」
「はい。」
「途中で別れ〳〵になりはしなかつたか。」
「始終一緒にをりました。」
「歸りも皆んな一緒なんだな？」
召使達は意味ありげに顏を見合せたが、
「昨晩巴里の停車場へ着くと、一人だけ、はぐれました。」と奥女中が思ひきつていつた。「それは庭師のゲスパンでございます。」
「どうしてはぐれたのだ？」
「後刻に宴會の場所——パチニヨオル街のウエブラ亭へ來るつて約束で、用足しに出かけたのでございます。」
町長はそれと聞くと、肱で保安判事へ相圖をしながら、

「そのゲスバンといふ男は、後に會場へ來たのか。」
「いゝえ、それつきり顏を見ません。」
「その男は何時から此邸に雇はれたのか。」
「この春からでございます。」
「彼は伯爵の手に大金が入つたことを知つてゐたんだな。」
召使達はもう一度、互ひに視線を交換したが、
「はい、わたし達は度々その噂をしました。」と奧女中がいつた。「そしてゲスバンは、旦那樣はえらくお金が入つたから、今に我々にも下されものがあるぜ——そんなことをいつて、喜んでゐました。」
「彼はどんな性質の男か？」
この問には、さすがに饒舌な召使達も默りこんでしまつた。何かいふと、それが直ちに有力な證言になりさうなのを恐れてゐるらしかつた。
が、先刻からこの話に割込みたがつて、むづ〳〵してゐた向う邸の馬丁が、無遠慮に口を出した。
「ゲスバンは面白い男ですよ。もとは裕福だつたさうで、何でも一通りは心得てゐます。毎晩仕事を終へると大急ぎで遊びに出かけるんですが、撞球は素的な名人で——」
ブランタ判事は、門や塀のあたりをそれとなく目で檢べてゐたが、じれつたさうに、
「その話は後廻しとして、まづ現場を見なければならん。鍵を持つてゐる者が早く門を開けなさい。」

執事が早速鍵を取りだして門を開けると、皆んなどや〳〵と前庭へ入りこんだ。
恰度そこへ、憲兵伍長が部下を率ゐて驅けつけた。
伍長は、早速二人の部下に門を警戒めさせ、自分だけが皆と一緒に邸内へ入つて行つた。

二、大亂雜

玄關を入ると、只ならぬ事件があつたらしいことは、誰の眼にも判つた。
庭園の方へ出る硝子戸は開け放したまゝで、その硝子が粉々に破れ、大理石の敷石のところ〴〵に血が附着し、殊に階段の下が夥だしい血痕！　人々は思はずアッと叫んだ。
町長は足許がふら〳〵して、氣が遠くなりさうだつたが、役目の重いことを考へて、强ひて勇氣をふるひ起し、「おい、お前等が屍體を見たといふ場所へ案内しろ。」と、ベルトオ父子にいふと、ブランタさんは遮つて、
「それよりも、まづ家の中を檢べなければなりますまい。」
「なるほど——左樣でしたね。」
町長は召使達を遠ざけて、執事だけを案内者として、ブランタさんや伍長と共に、二階へ昇つて行つた。
階段にも欄干にも血が附着してゐた。

「伯爵御夫婦の居間は何處だね？」
「此方でございます。」
執事の指した戸口を見ると、扉の上の方に、血塗れの手型がべつたりとくつついてゐた。これには、クリミヤ戰爭の勇士だつた憲兵伍長でさへ、たぢ〳〵と後退りをした。
「とにかく内部を見なければならん。」と、ブランタさんが眞先に踏込んで行つた。
そこは、青天鵞絨の窓掛を垂れた居間で、やはり青天鵞絨張りの長椅子が一脚と、肱掛椅子が四脚備へてあつたが、その一脚が顚覆してゐた。
隣りの寢室の方へ行くと、そこは物凄く取散らかつて、死物狂ひの格闘を演じた跡がまざまざと殘つてゐた。室の中央の小卓は倒れ、砂糖の塊りだの、朱色の茶碗や、急須や、皿の破片が、そこいら一杯に散亂してゐた。
「賊は、旦那様と奥様とお茶を召飲つてゐるところへやつて來たんですね。」と執事がいつた。
煖爐棚に飾つてあつた置時計はころげ落ちて、三時二十分のところで針が止つてゐた。その傍に倒れたランプは、火蓋が碎け、石油が床に零れてゐた。
寢室の帳は、夜具の上に落ち蔽さつてゐた。恐らく誰かが獅嚙みついた拍子に斷れたのであらう。椅子は短刀様の刃物で切られたらしく、こみ物がはみ出してゐた。書きもの机は叩き破され、書き板のところは蝶番が外れ、そして鮮血は床にも、窓布にも、あらゆる器具にもはねかへつて、實に凄慘

を極めてゐた。
「お氣の毒なことだ。」と町長がいつた。「こゝで御夫婦とも殺されたんだな。」
誰も彼も、暫時は呆氣にとられた。獨りブランタさんだけは、せつせと室の隅々までも檢べて、必要な箇所は一々手帳に書き止めてゐたが、それが濟むと、
「さア他の室を檢べよう。」と皆を促した。
伯爵の書齋も、恐ろしく荒され、鍵のかゝつた簞笥や戸棚は一つ殘らず破壞されてゐた。賊はそれらの錠前をこじあける代りに、斧で片つ端から叩き破したらしい。
何しろ徹底的に暴れたもので、客間も、喫煙室も、泊り客用の二つの室も、同じやうに恐ろしく踏み荒されてゐた。
二階の檢べが一通り濟んだところで、一同は三階へ上つて行つたが、その突かけの室に、賊が破しにかゝつて開けきれなかつた旅行鞄が一つあつて、その傍に薪割用の斧が投りだしてあつた。
執事の話では、その斧は、伯爵家の所有にちがひなかつた。
「賊は大勢ですね。」町長がブランタさんにいつた。「彼等は伯爵御夫婦を殺してから、方々に手分けをして、かねて目をつけた金の所在を探したらしい。その中の一人が、この旅行鞄を破しにかゝつたとき、仲間の者から金が發見つたといふ知らせがあつたので、もう探す必要がないから、斧をこゝへ投りだしたまゝ、大急ぎで階下へ降りて行つたんでせう。」

「さうにちがひありません。目に見えるやうです。」と憲兵伍長は、すつかりその說に共鳴した。

しかし、ブランタさんは何も云はなかつた。

それから、再び階下の方へ引かへしたが、そこは各室とも整然としてゐて、別段荒された跡はない。たゞ、賊等が食堂へ入つて飲食ひをした形跡があつた。戸棚に殘つてゐた冷肉をすつかり平げて葡萄酒やその他の酒壜が八本も空になつて、食卓には酒杯が五個ならんでゐた。

「賊は五人だね。」町長がいつた。「早速コルベイユの裁判所へ通知しなければならん。さうすると豫審判事がやつて來て、この厭な仕事を片附けてくれるでせう。」

すぐに厩から二輪馬車を引出し、憲兵の一人がそれに乘つて、コルベイユ裁判所へ急行した。

それから、町長と、ブランタさんと、伍長と、執事が打揃つて、ベルトオ親子の案内で、屍體が見えたといふ庭園の端の水際の方へ行つた。

伯爵家の庭園は可成り廣くて、主家からセエヌ河の岸まで約二百歩をへだて、家の傍は一面の芝生で、そのところ〴〵に花床があつた。

芝生の間には、二つの徑が河岸の方へ通つてゐるけれど、賊等は近道をするために、芝生の上を眞直に歩いたもので、しかも重い物を引きずつて行つた痕がはつきりと殘つてゐた。

ブランタさんは、その芝生の中央に赤いものが落ちてゐるのを見つけて拾ひあげたが、それはスリッパの片一方で、執事の說明によれば、その前日まで伯爵の穿いてゐたものにちがひなかつた。

もう少し先へ行くと、白いハンケチの血に染まつたのが一枚落ちてゐた。それは伯爵が頸にまいてゐたもので、執事はたしかに見覺えがあるといつた。

河岸は緩い砂地で、どうかすると足をとられさうだつたが、この邊で猛烈な格鬪が行はれたらしく足跡が盛んに入亂れてゐて、そこの大きな柳の根方に、女の屍體が横はつてゐた。

「誰も此方へ來てはならんぞ。」

町長は皆を少し離れた處へ止めておいて、ブランタさんと二人つきりで、屍體の傍へ行つてみた。仰向けになつたその屍體は、上半身が水につかり、着物は血や泥で淺ましく汚れてゐた。そして顏は水中の砂に埋つてゐるので、見わけが出來なかつたけれど、それは伯爵夫人に相違なかつた。青のレースで緣どつた灰色の服は、町長にもブランタさんにも見覺えのあるものであつた。

しかし彼女は、どうしてこんなところに死んでゐるのか？

「夫人は夢中になつて、こゝまで遁げて來たんだね。」と町長がいつた。「ところが賊に追かけられ、ここで捉まつて、激しい抵抗の後つひに倒されたのです。してみると、芝生の上を引ずられたのは夫人ではない。賊がきつと伯爵の屍體を引ずつて來たのでせう。」

しかしこの熱心な說明に對して、ブランタさんは殆んど耳を傾けてはゐなかつた。

ブランタさんは、忙しげにあつちへ行つたり、こつちへ駈けたり、距離を測つたり、しやがんで地面を檢べたりしてゐた。その邊の水は一呎ほどの深さで、ところ〴〵に菖蒲が生えて、睡蓮が靜か

にうかんでゐた。
そのとき町長は、ふと何か思ひついた風で、
「おい、ベルトオ、お前等は船からこの屍體を見たといふが、その船は何處にあるんだ？」
「もう少し下の方の岸に繋いであります。」
「そこへ案内しろ。」
「はい。」
ベルトオ爺はひどく狼狽したが、厭々ながら先に立つて、少し下手の、邸境の溝をわたらうとする
と、その邊の草原に點々と足跡がついてゐた。町長は早くもそれを見咎めて、
「おゝ、誰かこゝを跳び越えた者がある。まだ新らしい足跡だ。」
といひながら、溝を越えて漁船のあるところへ行つた。
「お前等は船から見たなんて、出鱈目をいつたな。この網も櫓もカラ〳〵に乾いてゐて、昨日から使
つた形跡がないではないか。」
「どういたしまして——私達は嘘を申したのではありません——」
とはいつたものゝ、父子ともに慌てだした様子は、隠しきれなかつた。
「それが正直なら、裁判官の前で言譯をしろ。しかしあの屍體は、こゝでは見えない。沖からはなほ
のこと見えはしない。それに、あの草原の足跡は、お前等が溝を越えて、邸内へ入つた證據なんだ。」

ベルトオ父子は、默つて首をうな垂れた。
町長は憤然として、
「おい伍長さん、この父子を捕縛つて、別々に監禁したまへ。」
「承知しました。二人とも此方へ來い！」
伍長は早速ベルトオ父子を邸の方へ引立て、別々の室に押こめて、部下の憲兵に監視を云附けてか
ら、再び庭の方へ引かへして來た。
「ところで、伯爵の屍體はどうなつたゞらう。」
と町長は小首を傾げた。それがひどく氣にかゝつた。けれどこの場合、まづ發見された夫人の屍體
を處理せねばならなかつたので、とにかく戸板を取寄せて、そこらの證據となるべき足跡を消さない
やうに注意しながら、屍體を邸の方へ運びこんだ。
これが美貌で鳴らしたトレモレル伯爵夫人とは、どうして思へやう。莞爾かだつた顔や、涼しい眼
ざしや、稍肉感的な口許など、今はその面影だも見られない。顔面はまつたく識別しがたいほど、め
ちやくちやに傷つけられた上に、血や泥に汚れてゐたのである。
屍體の様子から判斷すると、賊は途方もない狂暴性をもつた奴らしく思はれた、短刀で斬附けた傷
が二十個所以上もあつて、そのほか棍棒又は鐵槌のやうなもので激しく毆りつけた痕があり、脚や髪
を攫んで引ずり廻した形跡もあつた。

彼女は左の手に、少しの切地を堅く握つてゐたが、それは賊へ獅嚙みついたときに、その服の切地が斷れたものらしかつた。

召使等にも手傳はせて、夫人の屍體を階下の撞球室へはこびこんで、球臺の上に安置したとき、コルベイユ裁判所の豫審判事が、書記と囑託醫を從へてやつて來た。

「たうとう來てくれたか。」

町長はほつと安心して、漸く重荷をおろしたやうな氣持がした。

彼はつまらぬ野心から、オルシバルの町長といふ椅子に坐つて以來、この日ほどさうした野心を後悔したことはなかつた。その重要な地位に伴ふ役目の辛さをば、今日といふ今日は泌々と思ひ知つたのであつた。

三、伯爵夫妻

豫審判事ドミニ氏は、齡の頃四十——よくも裁判官の型に嵌りきつた人である。

年中嚴しい顏をして、苟にも裁判官たる者は、世俗と交はれば墮落するといつたやうな考へから、出來るだけ世間的な交際を避け、その齡になるまで結婚もしずに、頑强に獨身生活をつゞけて來たといふ變り者だ。

町長とブランタさんが早速出迎へると、ドミニ判事は、顏を見知つてゐるくせに、初對面同樣の嚴

かな挨拶をしてから、

「この人がドクトル・ゼンドロンです。」

と囑託醫を二人に紹介した。

ブランタさんは、いきなりドクトルと堅い握手を交した。勿論懇意な間柄だつたのである。

このドクトルはもう六十恰好だが、眞面目な研究家として、誰からも尊敬されてゐる人で、殊に人はあまり知らないけれど、毒物については、巴里の專門學者でも及びがたいほどの獨創的な深い研究をつづけてゐるのであつた。町長は判事とドクトルを一まづ客間へ案內して、

「私の町にも、たうとうこんな不祥な事件が出來したので、これで町の名譽が廢つてしまひました。」

さういふと、判事は例の眞面目な顏をして、

「俺はまだ事件の內容を聞いてゐません。迎へに來た憲兵も、詳しいことは知らなかつたので。」

そこで町長は、自分がそれまでに檢べたところを詳細に話して、合間に苦心談や意見をちよい〳〵挿んだりして、ベルトオ父子を容疑者として捕縛した顚末や、庭師ゲスパンなる者が、昨夜からずらかつてゐる次第をも、併せて報告した。

町長は今の先、役目の辛さを泌々感じたけれど、一方にこれだけの調べを仕終せたのを思ふと、聊か得意な氣持がしないでもなかつた。

「次に、伯爵の屍體については、早速大搜索を命じましたので、やがて發見出來ませう。私が特に選

んだ五人と、此邸の召使が總出で庭園を搜してゐます。それでも發見らなければ、漁師を召集して、大々的に河底の搜索をやらせるつもりです。」

默つて肯きながらその話を聞いてゐたドミニ判事は、除ろに自分の考へを纏めてゐるらしかつた。

「貴方のとられた手順は、申し分がありません。」と町長にいつた。「實にお氣の毒な事件だが、しかし御說のとほり、犯人の目星はついたやうですな。捕縛されたベルトオ父子と、行方をくらました庭師は、この事件に何等か關係をもつてゐるでせう。」

先刻から焦つたさうにしてゐたブランタさんは、もう我慢が出來ないといふ風で、

「庭師のゲスパンがこの事件に關係があるとすれば、二度と此邸へ歸つて來る氣づかひはないから、何とかしなければなりますまい。」

「いや、直きに捕まりますよ。」とドミニ判事は落ちついたもので、「俺はこゝへ來がけに、巴里の警視廳へ向けて、探偵を一人よこすやうに電報を打つておいたから、もうやつて來る筈です。」

「その前に現場を一通り御覽になつたらどうでせう。」

町長が勸めると、ドミニ判事は一度腰を浮かしかけたが、また坐り直つて、

「それは探偵が來てからにしよう。それよりも參考のために、伯爵御夫婦のことを聞かして下さい。」

「そのことなら、私が誰よりもくはしく知つてゐます。あの御夫婦がこの町へ來られて以來、親しく交際つてをりましたので。」

と町長はまた得意になつて、說明をはじめた。

「トレモレル伯爵は、齡はたしか三十四歲で、好男子で、えらい智慧者です。ときゞ憂鬱になつて人に顏を見せないこともありましたが、平生は至つて愛想がよく、親切で、ちつとも高ぶらない人でした。それゆゑ、町の者も誰も彼も、あの人を敬愛してゐました。」

「成るほど、それで、夫人の方はどんな女でしたか。」

「夫人は天使そのものゝやうな女でした。ほんたうにお氣の毒な！　貴方も直きに屍體を御覽になりませうが、顏はめちやくちやな傷で、見別けがつかないけれど、元來素晴らしい美人で、この地方の女王といはれた女です。」

「財政は裕かな方でしたか。」

「えゝ、年收は十萬法、いやもつと多い筈です。最近に、ソオブルジイから遺された土地の一部分を賣つた金で、公債を買ひましたさうで。」

「伯爵御夫婦は、何時結婚をされましたか？」

町長は記憶を呼びおこさうとして、頭をおさへながら、

「それは去年の――九月でした。私が仲人をしたのです。氣の毒なソオブルジイが死んでから一年目のことです。」

ドミニ判事は、要點をしきりにノートに書き止めてゐたが、その時ちよつと手を止めて、

「そのソオブルジイといふのは、何人ですか。」
すると、それまでは無頓着な風をして話を聞いてゐたブランタさんが、すつくと起ち上つた。
「ソオブルジイ氏は、トレモレル夫人の先夫です。」と彼はいつた。「町長は、その點を省略されたやうですがね。」
「この際、そんなことまで云ふ必要はありますまい。」と町長はむきになつた。「しかし私は詳しいことは幾らでも知つてゐます。この町の人事については、私以上に詳しい者はない筈なんだから。」
「そんなら、貴方はお話が下手です。肝腎のところが抜けてゐます。」
とブランタさんがやりかへした。
「では、ブランタ氏から是非その話を聞かして下さい。」
ドミニ判事に促されて、ブランタさんは二つ返事で語りだした。
それによれば、トレモレル夫人は舊の名をベルタ・ルシエイユといつて、或る村の貧乏な學校教師の娘だつたが、天成の美人で、小町娘の名をとゞろかしただけに、附近の若者の多くは、彼女に思ひをかけてゐた。けれど、彼女は家の事情で早くから女教師となつて、地味な生活をしなければならなかつた。それほどの美人にとつて、日蔭者同樣な村の女教師とは、何といふ悲しい職業だつたらう。
ところが、その時分、その地方で第一の富豪といはれたクレマン・ソオブルジイが、彼女を一目見ると、熱烈な戀に陷ちた。ソオブルジイは三十になつたばかりだが、繫累のない獨り者で、年收は十

地の收穫だけでも一萬法といふ身分だから、どんな嫁御寮でも選み放題だつたのに、彼は何の躊躇もなくベルタに結婚を申込んだ。ベルタも快く承諾したので、それから一ケ月後に、二人はめでたく婚禮の式をあげた。
附近の富豪達は、ソオブルジイのこの結婚を評して、「何て馬鹿な人だらう。長者の娘をもらつて財產を倍にする算段をしなければ、金を持つた甲斐がないではないか。」などといつたものだ。
けれどソオブルジイは大滿足で、結婚と同時に、このオルシバルの町に宏莊な新邸を建てゝ、新夫婦はそこへ引移つた。
ところがベルタは、生れながらにして富豪の夫人たるに適はしい女であつた。彼女は見すぼらしい村の學校から、すぐにこの邸宅へ移つて來たが、家事の切廻しから客の接待に至るまで、まことに優雅で、自然で、まつたくさうした身分に生れついた女としか思へなかつた。そんな風だから、彼女の評判は大したものであつた。
ところが結婚してから二年目の或る日、ソオブルジイは、巴里の大學で同窓だつた一人の友人を邸へつれて來たが、その友人といふのが、エクトル・ド・トレモレル伯爵であつた。この伯爵は初めは直に暇をつげる豫定だつたのに、何週間と過ぎ何ケ月と經つても、巴里へ歸りさうなふうが見えない。しかしそれは無理のないことで、巴里で遊蕩三昧の荒びはてた生活をおくつて來た伯爵のやうな人にとつて、この寂かな町の落着いた邸こそは、魂ひと體を休養させるのに、最も適當な場所であつたの

だ。

伯爵は滅多に外出もしなかつたが、ときゞ〳〵コルベイユの町へ、徒歩でそつと出かけて行つた。そして其町の有名なベル・イマーヂといふ旅館で、或る若い女と媾曳をしてゐた。その女は巴里からやつて來て、午後一杯を伯爵と語り合つて、終列車で歸つてゆくのであつた。

ソオブルジイ夫妻は、親身に伯爵の世話をした。その時分ソオブルジイは、數回巴里へ出かけて行つたが、それは何でも、自分で金を立替へて、伯爵の莫大な借財を整理するためであつたらしい。

さうしてゐるうちに、一年といふ月日は飛ぶやうに過ぎたが、或晩ソオブルジイが獵から歸つて、氣分がわるいといつて床に就いた樣子がいかにも苦しさうなので、醫者に診せると、風邪から肺炎を併發したのであつた。しかし彼は平生頑健を誇つてゐたゞけに、一度は癒りかけたが、また衰弱しはじめて、夫人や伯爵の獻身的看護もその效なく、いよ〳〵重態となつて遂に回復の見込がないと知つたとき、彼は夫人と伯爵とを枕邊によんで、これまでの手厚い看護を心から感謝し、夫人の手をとつて伯爵と握手をさせながら、自分の亡き後は二人が結婚をして屹度幸福に暮してくれと云ひ遺して、間もなく呼吸を引きとつた。

後に殘つた夫人と伯爵の悲歎は、他の見る目も氣の毒な程であつた。夫人は狂人のやうになつて、自分の居間に引籠つたつきり、親友の町長夫人が訪問してさへ顏を見せないくらゐだつた。伯爵も悲歎のあまり、急に二十も老けて見えた。

しかし、さうした激しい悲しみも次第に和らいで行つて、一年の後には、故人の遺言どほりに、この未亡人と伯爵は結婚をした。そして彼女は改めてトレモレル伯爵夫人となつたのである。

これでブランタさんの話が終ると、

「よくわかりました。」とドミニ判事がいつた。「殊に伯爵がベル・イマーヂ旅館で、若い女と媾曳をしたといふ事實は、大切な點です。女の嫉妬から往々かうした犯罪を惹起すことがありますからな。それはさうと、結婚後の伯爵夫妻の仲はどんな風でしたかな。」

町長は先刻から、ブランタさんにお株を奪られて、何となく町長たる威嚴を損じたやうな氣持がしてゐた矢先なので、

「それはもう、申分のない御夫婦でした。」と彼は進んで說明をしはじめた。「エクトルとベルタ——私はあの御夫婦を親しくかう呼んでゐました——は、珍らしく圓滿な模範夫婦だと、常々家内とも噂をしたことです。殊に伯爵は私の長女のロオランスと氣心が合つてゐたので、私は專ら娘を伯爵に娶合せるつもりで、彼女に相當の持參金を與へる準備までしたのに、ソオブルジイの病氣から急に事情が變つたゝめに、その緣談もそれつきりになつてしまひましたが、兎に角私はあの人に對して、非常な親しみをもつてゐたのです。」

町長はなほも伯爵夫妻の讚辭をつゞけようとしたが、そのとき玄關に當つて俄かに騷々しい物音が起つたので、話が妨げられた。

「おゝ、伯爵の屍體が出たらしいです。」
と彼はいつた。

四、庭師ゲスパン

しかし町長の思惑はちがつてゐた。その騒ぎは、伯爵の屍體が發見されたためではなかつた。
やがて客間の戸が突然に開いて、一人の痩せ形の男が、憲兵と下男に左右の手を執られ、懸命に爭ひながら閾際まで押されて來た。
「彼奴だ！　ゲスパンだ！　叩つ殺せ！」
口々に呶鳴つてゐる彌次馬の聲が聞えた。
庭師のゲスパンが歸つて來て、捕まつたのであつた。
「私は何も知りません――放して下さい――」
ゲスパンは夢中になつて抵抗した。
「早く此室へ押込め〳〵。」
町長が起ちあがつて、憲兵を勵ましたけれど、相手が死力を出してゐるので、なか〳〵始末がつかない。
そのときドクトルが、もう一枚の戸を内側から開けると、ゲスパンは支へを失つてよろ〳〵と、ド

ミニ判事の坐つてゐた卓子の脚もとへ轉げこんだが、すぐに起ちあがつて逃げ場を探した。けれど、窓も戸口も人が固めてゐるのを見ると、彼は觀念して仆れるやうに椅子へ腰をおろした。
「此奴は一杯機嫌で、千鳥足で歸つて來たのです。」と憲兵伍長が報告した。「門前へ來て、我々の姿を見ると、すたこら逃げだしたので、すぐに追かけて捕まへました。身體檢査をやると、衣嚢からハンケチと、枝剪鋏と、小さな鍵が二本と、數字を澤山書きこんだ紙片と、金物屋の名刺を一枚發見しました。」
と、それらの證據品を卓子の上において、
「それから、玄關へ入らうとするとき、此奴が植込の草花の中へ密と財布を投りだしたので、私が拾つてみますと、その中に百法紙幣が一枚と、ナポレオン金貨が三枚と、小さな銀貨が七法入つてゐました。此奴昨晩は文無しで出かけたさうですが――」
「ナニ、出かける時は金を所持してゐなかつたといふんだな？」
と判事が念をおした。
「はア、執事から二十五法を借りて行つたさうです。」
「そんなら執事を呼べ。」
早速執事のフランソアが呼びだされた。
判事は彼に對して訊問をはじめた。

「このゲスパンは、昨日は金を所持してゐなかつたか？」
「はい、金がないつていふものですから、巴里行きの割前を二十五法だけ、私が貸してやりました。」
「しかし彼は貯金があつたのではないのか。例へば、百法紙幣はあるが、それをくづしたくないので、お前に細い金を借りたのではないのか？」
すると執事は首をふつて、
「ゲスパンは貯金をするやうな男ではありません。給金は大抵女と花牌に費つてしまひます。現に先週も『コンメルス』といふカッフエの主人が掛取りにやつて來て、滯ほりを拂はなければ、伯爵に云附けるなんて威かしてゐたくらゐです。」
さういつたが、少し云ひ過ぎたとでも思つたのか、
「尤も私は、今日が日まで、ゲスパンを惡い男とは思ひませんでした。ときゞ人をかついだり、素性のいゝことを自慢したりする癖はありましたけれど——」
「もうよろしい。」
とドミニ判事は、執事を別室へ退らせてから、
「どうだ、ゲスパン、氣が靜まつたか。」
「はい。」
ゲスパンは少しよろけながら、卓子に身を支へるやうにして、起ちあがつた。

「お前も昨晩の事件を聞いたゞらうが、伯爵御夫婦が何者かに殺されたのだ。ところでお前は、昨晩他の召使達と一しよに巴里へ行つて、向うの停車場で別れたつきり、顏を見せずに、今歸つて來たといふが、あれから今まで何處にゐたのか。」
ゲンパンはうつむいたつきり、何の答へもない。
「そればかりでなく、昨晩出かけるときに無一文だつたお前の財布から、百六十七法といふ金が發見されたのが、不思議ではないか。一體その金はどうしたのぢや。」
庭師は何か云ひさうにして、微かに脣を動かしたけれど、依然として答へなかつた。
「それに、この金物屋の名刺は、どうしたのぢや。」
庭師は自暴になつたやうな身振りをして、
「私は潔白でございます！」
「いや、俺はまだ、お前に罪があるといつたのではない。お前は昨日伯爵の手許に大金が入つたことを、知つてゐたゞらうな。」
「私は運がわるいのでございます。」
それつきり默りこんだ。寸時深い沈默があつた。
判事は再び追窮をはじめた。
「第一に確かめねばならぬのは、お前が昨夜一晩を何處で何う暮らしたかといふことゝ、お前の財布

から發見された百六十七法の金を何處から手に入れたかといふことだ。」
「私は默目です。それを申し上げたつて、とても信用される氣づかひはありません。」
「注意しておくが、答へなければ、容疑者としてお前を捕縛する外はないぞ。」
「私を救うて下さる人は、たつた一人しかないのに、その人が殺されてしまつて、下手人が出ないとすれば、私はもう默目です。運がわるいのです。私は辯解はしませんから、どうぞ御存分になすつて下さい。」
判事は直ちに憲兵に命じて、ゲスバンを捕縛させた。
「嚴重に監視をつけて置け。」
判事はさういつてから、次にベルトオ爺を呼びこんだ。
これがまた困つた奴で、年中何か惡事をやつては、警察の厄介になつてゐる爺であつた。
「此奴は至つて評判のわるい男です。」
町長が判事に囁いたが、爺はそれを聞いても平氣な顏をして、にやゝ笑つてゐた。そしてこんなことをいつた。
「私は案外正直な男でございます。世間の人は、私なんかを惡者だなんて云はれた義理ぢやありません。嘘と思ふなら、町へ出て御覽じろ。身分のある人が隨分だらしのない眞似をしてゐますからね。」
「餘計なことを云つちや可かん。」

「お前は、昨晩は何をやつてゐたか。」
判事に問はれて、爺の答へたところによれば、彼は宵のうちは町の居酒屋に飲んでゐたが、十時頃からモオブレボアールの森へ係蹄を仕掛けに行つて、家へ歸つて寢たのは夜半の一時であつた。
「今頃はきつとあの係蹄に、獲物がひつかゝつてゐませう。」
と附け加へた。
「お前は夜半の一時に家へ歸つたことについて、證人があるのか。」
町長が訊ねた。町長は、二階の置時計が三時三十分のところで止つてゐたことを、ふと思ひだしたのであつた。
「證人とてはありません。私が歸つて來たときは、倅もぐつすり眠こんでをりましたので。」
と爺はいつたが、判事がむづかしい顏をしてぢつと考へこんでゐるのを見ると、何だか不氣味になつて來た。
「また、犯人が出るまで、私を牢屋へ打込むつもりなんでせう。冬場ならまだいゝんですが、獵や川狩りの忙しい今時分にやられては堪つたもんぢやありません。だから云はないこつちやない——倅の野郎が餘計なことをしくさつて——」
「そんなことはどうでもいゝ。お前はゲスバンといふ者を知つてるだらうな？」
爺はこの問にぎつくりしたやうであつたが、

「はい、ゲスパンは、飲酒仲間で――花牌もちよい〳〵ひいたことがございます。」
役人達がそれを聞いて急に緊張したのを見ると、爺はしめたといつたやうな顔をして、
「かうなつた上は、何もかも申し上げます。實はあの男が伯爵家の溫室からくすねた葡萄や苺を私に賣らせて、その金は二人で分けてゐました。」
爺はゲスパンを賍さうとして、且つまた自分が助からうとして、迂濶々々と口を辷らせたが、失敗つた、これを云へば自分も逮捕られるな――と氣づいた時はすでに遲かつた。判事の命令で彼はすぐに捕縛された。
そして入替りに、倅のフィリップが呼出された。
訊問に對して倅の答へたところによれば、その朝、草原から溝を越えて伯爵邸の庭園へ入つたことは事實だが、それは、爺と二人で船を出さうとすると、たま〳〵橈止が破れてゐたので、彼はそれを繕ふために柳の枝を折るべく庭園の中へ入つて行つた。すると、その柳の木の下に伯爵夫人の屍體が横はつてゐるのを見て、膽をつぶして、爺に勸めて一緒に町長邸へ屆けに行つたのだが、庭園内に入つたといへば係り合ひになりさうなので、船から屍體を見たと申し立てたのであつた。
漁に出るまではぐつすり眠こんでゐたので、爺が夜半の何時ごろに歸つたかは氣づかなかつたさうだ。それから爺が庭師ゲスパンと交際つてゐることは分つてゐたが、二人の間にどんな交渉と、どんな取引があるかは、些しも知らないといふことであつた。

判事はそれだけ聞いて、取敢へずこの倅を釋放した。といふのは、疑ひが晴れたゝめではなく、この男を一人放してひそかに監視すれば、早く他の共犯者を捕まへる便利が得られるからであつた。
さて一方では、邸中を殘る隈なく搜したけれど、伯爵の屍體は發見されなかつた。町長がその邊の漁師達を狩り集めて、河底を大々的に搜索させたが、やはり無效であつた。
ところが午後の三時頃になつて、ドミニ判事と、町長と、ブランタさんと、ドクトルの四人が、食堂へ入つて、簡單な中食を使ひながら協議をしてゐると、一人の見知らぬ男が、突然にぬつとそこへ入つて來た。
「君は何者だい。誰の許可で此室へ來たんだ？」
町長がきびしく問ひかけると、その男は丁寧に一禮して、
「私は探偵のルコックです。此方からの電報によつて、警視廳から派遣されて來たのです。」
皆が眇からず面喰つた。といふのは、その男の風采が一向に探偵らしく見えないからであつた。
いつたい佛蘭西では、人の服裝は職業によつて大體型がきまつてゐて、多くの場合一目で云ひあてることが出來る。例へば、几帳面な黑服に眞白な襟布はお醫者、便々たる腹を突きだして、チョッキに金鎖を光らせてゐるのは銀行家、尖のとんがつた帽子を阿彌陀にかぶつて、だぶ〳〵な皺くちやの服に天鵞絨のチキョッを着けたのは、美術家、といつた風に、大抵きまつてゐるのだ。
警視廳の探偵はどうかといふと、妙に底光りのする眼付をして、口髭を短く刈込んで、苦味ばしつ